茨城県教育財団文化財調査報告第57集

# 一般国道125号道路改良工事
# 地内埋蔵文化財調査報告書

## 田宮古墳群

平成2年3月

財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第57集

# 一般国道125号道路改良工事
# 地内埋蔵文化財調査報告書

## 田宮（たみや）古墳群

平成2年3月

財団法人　茨城県教育財団

# 序

茨城県は，産業，経済の発展に伴い，交通量の著しい増加による交通渋帯の緩和と地域の活性化をはかるため，県内の道路の整備を進めております。一般国道125号道路改良工事もその一環として計画されたものです。

このたび，財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，昭和62年度（10月～3月）に，一般国道125号道路改良工事実施区域内に所在する田宮古墳群の発掘調査を実施いたしました。

本書は，田宮古墳群の調査成果を収録したものであります。本書が考古学研究の資料としてはもとより，郷土の歴史解明への手がかりとなり，広く教育・文化の向上の一助として活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理にあたり，委託者である茨城県の御協力に対して，深く感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会，新治村教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力を賜わりましたことに対し，厚く感謝の意を表します。

平成2年3月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　礒田　勇

# 例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和62年度に実施した新治郡新治村に所在する田宮古墳群の発掘調査報告書である。

2　田宮古墳群の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 理事長 | | 川又友三郎 | ～昭和63年5月 |
| | | 礒田　勇 | 昭和63年6月～ |
| 副理事長 | | 礒田　勇 | ～昭和63年3月 |
| | | 小林　元 | 昭和63年4月～ |
| 常務理事 | | 滑川貞雄 | ～平成元年3月 |
| | | 小林　洋 | 平成元年4月～ |
| 事務局長 | | 坂場庸克 | ～平成元年3月 |
| | | 一木邦彦 | 平成元年4月～ |
| 調査課長 | | 青木義夫 | ～平成元年3月 |
| | | 石井　毅 | 平成元年4月～ |
| 企画管理班 | 班長 | 水飼敏夫 | 昭和62年4月～ |
| | 主任調査員 | 山本静男 | ～平成元年3月 |
| | 主任調査員 | 小河邦男 | 平成元年4月～ |
| | 係長 | 園部昌俊 | 昭和63年4月～ |
| | 主任 | 山崎初雄 | ～平成元年3月 |
| | 主事 | 富永　朗 | ～昭和63年3月 |
| | 主事 | 大部　章 | 昭和61年4月～ |
| | 主事 | 吉井正明 | 平成元年4月～ |
| 調査第三班 | 班長 | 石井　毅 | 昭和62年度 |
| | 主任調査員 | 斎藤弘道 | 昭和62年度調査，平成元年度整理・執筆 |
| | 調査員 | 西野則史 | 昭和62年度調査 |
| 整理班長 | | 加藤雅美 | 平成元年度 |

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，斎藤弘道が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成にあたり，人骨については国立科学博物館人類学研究部の馬場悠男先生，土師器・

須恵器については茨城県立歴史館の川井正一先生，土師質土器・陶器については鎌倉考古学研究所の手塚直樹・河野眞知朗・馬渕和雄先生のご教示を頂いた。

5　本書に使用した記号等については，第3章第2節の項を参照されたい。

# 目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査方法……1
　　1　調査区設定……1
　　2　基本土層の検討……2
　　3　遺構確認……2
　　4　遺構調査……3
　　5　調査経過……4
第２章　位置と環境……6
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……7
第３章　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法……12
　第１節　遺跡の概要……12
　第２節　遺構・遺物の記載方法……12
第４章　遺構と遺物……16
　第１節　古墳……16
　　1　第１号墳……16
　　2　第３号墳……25
　　3　第５号墳……27
　　4　第７号墳……35
　第２節　土坑……39
　第３節　溝・堀……60
　第４節　西側谷地形部の遺物……79
　第５節　その他の遺物……85
第５章　まとめ……91
終　章　むすび……96

# 挿　図　目　次


第１図　調査区呼称図……2
第２図　基本土層図……2
第３図　田宮古墳群周辺地形
　　及び周辺遺跡位置図……10
第４図　田宮古墳群遺構配置図……13～14
第５図　第１号墳墳丘測量図……17
第６図　第１号墳実測図(1)……19～20
第７図　第１号墳実測図(2)……22
第８図　第３号墳実測図……26
第９図　第５号墳墳丘測量図……28
第10図　第５号墳実測図(1)……29～30
第11図　第５号墳実測図(2)……31～32
第12図　第７号墳実測図(1)……36
第13図　第７号墳実測図(2)……37
第14図　土坑実測図(1)……61
第15図　土坑実測図(2)……62
第16図　土坑実測図(3)……63
第17図　土坑実測図(4)……64
第18図　土坑実測図(5)……65
第19図　土坑実測図(6)……66
第20図　土坑実測図(7)……67
第21図　土坑実測図(8)……68
第22図　土坑実測図(9)……69
第23図　土坑実測図(10)……70
第24図　溝実測図(1)……74
第25図　溝実測図(2)……75
第26図　溝・堀実測図(3)……76
第27図　出土遺物実測図(1)……77
第28図　出土遺物実測図(2)……78
第29図　出土遺物実測図(3)……80
第30図　出土遺物実測図(4)……81
第31図　出土遺物実測図(5)……82
第32図　出土遺物実測図(6)……83
第33図　出土遺物実測図(7)……84
第34図　出土遺物実測図(8)……86
第35図　出土遺物実測図(9)……87
第36図　出土遺物実測図(10)……89
第37図　田宮古墳群分布図……92


# 表　目　次


表１　田宮古墳群関連遺跡地名表……11


# 写真図版目次


ＰＬ　1　田宮古墳群全景
ＰＬ　2　第１号墳
ＰＬ　3　第１・３・５号墳
ＰＬ　4　第５号墳他
ＰＬ　5　第５・７号墳
ＰＬ　6　第７号墳
ＰＬ　7　第１～９号土坑
ＰＬ　8　第10～17号土坑
ＰＬ　9　第18～24号土坑
ＰＬ　10　第25～30号土坑
ＰＬ　11　第31～36号土坑
ＰＬ　12　第37～44号土坑
ＰＬ　13　第45～52号土坑
ＰＬ　14　第53・56・57号土坑
　　第１号溝・第２号堀
ＰＬ　15　第２号堀・第３～６号溝他
ＰＬ　16　西側谷地形部遺物出土状況
ＰＬ　17　古墳・土坑・溝・堀出土遺物
ＰＬ　18　西側谷地形部出土土器(1)
ＰＬ　19　西側谷地形部出土土器(2)
ＰＬ　20　西側谷地形部出土土器(3)
ＰＬ　21　石器・石製品
ＰＬ　22　土製品他

# 第１章　調査経緯

## 第１節　調査に至る経過

一般国道125号は，千葉県佐原市を起点として，茨城県内を南から西へ横断し，埼玉県熊谷市へ至る幹線道路である。県内では，東村，美浦村，阿見町，土浦市，新治村，下妻市，古河市を通過し，県内の総延長は99kmである。新治村藤沢，高岡地区の本道路は，道路沿いに人家が密集し，幅員を拡張することが極めて困難なため，茨城県は，現在の路線にほぼ並行するかたちでバイパスを建設する道路の改良工事を計画した。

工事に先立ち，昭和61年10月16日に，茨城県（土木部道路建設課）は，茨城県教育委員会あてに工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。同年10月20日に，茨城県教育委員会は，工事予定地内に２基の古墳の存在が確認されている旨を回答した。同年10月30日に，茨城県と茨城県教育委員会は，埋蔵文化財の取り扱いについて協議をおこない，更に同年11月６日・７日の両日にわたって，茨城県教育委員会は，工事予定地内の試掘調査を実施し，古墳以外にも包蔵地の存在を確認した。そこで茨城県教育委員会と茨城県は文化財保護の立場から，埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねたが，現状保存については困難と判断したため記録保存の措置を講ずることとなった。調査機関としては茨城県教育財団が紹介された。それを受けて，茨城県教育委員会と茨城県教育財団は，調査面積・調査範囲・現況等を把握するための現地踏査をおこない，昭和62年10月から昭和63年３月までの期間で発掘調査を実施することとなった。

茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し，昭和62年10月１日から発掘調査を実施することとなった。

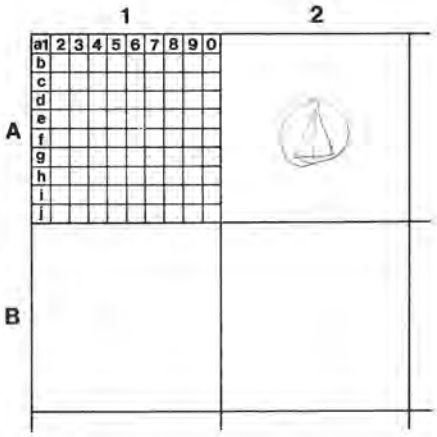
## 第２節　調査方法

### １　調査区設定

田宮古墳群の発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は，一般国道125号改良工事内におけるセンター杭№290を基準としておこない，調査区内に40m の方眼を設定し，大調査区とした。さらに，１つの大調査区を４ m 四方の小調査区に分割した。大調査区は，基準点から北方（磁北）へ40m，西方へ40m の点を起点として北から南へＡ～Ｂとし，西から東へ１～０とし，A1区，B0区等と表記した。小調査区では，北から南

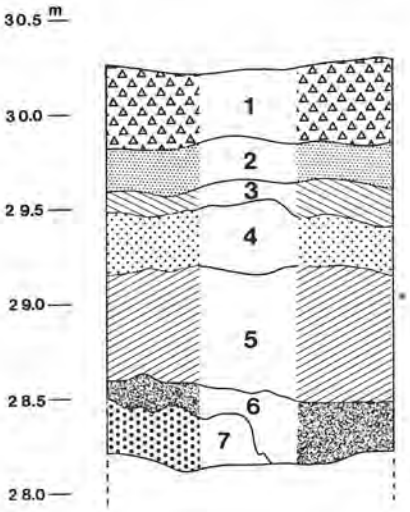
へa～j，西から東へ1～0とし，各調査区の名称はグリッドと呼称し，大調査区と小調査区を合わせた四文字でA2a1，B8c9のように表記した。




第1図　調査区呼称図

## 2　基本土層の検討

田宮古墳群における基本土層を調査するために，調査区の西側の平坦部にテストピットを設け，深さ2.2mまで掘り下げ，第2図に示すような土層の堆積を確認した。第1層は表土層で，30～40cmの厚さを有し，暗褐色を呈する。黒褐色土をまだらに含み，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含む締まりの弱い土層で，木の根が多くやわらかい。第2層は褐色土で，20～30cm前後の厚さを有し，暗褐色土，黒褐色土をまばらに含む。1層よりは締まるが，やわらかい土層である。第3層は，4層以下のローム層との漸移層で，10～20cmの厚さを有する褐色土層である。ローム粒子を中量，炭化粒子を極微量含み締まっている。第4層は，ソフトロームで，明褐色を呈し，締まっている。20～45cmの厚さを有する。第5層以下はハードロームで，オレンジ色ないし赤褐色のパミスを少量から中量に含み，硬く良く締まっている。第7層は特に粘性が強く，きわめて良く締まっている。第5層が60～70cmの厚さを有するが，以下の第6・7層は本来の厚さが不明である。




第2図　基本土層図

## 3　遺構確認

田宮古墳群においては，墳丘が明瞭に遺存するものは第1・5号の両墳にすぎず，第3号墳の墳丘部分は調査エリア外へ出ている。このため，伐開後の試掘は墳丘を失った古墳の存在等を予想して，トレンチ状に区画を設定して遺構の検出を試みた。その結果，第3号墳と第5号墳の間に古墳の主体部と浅い周溝を確認した。その他に溝や土坑と思われる落ち込みが確認され，表土

の厚さが東側で40～50cm，中央部で30～50cm，西側ではやや深くなり，60～70cmであることが判明した。この結果を踏まえ，担当者間で協議をおこない，調査期間が短いこと，表土が比較的厚く，試掘時での遺物の出土が少ないことを考慮して，墳丘の周囲を除く調査区全面を重機により表土を除去することにした。その後，遺構確認作業を進め，古墳の周溝・溝・堀・土坑を検出した。

調査区の西端部では，自然埋没と考えられる谷地形部を検出し，その中には多量の流れ込みの土師器・須恵器片が含まれていた。

## 4　遺構調査

古墳の調査は，墳丘を有する第５号墳については土層観察用ベルトを残して，墳丘全体を掘り下げたが，第１号墳については，墳丘および周溝部を断ち切るトレンチを十文字に設定し，これにより盛土状況の観察を実施し，埋葬主体部を検出し，調査する方法を採用した。第３号墳および第７号墳については，周溝部に適宜に土層観察用ベルトを残して掘り下げる方法をとった。

土坑については，大形のものは長軸・短軸の両方に土層ベルトを設け，四分割して調査し，小形のものは，長軸方向で二分割する方法で調査した。

溝・堀については，適宜に土層観察用ベルトを設けた。土層については，色調・含有物・締まり具合・粘性等をできる限り細かく観察し記録したが，整理・報告にあたっては，一部省略したものもある。色調の決定には，「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄著　日本色研事業株式会社）を使用した。遺物の取り上げについては，原則として位置・レベル・出土状態を図面あるいは野帳に記録したが，覆土については一括して取り上げたものもある。遺構の観察については，盛土および埋土の状況，壁・底面の状況に留意した。

遺構の実測については，平面図は水糸を１ｍ方眼に地張りして計測し，土層および断面図は水糸を適当な高さに水平に設定して計測した。しかし，古墳の周溝等の平面図は，一部平板測量にて実施した。

遺構番号は，調査した順に番号を付したが，古墳については，従来よりの呼称があるために第１・３・５号墳とし，調査区内にて検出した墳丘を失った古墳を第７号墳とした。なお，第２・４・６号墳は，調査区外に現存する。土坑については，57号まで番号を付したが，第54・55号は遺構と判断できなかったために欠番とした。

## 5　調査経過

田宮古墳群の調査は，昭和62年10月１日から翌昭和63年３月31日までの６か月間実施した。調査区域内には，竹林や桑畑が多く，大木の切株もみられ調査の困難が予想されたため，事前の準備を周到に進めた。以下，発掘調査の経過を記述する。

10月上旬　発掘調査を開始するため諸準備をおこなう。調査区域内の清掃・除草・整地等の作業を実施しながら，発掘調査の円滑な推進と作業の安全を祈って，10月８日に関係者列席のもとに「鍬入れ式」を挙行した。

10月中旬　竹林，桑株の伐開，焼却を進め，テストピットにより土層の観察をおこない，10月13日より試掘を開始する。10月15日には石棺が確認される（第７号墳）。

10月下旬　第５号墳の墳丘の雑木，竹林および桑株の伐開，焼却を継続しながら，試掘を進める。遺跡西端部で自然地形の谷部に土師器・須恵器の包含層を確認する。

11月上旬　方眼杭打ちを行い，試掘を継続する。雨の日が多く，調査の進捗状況は順調ではない。

11月中旬　試掘トレンチの土層の写真撮影・実測・コメントを実施する。この段階で第１・５・７号墳の周溝の一部が確認される。

11月下旬　引き続き作業を継続し，11月30日からは第５号墳の墳丘の調査にかかる。

12月上旬　第５号墳の墳丘の掘り下げを行い，旧表土下に焼土，炭化物が散在する整地面を認める。７日より重機による表土除去を開始し，８日からは遺構確認作業も実施する。

12月中旬　表土除去および遺構確認作業を進め，併行して第５号墳の墳丘と周溝の調査を行う。周溝は幅広く，深さもあるため人力による掘削は非常に困難であった。

12月下旬　表土除去は23日に終了し，遺構確認作業も24日に完了した。第５号墳の周溝の掘削は継続する。一方，西側の谷地形部のB2区からは須恵器が一括して出土し，これを取り上げる。25日をもって，年末年始の休暇に入る。

１月上旬　５日より調査を再開する。降雪があったが，調査区全体の遺構確認状況の写真撮影および図面の作成を行う。西側谷地形部の包含層の調査を進める。

１月中旬　11日より本格的な遺構調査に入り，溝の掘り込みから始める。14日からは土坑の調査も実施する。第５号墳の方は，墳丘・周溝の土層の写真撮影・実測にかかる。

１月下旬　25日からは第３号墳の周溝の調査を開始し，27日からは第７号墳の主体部の掘り込みを始める。溝・土坑の調査も併行して進めた。

２月上旬　第３・７号墳の調査を中心に作業をおこない，土坑の平面図および断面図の作成や写真撮影を行う。９日から第１号墳の本格的調査に着手する。

２月中旬　第１号墳を中心に調査を進める。土坑の大半は，掘り込みを終了する。

2月下旬　引き続き第1号墳の墳丘・周溝の調査を行い，土層の実測・コメントを実施した。

3月上旬　第1号墳の調査を継続し，第5号墳の周溝・平面図および断面図の作成，第7号墳の主体部の板石の取り上げを行う。第1号墳の西側の土坑の調査を実施する。

3月中旬　調査も終了に近づいた11日に，第1号墳の主体部が検出された。精査の結果，盗掘を受けていて人骨が僅かに遺存した以外，遺物は無かった。更に第1号墳の西側周溝部の土層ベルト内から1体の人骨が出土したが，本墳に伴うものとは考えにくい。この間，12日には現地説明会を開催し，50余名の参加者があった。15日には航空写真を撮影した。

3月下旬　第1号墳の墳丘・周溝および主体部の図面作成と写真撮影を実施し，25日に一切の現地調査を完了した。

# 第２章　位置と環境

## 第１節　地理的環境

田宮古墳群は，新治郡新治村大字高岡字内山2173ほかに所在し，新治村役場の西方約１kmに位置している。新治村は，茨城県の南西部，筑波山の南に位置し，東は土浦市，千代田村と，西および南はつくば市と，北は八郷町とそれぞれ村域を接している。現在の新治村は，昭和30年に藤沢村，山ノ荘村，斗利出村の３村が合併したもので，村の総面積は34.12km²である。

新治村の北部は筑波山塊の南端にあたり，中央部は洪積台地で畑地が多く，一方，南部は桜川に沿った低平地で，肥沃な水田地帯となっている。以前，本村は純農村地帯で，野菜類の出荷が多く，養蚕も盛んであったが，最近は，つくば研究学園都市の発展や常磐自動車道の開通に伴い，都市化の傾向がみられつつある。

村内の地形をみると，筑波山塊からつづく北部の丘陵地と中央部の台地と南部の低平地のほぼ３つの地域に分かれる。台地は筑波山塊の南東麓から霞ヶ浦へ向かって突出する半島状を呈する新治台地に属しているが，新治村にかかる部分はその南部に位置する。新治台地の北部は，東茨城台地の南部に連なり，恋瀬川の谷によって限られている。同台地の南部は桜川の谷によって筑波・稲敷台地と区分されている。本台地は標高20～30m で，東茨城台地よりはやや低く，筑波・稲敷台地よりは若干高い傾向を示している。台地上はほぼ平坦であるが，ところどころに波状の起伏を有している。桜川の沖積低地の水田面の標高は５～６ m で，台地上との比高は25m 前後である。

村内には，南端部を東流する桜川の他に，村域の中央部を天の川が東流しており，両河川に挟まれた台地上は標高27～31m ほどで平坦であるが，両河川の支流により樹枝状に開析されている。

村内には，国道125号が南部を東西に走り，県道大穂千代田線が北東から南西にかけて貫いている。一方，村の最東端をかすめて常磐自動車道が通り，国道125号と交叉している。

田宮古墳群は，国道125号が桜川低地にむけて下り始める北側の台地上に位置している。この台地は標高30～31m で，南・西側には桜川低地の水田が望まれる。この台地は古墳群の西端部に北方から入り込む小支谷がある以外はほぼ平坦で，その台地上に古墳が散在している。今回の調査は，国道125号を常磐自動車道の土浦北インターチェンジへ直接接続するための改良工事に伴うものであり，田宮古墳群６基のうち，第１・３・５号墳の一部が調査区にかかり，第２・４号墳は南側に，第６号墳は北側にはずれている。調査区は道路幅のために細長く，大部分は幅25m で，西端部のみ幅が40m 弱に広がっており，長さは350m を測る。調査面積は8,811m²で，現況は桑畑および竹林である。

## 第2節　歴史的環境

新治村には，今から約1万年以上も前の先土器時代から中世にかけての遺跡が数多く所在している。当村内には，桜川・天の川の両河川が貫流し，原始・古代から水上交通が発達してきたものと思われる。

以下，田宮古墳群から検出された遺構・遺物と関連するものを中心に当村内の遺跡について時代を追って記載していく。

先土器時代の遺物は，大畑本田，下坂田，高岡根の3か所で確認され，石槍，掻器，剝片が知られている[(1)]が，発掘調査は実施されていない。

縄文時代の遺跡は数多く，貝塚も前期から後期にかけて形成されている。草創期の遺跡は少なく，撚糸文土器片がごく僅かにみられるにすぎない。早期では沈線文系の田戸下層式土器が2か所で出土し，条痕文系土器群も3か所で確認されている[(2)]。前期に入ると，遺跡の数は増加する。前半の羽状縄文系土器群を出土する小地点貝塚が3か所ある。上坂田北部貝塚，上坂田寺裏貝塚，下坂田鹿島前貝塚である。上坂田北部貝塚は，昭和56年12月から翌年1月にかけて筑波大学によって発掘され，関山式土器を伴う竪穴住居跡内に堆積したブロック貝塚で，東西約3 m，南北約2.5 mの規模で，厚さ30cm前後であった。貝種はハイガイを主体とし，ヤマトシジミがこれに次ぎ，少量のマガキ，オキシジミが混在する[(3)]。筆者の踏査では，貝種にハマグリが確認され，その中に2点の貝刃が含まれている[(4)]。下坂田鹿島前貝塚も，筆者踏査では，ハイガイ，マガキ，ヤマトシジミ，アサリ，オキシジミ，ハマグリの6種が検出され，ヤマトシジミが主体で，ハマグリ，ハイガイが続き，オキシジミ，マガキ，アサリはごく少量である。土器は前期前半のものである。前期後半の遺跡も4か所ほど存在するが，貝塚は伴っていない。中期の遺跡数は更に増加し，10か所以上に及ぶ。大畑本田貝塚からは，石斧・石棒・石槍などの石器類の他に土偶・耳飾り・土器片錘などの土製品や釣針・銛や浮袋の口といわれる器具などの骨角器類が検出されている。これらの遺物は縄文時代の中期から後期にかけてのものと思われる。大畑本田貝塚の時期は明らかになっていない。筆者の踏査時には，サルボウ，アサリ，ヤマトシジミの3種を確認したにすぎない。後期から晩期にかけての遺物を多く出土している下坂田貝塚は，ヤマトシジミ主体の主淡貝塚で，シオフキ，ハマグリなど12種の貝が含まれている。自然遺物も豊富で，イノシシ，シカの獣骨の他に，クロダイ・ボラ・サメ・ウナギ・ウグイなどの魚骨も検出されている。なお，『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』には新治村太子堂出土の独鈷石が図示されている。また，東京国立博物館には本村藤沢出土の完形の石皿が展示されており，本村の縄文文化を知る上での手がかりを与えてくれている。

弥生時代の遺跡は，村内では数多く発見されているが，そのほとんどは土器の小破片のみで詳

細は不明である。慶応義塾大学考古学研究会による分布調査の報告では中期後半と考えられるものが若干下坂田地区で発見されているが，その他は後期のものである。『図説新治村史』には縄文や櫛描文で飾られた弥生時代後期の土器２点が掲載されている。

古墳時代の新治地区には，数多くの集落や古墳が形成されている。集落跡の調査は実施されていないが，土師器の出土は多く，東海系のＳ字口縁台付甕の出土もみられる。[5] 古墳は多く築造されているが，方墳・前方後方墳などの方形を基調とするものの例はない。村内最古と考えられる古墳は，坂田古墳群中の武具八幡古墳で，江戸時代末期に掘り出された眉庇付冑・短甲・挂甲などから５世紀後葉のものと位置づけられている。[6] これに先行する古墳の存在は明らかになっていないが，墓としては上坂田北部貝塚から１基の方形周溝墓が検出されている。[3]

新治村には，『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』の記載によれば，10古墳群で，円墳70基，前方後円墳12基と単独の円墳１基の合計83基の古墳が存在したとされている。このうち確実に前方後円墳とされるものは，高崎山古墳群中の主墳（全長約50～60m）で，村内一の規模を有する。その他，沢辺古墳群中の１基は全長25m 程度の小規模墳である。

本村内でこれまでに調査報告された古墳は，塚山古墳と「美豆良」の発見で一躍有名になった武者塚古墳の２基にすぎない。塚山古墳は，東西20m，南北12m，高さ２ m の円墳で，主体部の箱式石棺からは５体分の人骨と直刀・鉄鏃・刀子・環が出土している。武者塚古墳は，墳丘を失っていた径23m の円墳で，飾大刀，直刀などの刀剣類と玉類などが検出されている。塚山古墳は６世紀中頃，武者塚古墳は７世紀後半の築造と想定されている。

その他，本村内では数多くの箱式石棺の検出が報じられており，武者塚古墳の北東側に所在した武者塚２号墳[6]や本郷の城附古墳の石棺が図示されている。[8]

本村の古墳は，古墳群の性格がある程度解明された坂田古墳群（武者塚古墳・同２号墳・塚山古墳・武具八幡古墳を含む）以外は，埴輪を伴うものが多く，箱式石棺や横穴式石室を主体部とする点などが知られているにすぎない。各古墳群とも破壊されたものが多く，正確な数や墳形すら明らかになっていないものが多い。

村内の古墳からは埴輪の出土が多く，円筒埴輪の他に人物や水鳥・鶏などがみられる。

本村で出土した古墳時代の土器は，土師器を主体とするが，須恵器も若干出土している。最古のものとしては田宮梶の宮遺跡出土の樽形瓶[9]があげられる。

本村内では奈良・平安時代の遺跡も多く存在するようで，天の川流域を中心に，桜川の流域にも分布している。集落跡の調査例は無いが，須恵器の窯跡は発掘されている。現在，村内には９か所の須恵器の窯跡が確認されており，田宮須恵器窯跡を除いてすべて天の川流域に属している。

小高・小野地区の窯跡は，高井悌三郎氏により調査されており，前者は８世紀後半，後者は９世紀後半のものと位置づけられている。[10]

古代の新治村を語るものとして，東城寺の存在は逸することはできない。古瓦と経塚からは有力者の存在が推定される。これ以降，中世には法雲寺や多くの寺院が建立され，仏教文化の発展がみられる。一方，村内には藤沢城，甲山城，田土部館などの中世城館跡が残されている。

以上に記したように村内には数多くの遺跡が存在しており，古くから人々が生活していた痕跡を連綿と辿れる歴史的環境を有している。

注

(1) 加藤晋平他『図説新治村史』新治村史編纂委員会　1986年

(2) 慶応義塾大学考古学研究会「茨城県新治郡新治村内遺跡群の調査」『研究報告』2　1982年

(3) 前田潮「上坂田北部貝塚」『筑波古代地域史の研究』筑波大学　1981年

(4) 斎藤弘道『県内貝塚における動物遺存体の研究（2）』茨城県歴史館　1980年

(5) 西宮一男「新治郡新治村梶の宮の土師器」『茨城県の土師器集成』第2集　茨城考古学会　1968年

(6) 増田精一他『武者塚古墳』新治村教育委員会　1986年

(7) 樋口清之他「茨城県新治郡新治村塚山古墳発掘調査報告」『上代文化』第37輯　国学院大学考古学会　1967年

(8) 大森信英「箱式石棺実測図集成」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』茨城県史編さん原始古代史部会　1974年

(9) 黒沢彰哉「新治村田宮梶の宮遺跡出土の須恵器」『婆良岐考古』第4号　婆良岐考古同人会　1982年

(10) 島田増次郎「常陸国新治郡小野製陶所遺跡」『東京人類学会雑誌』第18巻第199号　東京人類学会　1902年

高井悌三郎「新治郡小野窯跡」『日本考古学年報』5　日本考古学協会　1955年

第３図　田宮古墳群周辺地形及び周辺遺跡位置図

表１　田宮古墳群関連遺跡地名表

| 図中番号 | 種　別 | 遺　跡　名 | 備　　考 | 図中番号 | 種　別 | 遺　跡　名 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 貝　塚 | 大畑本田貝塚 | 土浦二高発掘 | 23 | 古　墳 | 武者塚古墳 | 筑波大学発掘 |
| 2 | 〃 | 上坂田北部貝塚 | 筑波大学発掘 | 24 | 〃 | 愛宕塚古墳 | |
| 3 | 〃 | 上坂田寺裏貝塚 | | 25 | 〃 | 高岡根古墳 | 湮滅 |
| 4 | 〃 | 下坂田貝塚 | 筑波大学発掘 | 26 | 〃 | 小高天神向古墳 | |
| 5 | 〃 | 下坂田鹿島前貝塚 | | 27 | 〃 | 本郷城附古墳群 | 一部湮滅 |
| 6 | 古　墳 | 本郷三合塚古墳 | ２基 | 28 | 窯　跡 | 小野須恵器窯跡 | 高井悌三郎氏調査 |
| 7 | 〃 | 本郷城附館遺跡 | 残存１基 | 29 | 〃 | 小高須恵器窯跡 | 〃 |
| 8 | 〃 | 大志戸古墳群 | ４基 | 30 | 〃 | 東城寺須恵器遺跡 | |
| 9 | 〃 | 本郷原山古墳群 | 残存３基 | 31 | 〃 | 東城寺桑木須恵器窯跡 | |
| 10 | 〃 | 沢辺南方古墳群 | 残存６基 | 32 | 〃 | 小高村内須恵器窯跡 | |
| 11 | 〃 | 高崎山古墳群 | 残存５基 | 33 | 〃 | 永井寄居須恵器窯跡 | |
| 12 | 〃 | 田土部稲荷古墳 | １基 | 34 | 〃 | 小野八百田硲須恵器窯跡 | ２か所 |
| 13 | 〃 | 藤沢東町古墳群 | 湮滅 | 35 | 〃 | 田宮須恵器窯跡 | |
| 14 | 〃 | 上坂田古墳群 | 残存１基 | 36 | 城館跡 | 永井城館跡 | |
| 15 | 〃 | 坂田古墳群 | 10数基（下坂田古墳群） | 37 | 〃 | 甲山城跡 | |
| 16 | 〃 | 塚原古墳 | １基（塚山古墳）土浦二高発掘 | 38 | 〃 | 藤沢城跡 | |
| 17 | 〃 | ろくろうじ古墳 | １基 | 39 | 〃 | 田土部館跡 | |
| 18 | 〃 | 小高熊野塚遺跡 | １基 | 40 | 〃 | 田宮館跡 | |
| 19 | 〃 | 小高寄居古墳群 | ３基 | 41 | 〃 | 上坂田館の内遺跡 | |
| 20 | 〃 | 田土部明神古墳群 | ２基 | 42 | 〃 | 高岡丸の内館跡 | |
| 21 | 〃 | 沢辺古墳群 | ２基 | 43 | 包蔵地 | 田宮梶の宮遺跡 | |
| 22 | 〃 | 坂田稲荷山古墳群 | | | | | |

# 第３章　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

## 第１節　遺跡の概要

当古墳群は，前方後円墳１基，円墳５基からなるものとして周知されていたが，今回の調査にかかるのは第１号墳の主墳火矢塚古墳と第３・５号墳の一部であった。調査の結果は，第１・３・５号墳の他に墳丘を失った古墳１基が確認され，第７号墳と命名した。その他に土坑55基，溝・堀６条が検出された。

調査した古墳４基のうち主体部が検出されたものは第１・７号墳の２基にすぎず，いずれも盗掘されており，目立った出土品は見られなかった。時期については墳丘や周溝からの出土土器も少なく，判定がむずかしいが，後期古墳と考えられる。

土坑には楕円形，長方形など定形的な形態を呈するものと大形で不定形を呈するものなどがあり，遺物を伴うものはごく少ない。従って，時期や性格が不明のものが多い。

溝・堀６条のうち遺物を伴うものは第２号堀だけで，土師質土器の皿などを伴っているので中世の所産と考えられる。その他の溝は，遺構に伴うと思われる遺物の出土は無く，時期は不明である。

これらの遺構は，遺跡内に散在しており，密集するような部分はみられない。遺跡西端部には自然の谷地形部が検出され，８～９世紀に属する大量の須恵器・土師器類が出土しているが，流れ込みによるものと判断される。

出土遺物は，遺物収納箱に93箱分である。内容は，古墳主体部の石材等が63箱，土師器・須恵器等の土器や石器・石製品・鉄製品などが30箱である。

## 第２節　遺構・遺物の記載方法

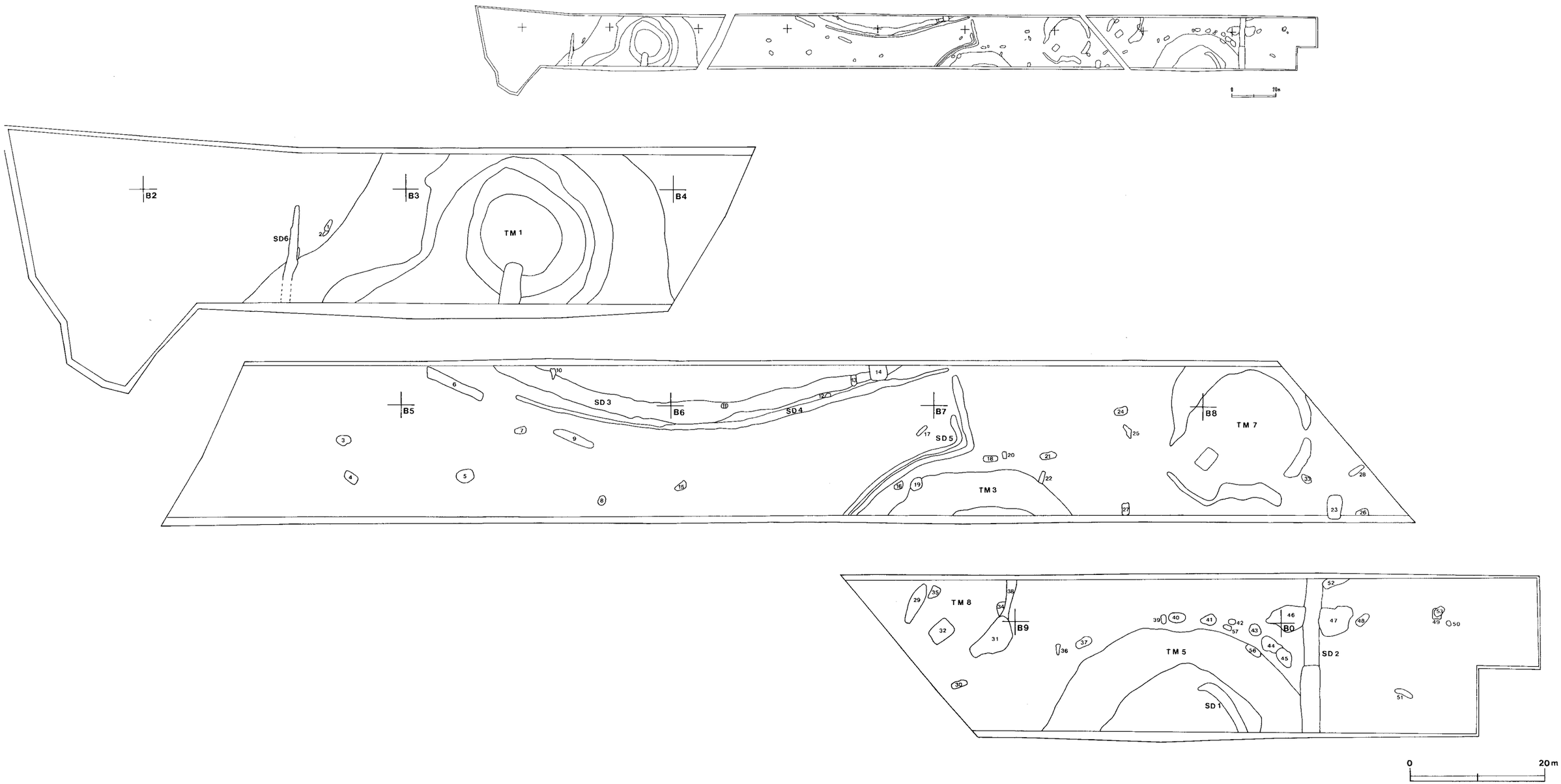
本書では，遺構・遺物の記載について，以下のような方法とした。

(1)　使用記号

古墳……TM　　土坑……SK　　溝・堀……SD

(2)　土層分類

当遺跡で検出された遺構の土層の色調については，「新版標準土色帖（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用して判定し，表示のごとく分類し，０～14の番号を付して図面中に示した。なお，土層中の含有物や粘性，締まり具合いについては，本文中で説明した。




第4図　田宮古墳群遺構配置図

(3) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

○ 各遺構は，原則として縮尺20分の１の原図をトレースして版組し，それを更に３分の１に縮小して掲載した。

古墳の墳丘・周溝等については，縮尺100分の１の原図をトレースし，それを更に適宜に縮小して掲載した。

水糸レベルは，同一レベルの場合に限り１か所の記載で表し，それ以外は個々に表示することにした。単位はmである。

(4) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

○ 土器の実測図は，中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

土器拓影図は，右側に断面を示した。

遺物は，原則として３分の１に縮小して掲載したが，遺物の大きさ・形状などにより２分の１などの縮尺を使用した場合もある。

| 番号 | 土色名 | 色相（Hue） | 明度／彩度 |
|---|---|---|---|
| 0 | 黄褐色 | 10 YR | 5/6 |
| 1 | 褐色 | 7.5YR<br>10 YR | 4/3 4/4 4/6<br>4/4 4/6 |
| 2 | にぶい褐色 | 7.5YR | 5/3 |
| 3 | 灰褐色 | 7.5YR | 4/2 |
| 4 | 暗褐色 | 7.5YR | 3/3 3/4 |
| 5 | 極暗褐色 | 7.5YR | 2/3 |
| 6 | 黒色 | 7.5YR | 1.7/1 2/1 |
| 7 | 黒褐色 | 7.5YR<br>10 YR | 3/1 2/2 3/2<br>3/2 |
| 8 | 暗赤褐色 | 5 YR | 3/2 3/6 |
| 9 | 赤褐色 | 5 YR | 4/8 |
| 10 | 明赤褐色 | 5 YR | 5/8 |
| 11 | にぶい赤褐色 | 5 YR | 4/3 4/4 |
| 12 | 明褐色 | 7.5YR | 5/6 |
| 13 | にぶい黄褐色 | 10 YR | 5/4 |
| 14 | にぶい黄橙色 | 10 YR | 6/4 |

# 第４章　遺構と遺物

## 第１節　古　　墳

当遺跡からは４基の古墳が検出されている。墳丘を有するものが第１・５号墳の２基，墳丘がエリア外に存在するものが第３号墳，墳丘を全く失っているものが第７号墳の各１基である。

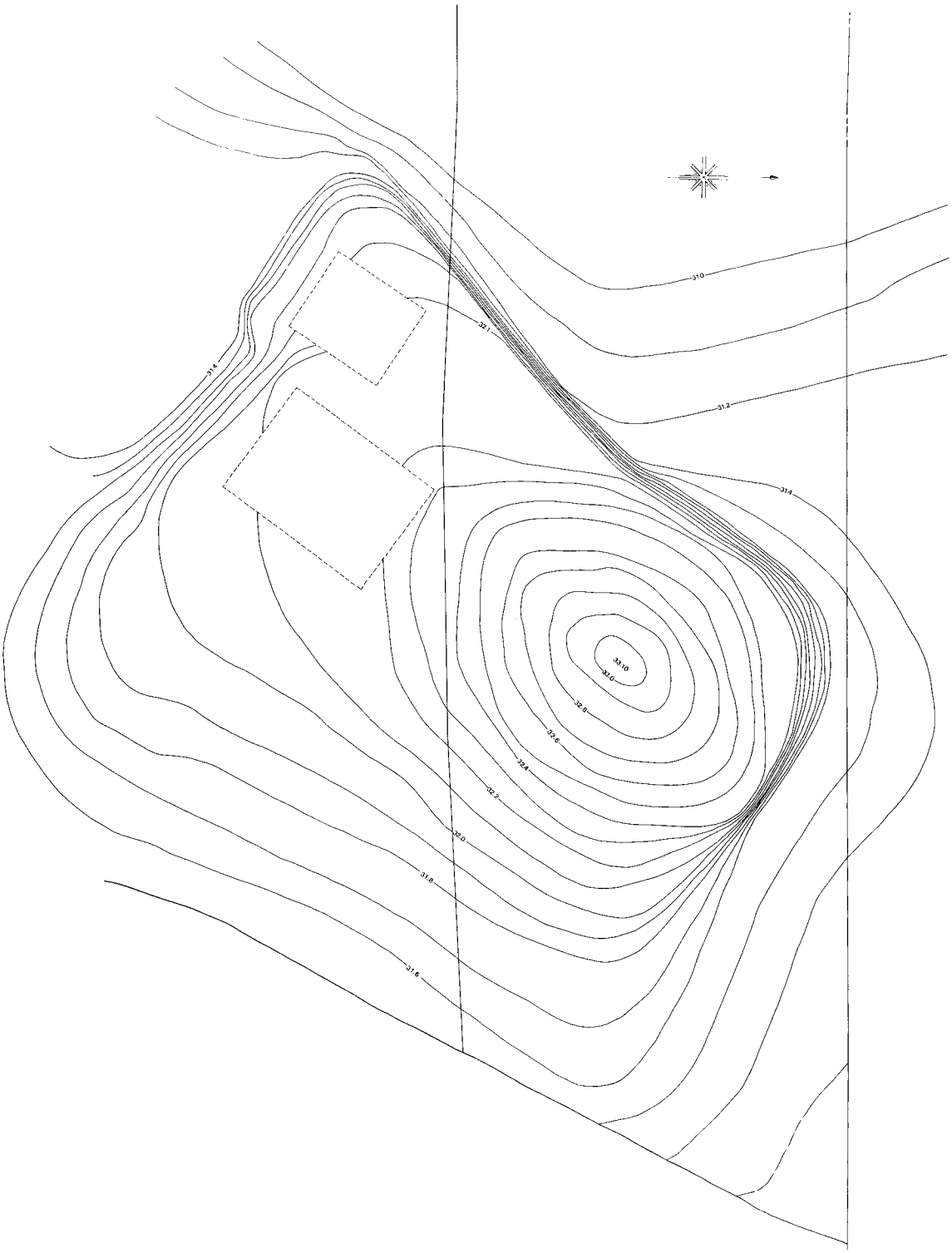
### １　第１号墳

本墳は，調査区の西側のA2・A3・B2・B3の４つの大グリッドにまたがって位置する前方後円墳で，田宮古墳群中の主墳とされるものである。本墳は火矢(ひや)塚という別称を有するが，これは昔この地が戦場となった時に，高岡の法雲寺にむけて火矢を放ったという言い伝えに由来している。

古墳の現況は桑畑と宅地になっており，全長約45m，高さ約2.3mである。本墳は，大正年間[1]ないし昭和初期[2]に発掘され，勾玉，管玉などの玉類や甲冑などの武具類が相当数出土したと言われているが，現品の所在は確認できていない。調査の際の聞き取りによれば，第２次世界大戦後すぐに，付近の学校の先生が生徒達と共に本墳を発掘したというが，詳細は不明である。また，本墳は開墾や耕作および宅地化により変形が著しく，調査時には前方部は宅地となり，物置き小屋が建っていた。後円部は桑畑となり，表土の流出が著しい。墳頂部の南側にはイモ穴が多く掘り込まれていた。

本墳は，前方部を南西側にむけており，西側に谷津部を有する台地の端部に位置している。今回の調査範囲は，後円部の大半と括れ部の一部に相当し，墳丘の土層は墳頂部を十文字状に断ち割るように幅２ｍのトレンチを入れて観察した。この結果，墳丘上の表土は頂部で薄く５～20cmほどで，裾部で40～65cmと厚くなる傾向があり，表土の流動の著しさを示している。表土を全て除去したところ，墳丘は２段に築成されていることが判明した。上段は径11.0～12.5m，下段は17.0～18.0mの不整円形をしている。上・下段の段差は20～30cmほどあり，東側には明瞭な段差が残っているが，北西・北東・南西・南東側は傾斜が緩くなり，段差は不明瞭である。盛土の流出が原因と考えられる。

墳丘は各所に撹乱を受けているが，旧表土層はほぼ水平な面として明確に確認され，その上面にはあたかも「土もっこ」一杯分の土を置いたような状況が観察できた。その上に黒褐色土や明褐色・黄褐色を呈するローム土が層状を呈して積まれており，全体的にはきわめて良く締まっている。旧表土から現存の墳頂部までは約1.2～1.3mを測り，ほぼ水平にローム土が積まれ，下位と中間部に黒褐色土がブロック状に挟まれている。盛土の積みあげ方は後記する第５号墳ほど細かくはない。



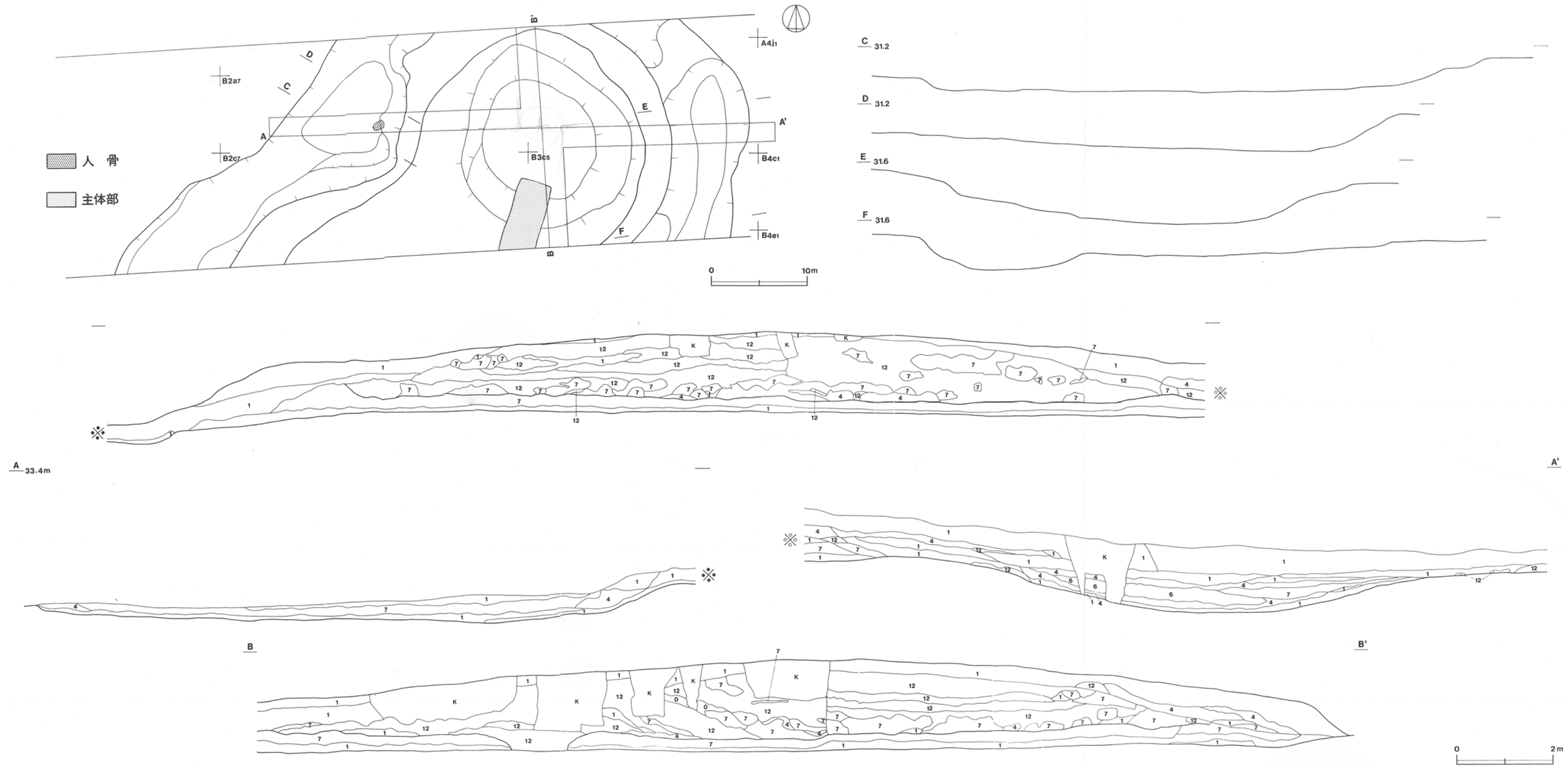

第５図　第１号墳墳丘測量図

周溝は，調査区域内においては墳丘を巡るように検出されており，西側の括れ部では墳丘寄りで屈曲が強くなっている。北側の周溝はエリア外となっている。本墳の周溝は，全体的にみると幅広く浅いものと表現できる。幅は東側で6～10m，西側で6～12mを測る。最大幅の部分はいずれも括れ部に当る。東側の周溝は壁・底面ともロームで，壁は比較的明瞭に立ちあがっており，底面は南から北へむけて45cmほども下っている。深さは，浅い所でも60～70cm，最も深い所では110cmも掘り込まれているが，北東側には幅6.5m，長さ3.0～5.5mの不整形の陸橋部と考えられる部分が検出されている。この部分は掘り込みが浅く，40～50cm程度である。西側の周溝は，墳丘寄りの内側の立ちあがりは比較的明瞭で外傾するが，外側は浅く不明瞭で5～10cm程度しか確認できない。内側は45～55cmの深さがあり，外側にむかって30～20cmと浅くなる。底面はロームで締まりがあり，緩い起伏を有する。中央部が若干低くなるが，極端な凹みは認められない。

周溝の覆土は，東側では表土を含めた上位が褐色土，中位が暗褐色土，黒褐色土，黒色土，暗褐色土の順に凹レンズ状に堆積する暗い色調の土層で，下位の底面近く厚さ5～15cmほどが褐色土となる。含有物はローム粒子が少量から中量，炭化粒子・焼土粒子が極微量含まれており，底面近くはローム粒子が粗くなっている。各層とも締まりがあり，典型的な自然堆積の土層を呈している。西側の覆土も基本的には東側に共通するが，浅いため褐色土，黒褐色土，褐色土と整然とした層を示し，外側の壁寄りに暗褐色土が部分的にみられる。

なお，西側周溝部に設けた土層ベルトを除去中に，墳丘寄りのB2b0・B3b1区にかけての部分で右側臥屈葬の人骨が1体検出された。頭位は北東方向を指し，骨端部に欠損はみられるものの骨自体の遺存状態は良好であった。出土状況の写真撮影・実測後に取り上げた。人骨は地山面を4～12cm掘り込んだ長径124cm，短径90cmの楕円形を呈する浅い土坑中に埋葬されていた。この人骨に伴うと思われる遺物は全く出土していない。国立科学博物館馬場悠男先生の鑑定によると，この人骨は成人の男性で，20代後半から30代にかけての年令と考えられ，筋力の発達は弱く，肉体労働者的ではないとのことである。また，この人骨は，周溝の酸性土壌中に遺存していたにもかかわらず，比較的良く残っていたことから考えて，古墳に伴うものとは思われず近世後期から近代にかけてのものと推測される。

主体部発見の端緒は，墳丘断ち割りの南側トレンチの西壁土層セクションの実測中に，旧表土を掘り下げた明褐色のロームが主体で粘土小ブロックを含む層が発見されたことによる。主体部は，本墳の後円部から前方部への括れ部のほぼ中央に位置し，横穴式石室と判断される。羨道部は南側のエリア外へ延びていて全容は把握できなかった。主体部の土層観察のために十字状の土層ベルトを設けたが，玄室部および前室部は著しい撹乱を受けていた。現存する主体部の掘り方の最大長は約6.6m，最大幅は3.4mを測り，確認面からの深さは東側で110～130cm，西北側で160～180cmである。長軸方向はN－13.5°－Eを指し，僅かに東に振れている。主体部は玄室と前

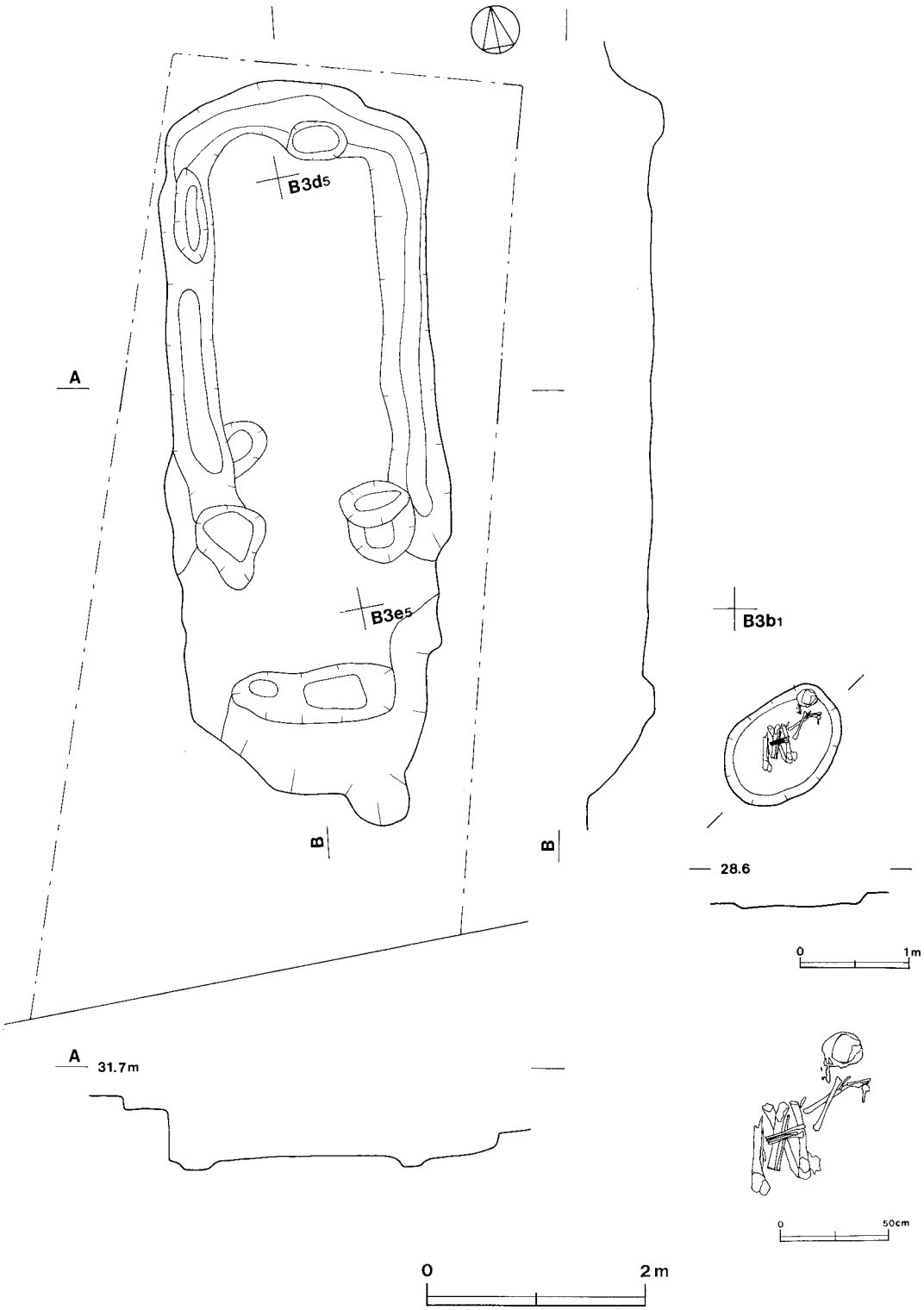



第6図　第1号墳実測図(1)

室に分れ，玄門部の左右には閉塞石を据えたと考えられる75×55cm，深さ15～20cmの凹みが認められている。また，玄室部には幅20～45cmで，断面が凹状を呈する溝が三方に巡る。底面には部分的に断面形がV字状を呈し，底面幅が５～10cmと狭くなる個所もある。深さは８～12cm程度で底面・側面ともきわめて硬く締まっている。これらの溝は石抜き痕と考えられる。また，前室の入口部分にも長さ150cm，幅50cm，深さ10cmの浅い凹みが認められたが，これは羨門の閉塞石の痕跡を示すものと思われる。前室・玄室ともに底面はきわめて硬く踏み締められており，ほぼ平坦な面を呈している。前室から羨道部へは外傾して立ちあがり，約50cmほどの段差を有する。玄室の規模は石抜き溝と思われる溝の内側で長さ約3.2m，幅1.5m を測り，かなり大形のものと考えられる。石抜き溝と思われる溝の外側には各所に石材の裏込めとして使用されたと思われる粘土が多量に遺存していた。粘土は北東・北西の両コーナー部と西側の中央部やや北寄りには底面からの高さ100～130cm，幅70～80cm，厚さ10cm前後に貼り付けられており，玄門部の両側の壁寄りや南西・南東コーナー部にも高さ40cm，幅110cm，厚さ10cmほどの粘土が認められている。その他の側面には粘土とローム土，少量の黒褐色土が互層的に積まれており，石室の構築はかなりしっかりとしたものであったことが推測される。また，北西コーナー部の溝にかかってと玄門部東側の南側壁寄りには雲母片岩の大石が据えられたように遺されていた。

主体部からは須恵器の甕等の破片が若干出土しているが，時期が異なり本墳に伴うものとは考えられない。玄室部の奥には雲母片岩片を積みあげた石積みがあり，その上面から32cm下に設けられた石囲いの中に笠間焼の褐色釉の小形甕が正位で納められていた。この甕には別種の蓋が付いており，その中には骨片が入っていた。甕の上には平石１枚と小石２～３ケがのこっていた。甕のすぐ西側からは馬歯が若干出土している。この甕は，本墳が大正から昭和初期に発掘された時に安置されたものと推定される。甕中の骨片については前出の馬場先生に鑑定を依頼したところ，人骨らしきものと明らかな獣骨片が混在しているとのことであり，馬歯と関連づけても良いと思われる。主体部の覆土中にはきわめて多量の雲母片岩の小片が混在しており，その量は長さ60cm，幅45cm，深さ20cmの遺物収納箱で20箱以上におよぶ。これらは主体部に使用されていた石材が盗掘の際に破砕されたものとも思われるが，当初から細かくして積みあげられていたことも考えられる。但し，底面に敷かれていた痕跡はない。

最後に本墳からの出土遺物について記載する。本墳の表土は全て除去したが，この中には内耳土器，灯芯皿，陶器，土鍋，砥石などの破片や土師器・須恵器・縄文土器片まで含まれていた。また，北西側の周溝の底面近くからは内黒の土師器の坏１点が正位で出土しているが，周溝の埋没過程で流れ込んだものと考えられる。本墳に伴うと思われる遺物は，墳丘中央部の旧表土下約10cmほどの位置から出土した土師器の埦の破片数点で，内外面とも赤彩が施されているが，内面の剝落が著しい。




第７図　第１号墳実測図(2)

本墳は主体部が盗掘を受けており，墳丘や周溝からの出土遺物もきわめて少ない。従って本墳の時期を推定することはむずかしいが，僅かに伝えられる出土遺物の内容（玉類や武具類）や主体部の形態などからみると，古墳時代後期の6世紀代のものとすることが妥当と思われる。

**第1号墳出土遺物**（第27図1～15）

1は，墳丘中央部の旧表土下約10cmほどから出土した土師器の埦で，内外面とも赤彩されている。体部から内湾して立ちあがり，口縁部は若干内傾している。口縁部内外面は横ナデ，体部外面は丁寧なミガキが施され，内面は剝落が著しい。胎土は砂粒・雲母・石英粒を含み，焼成は普通で，色調はにぶい赤褐色を呈している。推定口径13.2cm，現存高4.4cmである。

2は，墳丘北東側の表土中から出土した土師器の坏の口縁部片で，内外とも赤彩されている。底体部から弱い稜をもちながら外傾して立ちあがっている。内外面とも横ナデが施されている。胎土は砂粒・雲母・長石を含み，焼成は普通で，色調は赤色を呈している。推定口径11.0cm，現存高3.7cmである。

3は，南東側の周溝の覆土中から出土した土師器の埦の口縁部片で，内外面とも赤彩されている。体部から内傾して立ちあがり，口縁部は直立している。内外面とも横ナデが施されている。胎土は砂粒・雲母・長石を含み，焼成は普通で，色調は赤褐色を呈している。推定口径10.6cm，現存高3.4cmである。

4は，主体部の玄室内の撹乱土中から出土した内黒土師器の坏で，底部から口縁部までの一部が残る破片である。平底から内湾して立ちあがり，口縁部がわずかに外反する。内面はナデの後にミガキ，外面はナデ，体部下端と底面はヘラケズリを施しているが，内外面とも磨耗が著しく，不明瞭である。胎土は砂粒・雲母・長石・石英粒を含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色を呈している。推定口径13.4cmで，底径5.6cm，器高3.9cmである。

5は，北西側の周溝の底面近くから正位で出土した内黒土師器の坏で，口縁部の約3分の2を欠失している。平底から内湾して立ちあがり，口縁部は若干外反している。内面はナデの後にミガキを加え，外面はナデを施している。体部下端と底面はヘラケズリを施している。胎土は砂粒・雲母・長石を含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。推定口径14.0cm，底径6.2cm，器高4.3cmである。

6は，墳丘部北側の表土中から出土した土師器の甕の底部片である。底部から直線的に外傾して立ちあがっている。外面はヘラナデを施しているが，内面は磨耗により不明である。胎土は砂粒・長石粒・雲母を含み，焼成は良好で，色調はにぶい橙色を呈している。推定底径7.2cmで，現存高1.9cmである。

7は，北東側の墳丘上の表土中より出土した内耳土器片である。底部は欠失しているが，器高

は低い。底部から口縁部にむけて内湾して立ちあがっている。内外面とも横ナデが施されている。外面には炭化物の付着が著しい。胎土は砂粒と雲母を含み，焼成は普通で，色調は黒色を呈している。推定口径38.0cmで，現存高7.1cmである。

8は，9とともに主体部の石積みの中に安置されていた陶器の骨壺の蓋である。完形で，丸くふくらむ天井部に径2.2cmの扁平な撮みを有し，下端に稜をもっている。内面端部には幅1.1cmの平坦面をもっている。天井部にはヘラで放射状文を刻み，その上に褐釉で2重の同心円文を描いている。内面には全体に褐釉が施されている。胎土は微砂と雲母を含み，焼成は良好で，露胎は浅黄色を呈している。口径11.2cm，器高2.4cmである。

9は，骨壺の身で陶器の小形甕である。口縁部の一部を欠損する以外は完存している。高台部は低く，体部は球状にふくらみ，頸部で括れ短い口縁部が強く外反している。内外面に褐釉が流れており，一部で釉溜りを形成している。体部下端と底部は露胎となっている。胎土は微砂を含み，焼成は良好で，露胎は浅黄色を呈している。口径10.0cm，底径6.2cm，器高8.6cmである。

10は，墳丘部東側の表土中から出土した土師質土器の皿の底部片である。糸切りの底部から一旦直立気味に立った後に外傾している。内外面ともナデを施している。胎土は砂粒とスコリアを含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色を呈している。底径5.7cm，現存高1.7cmである。

11は，南西側の周溝の覆土中から出土した須恵器の甕の胴部下半から底部にかけての破片である。底部から外傾して立ちあがり，底面は胴部よりも器厚が薄い。外面は横位のヘラケズリ，内面は横ナデが施されている。胎土は砂粒・雲母・長石・石英粒を含み，粗い。焼成は普通で，色調は褐灰色を呈している。推定底径14.4cmで，現存高は5.8cmである。

12は，墳丘部南東側の表土中から出土した陶器の灯芯皿である。口縁部の一部と全体の約5分の1を欠失している。平底から直線的に外傾し，体部中位で括れ，口縁部にかけて内湾して立ちあがっている。内面中央部に径5.5cmの油溜めの突帯をもち，一部が灯芯用として切れている。口縁部外面と内面に褐釉がかかり，体部から底部は露胎となっている。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で，露胎は浅黄橙色を呈している。口径8.8cm，底径4.2cm，器高2.1cmである。

13は，主体部の玄室内南東側の撹乱土中から出土した須恵器の甕の口縁部片で，頸部から口縁部へかけて大きく外反して立ちあがっている。内外面とも横ナデが施されている。胎土は砂粒・長石粒・雲母を含み，焼成は良好で，色調は褐灰色を呈している。推定口径21.6cmで，現存高5.7cmである。

14・15は，墳丘部の東・南東側の表土中から出土した陶器の擂鉢片である。ともに全面に褐釉がかかり，内面に筋目が施されている。胎土は微砂を含み，焼成は良好である。15は，推定底径12.0cm，現存高3.9cmである。14は，推定底径9.8cm，現存高5.0cmである。

## 2　第3号墳

本墳は，調査区の中央部やや東側の南端部で周溝が検出されたことにより確認されたものである。B6$d_9$区からB7$d_5$区にわたって周溝が弧状に巡り，B7$e_2$区からB7$e_4$区の一部に地山面が認められている。残存する墳丘はすべてエリア外に位置し，高さ50cm以内で低平なものである。墳丘は耕作などにより削られたものと推定される。周溝の外径で推定約30～33mの円墳と考えられる。

周溝は幅5.0～5.5m，深さ70～120cmを測り，中央部の底面に若干の凹みを有する。周溝の壁は内側が傾きが緩く，外側がやや急となる。周溝の底面は東側が浅く，西側に向かうにつれて深くなる傾向がある。覆土は上位が褐色，中位が暗褐色，黒褐色，黒色の暗い色調を呈し，下位は再び褐色ないし明褐色を呈する。土層は凹レンズ状の自然堆積を示し，周溝が埋まり切るまでにはかなりの期間を要したものと考えられる。

遺物は，周溝の中央部やや西寄りの北側壁のテラス状の平坦部から正位で出土した土師器の坏1点が完存している以外は破片で出土している。西端部の覆土上位からは土師器の坏，西側の壁寄りの覆土下位からは須恵器の甕の頸部片，そして西側の覆土の中位から下位の境あたりから内黒の坏の破片4点が出土したが，内黒の坏は周溝の埋没途中で流入したものと思われ，本墳に伴うものとは考えにくい。その他，縄文土器片，弥生土器片が若干混在して出土している。

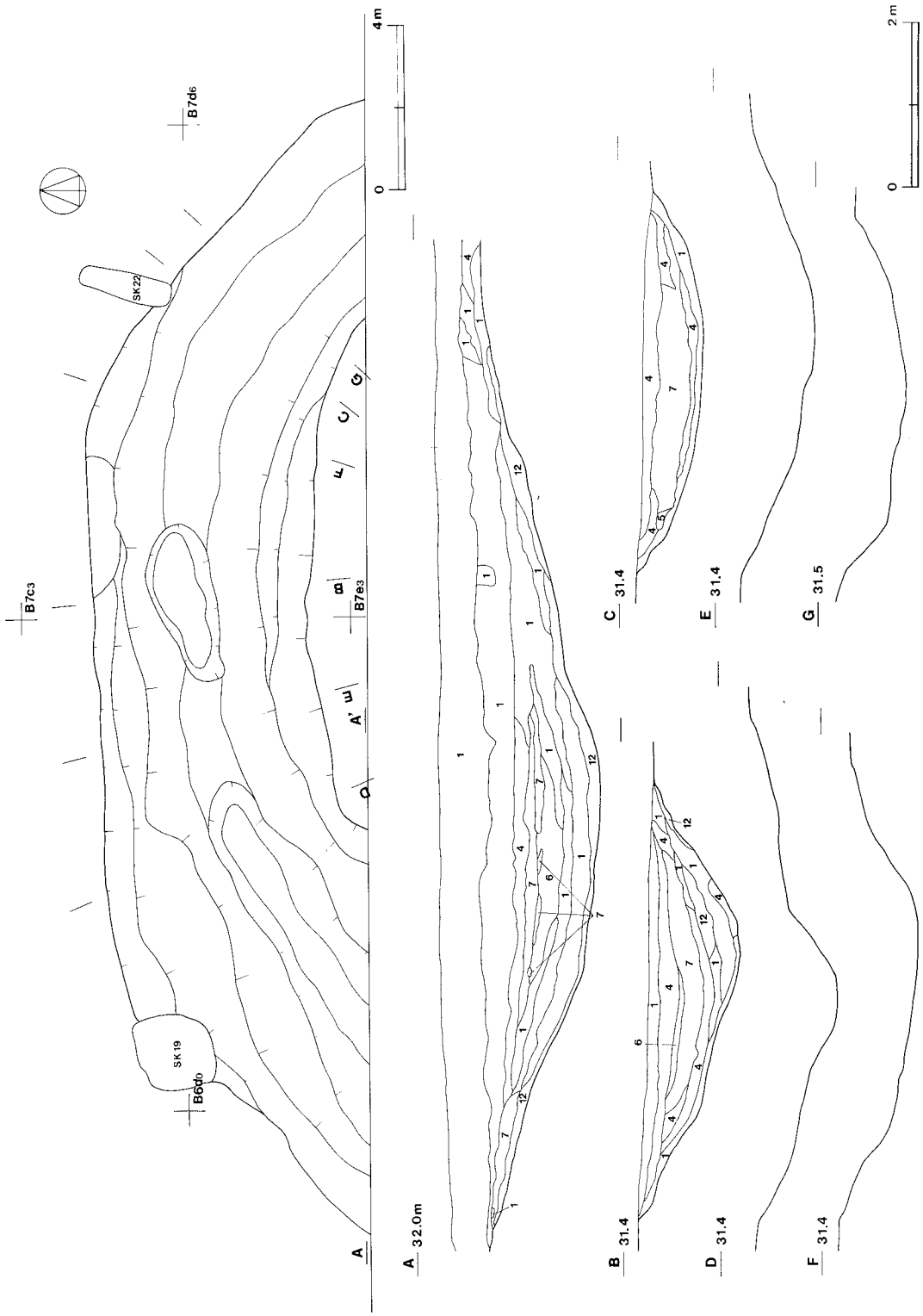
本墳の時期は，北側の周溝から出土した坏から判断すると，古墳時代後期の6世紀後半から7世紀前半と推定される。

**第3号墳出土遺物**（第27図16～19）

16は，北側の周溝の覆土中から出土した土師器の坏で，口縁部から底部にかけての約4分の1が残存している。底体部から外傾して立ちあがり，口縁部との境に弱い稜を有し，口縁部は外傾し，端部は尖っている。口縁部内外面は横ナデ，体部内外面はナデを加えるが，外面は雑で凹凸が残っている。胎土は砂粒を含み，焼成は普通で，色調は明赤褐色を呈している。推定口径15.3cmで，現存高4.4cmである。

17は，北西側の周溝外側の平坦面に正位で置かれたような状態で出土したほぼ完形の丸底の土師器の坏で，口端部はごく一部しか残っていない。底体部から口縁部にかけて内湾して立ちあがり，口縁部との境に稜を有している。口縁部外面と体部内面は横ナデ，体部外面は丁寧なヘラケズリが施され，底部中央はナデのまま残されている。胎土は砂粒・スコリアと微量の雲母を含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。口径14.0cm，器高4.0cmである。

18は，西側の周溝の覆土上位から斜位の状態で出土した土師器の坏で，口縁部から底部にかけ


B7c3
B7d6
SK22
SK19
B6d0
B7e3
A
A' 32.0m
B 31.4
C 31.4
D 31.4
E 31.4
F 31.4
G 31.5
0
4m
0
2m

第8図　第3号墳実測図

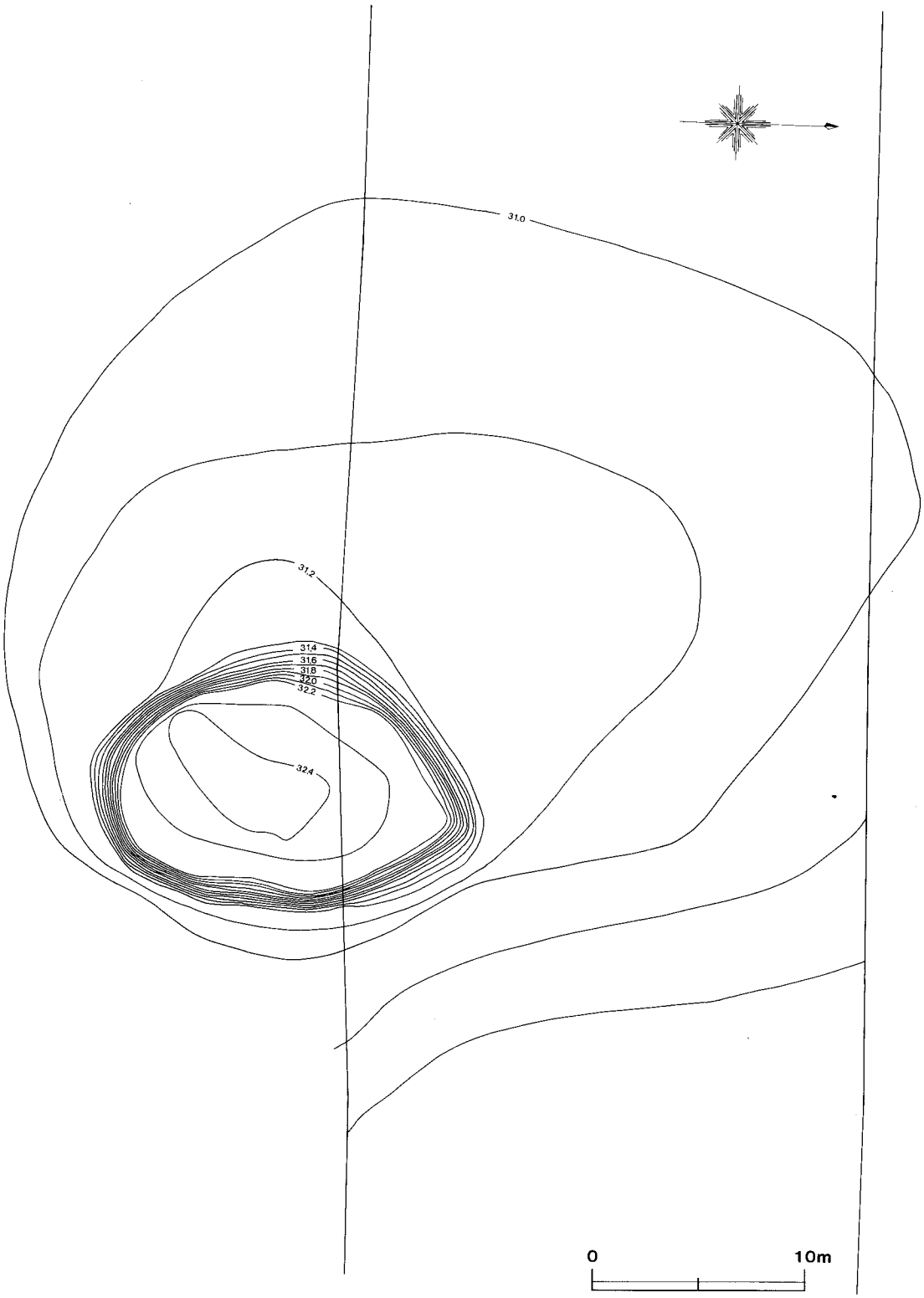
ての約４分の１が残存している。底体部から内湾して立ちあがり，口縁部との境に弱い稜を有し，口縁部は外傾している。口縁部内外面は横ナデ，体部内外面はナデを施している。胎土は微砂を含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色を呈している。推定口径15.2cm，現存高4.4cmである。

19は，西側の周溝の覆土下位から外面を上にして出土した須恵器の甕の頸部から肩部にかけての破片である。頸部内面と肩部外面に灰がかぶっている。内面下端には深いオサエ具の痕跡が残っている。胎土は砂粒・長石粒を含み，焼成は良好で，色調は褐灰色を呈している。推定頸部径14.6cm，現存高3.6cmである。

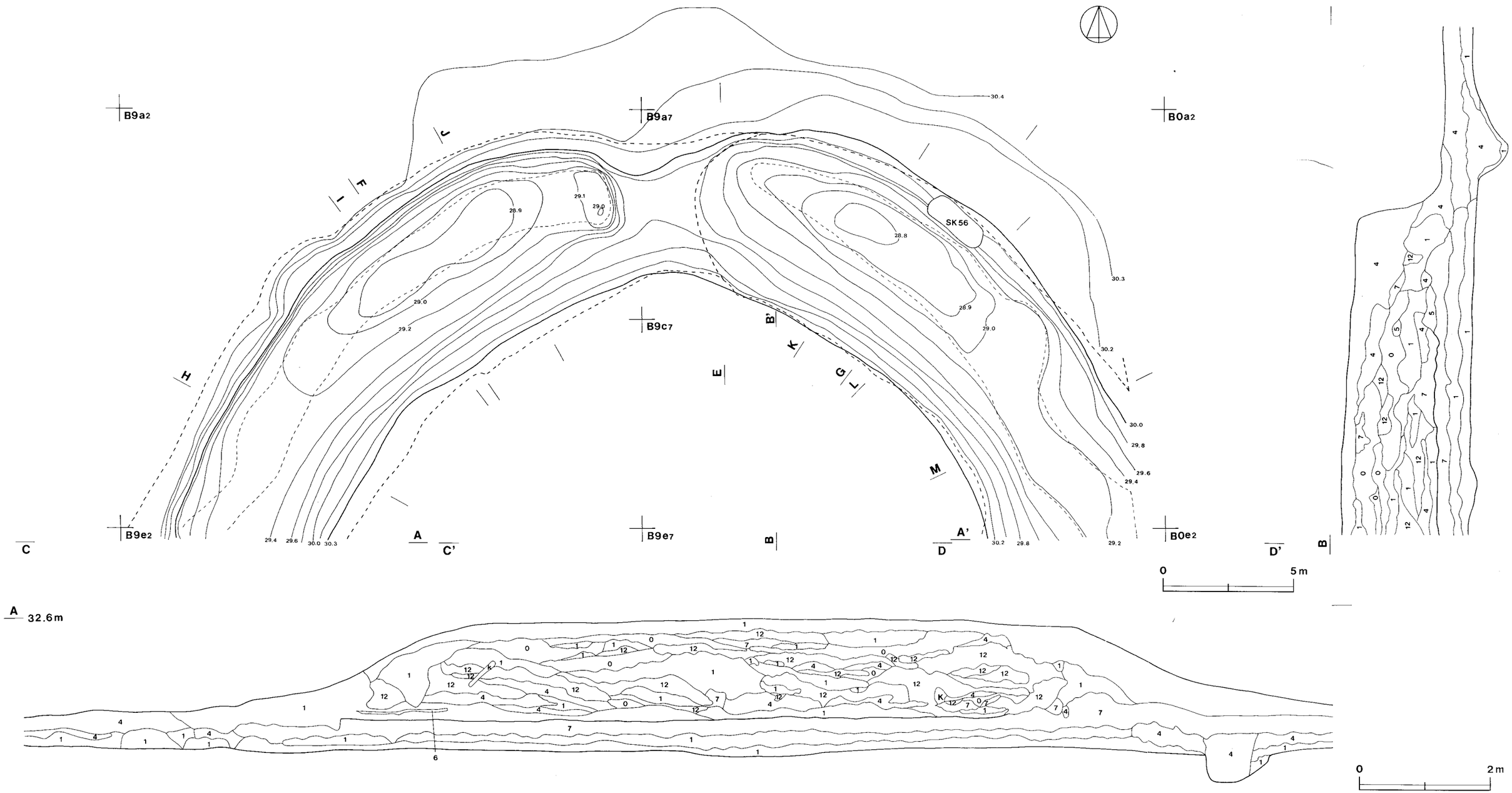
## 3　第５号墳

本墳は，調査区の東側の南部に位置し，墳丘の３分の２は南側のエリア外となっている。調査当時，墳丘上には雑木や篠が密生していたが，伐開してみると墳頂部は平坦に削平されており，後世の変容が明らかであった。聞き取りによれば，第２次世界大戦中に食糧増産のために芋を栽培するために削平して耕地化したものという。墳丘の平面形は不整の四角形を呈し，菱形に近い。墳丘の周囲は現在の畑の地割りに一致しており，近世頃に墳形が変形したものと思われる。周溝からみると外径で径約43m の円墳と考えられる。現在の表土との比高差は1.3～1.4m を測る。現在の墳丘の裾部を巡るように検出された第１号溝と溝状の落ち込み（図示していない）は墳丘を削る際に設けられた根切り溝と推測される。

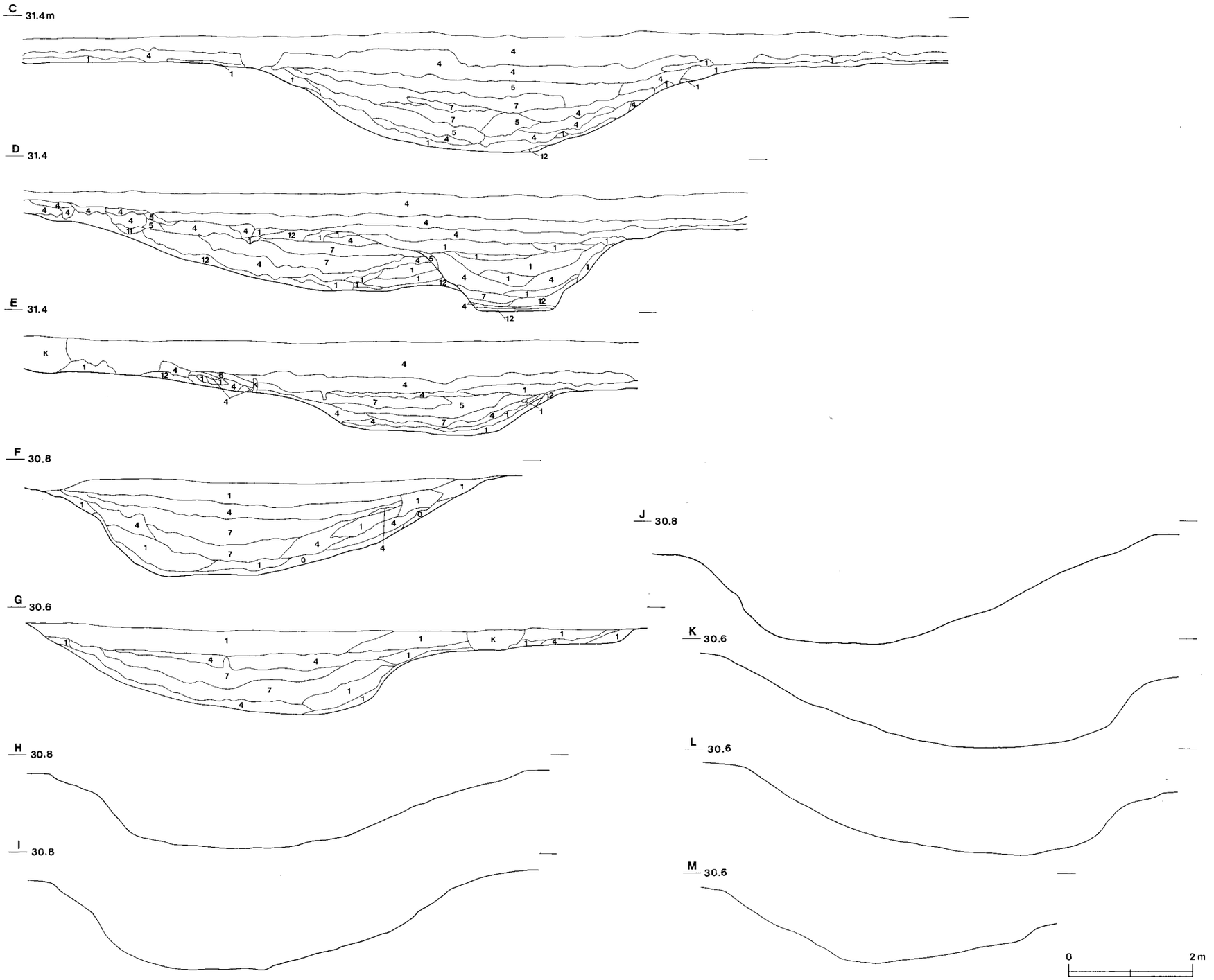
墳丘は，上記のように墳丘の裾部や墳頂部に後世の改変が加えられているが，構築状況については比較的よく調査することができた。墳丘の土層は，調査区南端の東西土層およびそれに直交する南北土層の両面で観察した。墳頂部から旧表土下まで断ち割り調査をした結果，旧表土と考えられるほぼ水平の土層面を確認し，その上に黒褐色土，ローム土などを盛り上げた構築状況が把握できた。旧表土下約７～10cm下がった面を中心に墳丘の北西部の $B9d_6$・$B9d_7$・$B9e_6$・$B9e_7$ 区で，炭化物や焼土の広がりを認めた。焼土は $B6d_7$ 区の南西端部にあり，中心部で15×17cm，厚さ６～８cmを測り，周囲70×60cmほどの範囲に焼土粒子が広がっていた。炭化物は焼土の堆積の少し南側に，７×８cm，厚さ４cmのブロック状のものが出土し，この周囲にも径１cm程度の小片が点在していた。また，焼土の西側には長径265cm，短径85cmの長楕円形状を呈する炭化物の広がりが認められ，この中には10×4cmほどの大きな炭化物も含まれていた。また，この発見により焼土と炭化物の範囲以外についても良く観察してみると，微細な炭化物は全体的に同一レベルで含まれていることが判った。一方，土層断面図の旧表土の境目から下５cmほどの位置には墳丘の中央部を中心に黒色土の堆積がみられる。以上の事から推測すると，本墳の構築は次の工程が考えられる。まず最初に古墳の範囲を設定し，次に地山面の整地を行って水平面を造成し，範囲内の数か所で火を焚いて，火力による浄化の儀礼を実施する（発見の焼土はこのうちの１つ）。この後で




第９図　第５号墳墳丘測量図




第10図　第５号墳実測図(1)




第11図　第５号墳実測図(2)

炭化物を含む黒色土を水平に地均しして盛土のための基盤を造ったものと思われる。

旧表土上の盛土は，明褐色ないし黄褐色を呈するローム土，ローム小ブロックを主とし，黒褐色土や暗褐色土を帯状に挟む状況を呈する。いずれも良く締まっている。墳頂部や裾部には締まりの弱い褐色土が覆っているが，これらは古墳の変形後に堆積したものである。

周溝は，調査区の南端の東西の端部および北西・北・北東側の合計５か所において土層の観察を実施した。周溝は本墳の北側を全周しており，上幅７～８ｍを測るが，北側中央の陸橋部では幅５ｍ程度である。底面の幅は1.3～3.2mを測り，２ｍ前後の部分が多い。中央の陸橋部を挟んで北西側より北東側の方がやや幅が広い。深さは1.3～1.5mを測る。壁・底面ともロームで硬く明瞭に検出されており，壁面は墳丘側の内側の傾斜が緩く，外側が急である。底面は平坦であるが，中央からやや陸橋部寄りに周囲より10cm程度低くなる部分がある。なお，北東側周溝の外側に長さ約12m，幅約３ｍ，深さ20～30cmの浅い凹みが認められるが，北西側には無い。この遺構の性格については明らかではないが，墳丘の盛り上げ用の土取り跡とも考えられる。陸橋部の幅は5.0×2.7mで，底面は平坦で壁にむかって緩やかに外傾して立ちあがる。深さは40～50cmである。

周溝の覆土は，５か所とも基本的には凹レンズ状の自然堆積を示している。上位が褐色土ないし暗褐色土で，中位から下位にかけて暗褐色土，極暗褐色土，黒褐色土の暗い色調を呈し，底面近くと壁寄りには褐色ないし明褐色，黄褐色の粗いローム粒子を中量から多量に含む締まりの弱い土層が堆積している。締まりは上位ほど強く，中位から下位にかけて弱くなる傾向を示す。含有物はローム粒子が主体で少量から中量に含まれ，炭化粒子や焼土粒子は各層とも微量以下である。全体的にみると，墳丘側からの流れ込みと思われる土層にローム粒子が多い傾向がある。

本墳は調査範囲が限定され，主体部も検出されなかったために遺物は少量である。本墳に伴うと考えられる遺物はきわめて少なく，土師器の坩の胴部片，坏の口縁部片が墳丘や周溝の覆土中から出土しているが，破片のため断定することはできない。一方，周溝西端部の覆土下位の黒褐色土の上面からは底部に糸切り手法を有する灯明皿の完形品１点，北東側周溝部の黒褐色土の上面からは相互に120cmほど離れて出土した破片が接合した内黒の高台付椀，高台付皿各１点およびタタキ目を有する須恵器の甕の胴部片が出土している。また，その他の遺物として砥石１点，不明石製品１点，埴輪片３点，石鏃１点などが出土しているが，前記の完形品を含めていずれも覆土下位の黒褐色土の上面よりも上位から出土しており，周溝が埋没していく過程で平安時代から中世にかけて流れ込んだ可能性が高い。墳丘の頂部や裾部の表土および裾部を巡るように検出された溝からは近世以降のものと思われる陶磁器片や土鍋・瓦・七輪片や雲母片岩片なども出土している。

上記のように出土遺物からは本墳の構築時期を特定することは困難であるが，墳丘の周溝の規

模や形態および他の古墳との位置関係，更には僅かな出土土器等からみれば，古墳時代後期の6世紀代のものと推定される。

**第5号墳出土遺物**（第27図20～23，第28図1～4）

20は，北東から東側にかけての周溝の覆土中から出土した土師器の丸底の坏で，4分の1程度の破片である。底体部から口縁部にかけて内湾して立ちあがっている。口縁部内外面は横ナデ，底体部は雑なナデが施されている。胎土は微砂を含み緻密で，焼成は普通で，色調は明赤褐色を呈している。推定口径12.4cm，現存高2.8cmである。

21は，北東側の周溝の覆土中から出土した破片8点が接合した土師器の丸底の坏で，他に同一個体の破片4点があるが，接合はできない。底体部から内湾して立ちあがり，口縁部との境に鋭い稜を有し，口縁部は内傾している。口縁部内外面は横ナデ，体部内面はナデ，外面は丁寧なヘラケズリが施されている。胎土は砂粒と雲母を含み，焼成は普通で，色調は灰褐色を呈している。推定の体部径14.5cm，現存高3.5cmである。

22は，北側の墳丘に設けた土層ベルトの下位から出土した土師器の坩で，口縁部と底部を欠失している。胴部は球形にふくらみ，頸部で締まっている。内面はナデ，外面は丁寧なヘラケズリが施されている。外面に赤彩痕がわずかに残っている。胎土は砂粒・雲母・石英・長石粒を含み，焼成は普通で，色調はにぶい赤褐色を呈している。推定胴径9.9cm，現存高6.0cmである。

23は，東側の周溝の覆土下位から出土した土師質土器の皿の口縁部から底部にかけての約3分の1ほどの破片である。体部から口縁部にかけて内湾して外上方に立ちあがり，底面は凹んでいる。口縁部内外面は横ナデ，底体部は雑なナデが施されている。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。推定口径11.6cm，推定底径6.6cm，器高3.1cmである。

1は，東側の周溝の覆土下位から破片の状態で出土した内黒の土師器の高台付坏である。口縁部約3分の1と体部下半および高台部の一部を欠失している。体部は内湾気味に立ち，口縁部は若干外反している。高台は低く，端部で薄くなりわずかに反っている。内面はナデの後，四方に花弁状のミガキを施している。外面はナデを加えている。胎土は砂粒と微量の雲母を含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色を呈している。口径15.2cm，底径6.8cm，器高5.7cmである。

2は，1と同様の位置から破片の状態で出土した内黒の高台付皿である。口縁部から体部にかけての約3分の1と底面の一部を欠失している。体部は直線的に外傾し，中位に軽い段を有している。高台はハの字状に広がり，端部はつまみ出されている。内面はナデの後，六方に花弁状の丁寧なミガキを施している。外面はナデを加えている。胎土は砂粒と微量の雲母を含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色を呈している。口径14.0cm，底径8.4cm，器高3.6cmである。

3は，西側の周溝の内側の覆土下位から正位の状態で出土した完形の土師質土器の皿である。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ちあがり，底部は糸切りの切り放しで，端部にはみ出しが

認められている。内外面ともナデが施されている。胎土は砂粒と雲母を含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。口径8.1cm，底径5.7cm，器高1.7cmである。

4は，北側の周溝の覆土中から出土した土師質土器の皿で，底部のみ残存している。糸切りの底部から外傾して立ちあがっている。内面はナデを施している。胎土は砂粒・長石・石英粒・雲母を含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色を呈している。底径4.4cm，現存高0.7cmである。

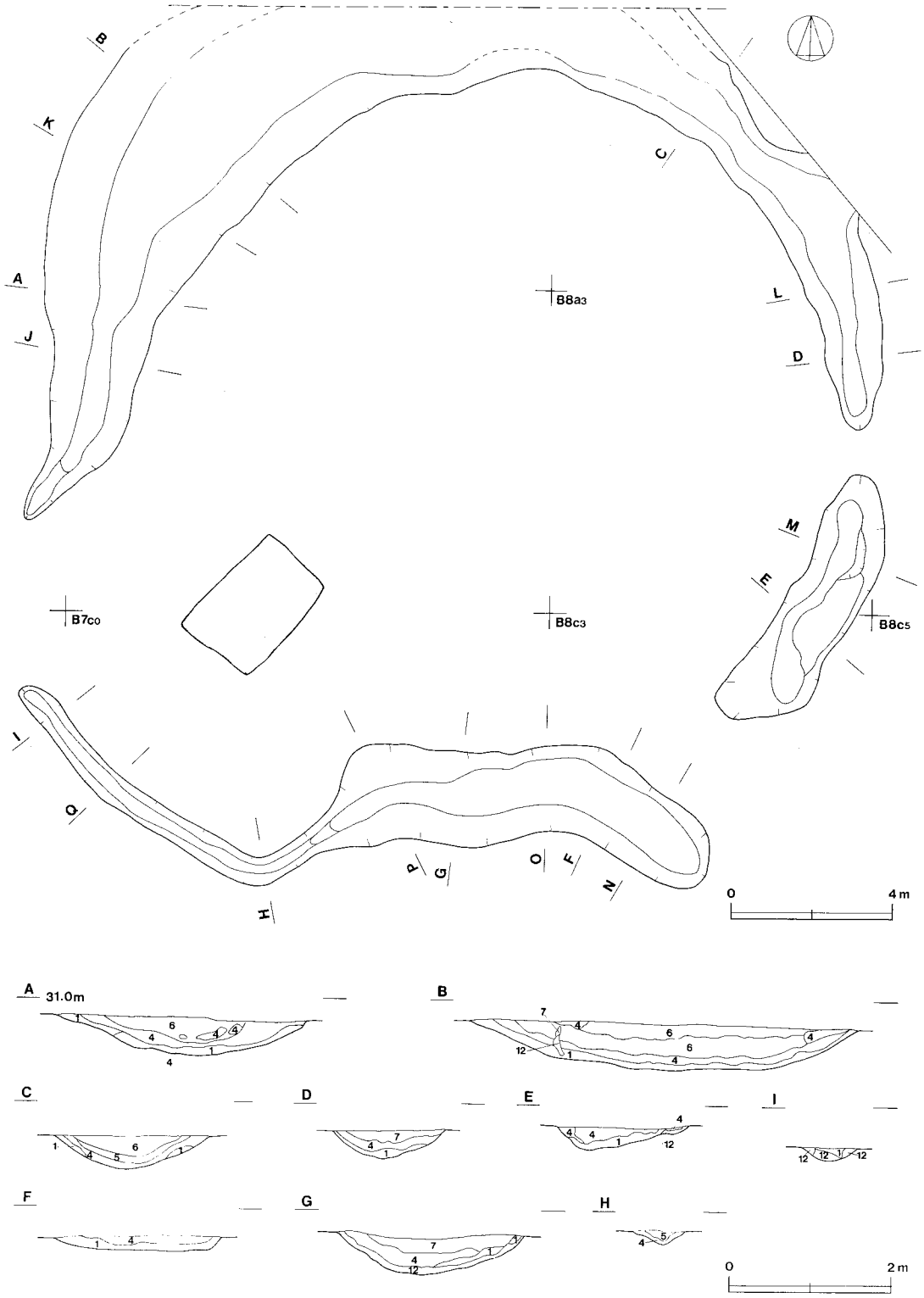
## 4　第7号墳

本墳は，調査区の東側の北側寄りで，試掘調査で主体部が発見され，表土除去後に周溝が断続的に巡ることにより確認されたものである。本墳の広がりは東西が $A7j_0$・$B7a_0$ 区から $A8j_4$・$B8a_4$ 区に延び，南端は $B7d_0$ 区から $B8d_3$ 区に至り，北端はエリア外へ続いている。主体部は本墳の南西側に片寄って検出されている。墳丘は削平により全く失われており，東側の周溝の覆土の一部にローム土が検出された以外は，墳丘の痕跡を示すものは全くない。本墳の規模は，残存する周溝から推測すると外径で，約25mの古墳と思われる。

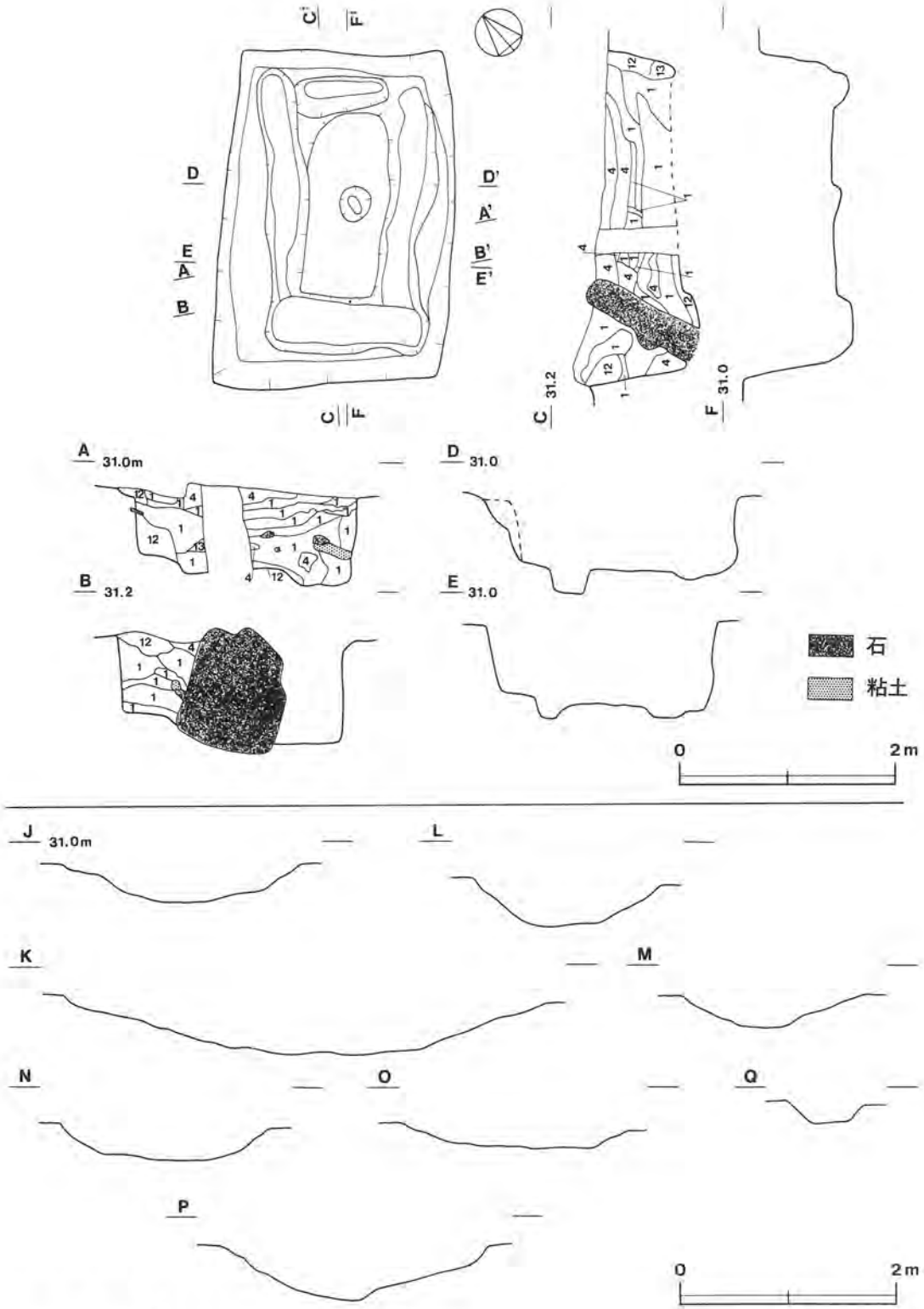
周溝は，3か所に分かれる。北側の大形のものをa周溝，南側の蛇行状のものをb周溝，南東側の小形のものをc周溝と呼ぶ。a周溝は上弦状を呈し，幅1.5～4.8m，深さ33～58cmを測る。壁は緩やかに外傾して立ちあがり，底面は中央部は平坦であるが，周囲にむかって舟底状を呈している。b周溝は東側が幅広く2.1～2.3m，北西側が狭く0.6～0.7mとなっている。c周溝は壁の内側の立ちあがりがやや急で，外側は緩やかとなり，底面も緩やかな舟底状を呈する。

覆土は，a周溝やc周溝の一部が褐色を呈する以外は，黒色，黒褐色，極暗褐色，暗褐色などの暗い色調を呈しており，底面近くや壁寄りには褐色や明褐色のローム土を多く含む土層が堆積している。a周溝の土層は，上位が黒色，中位が暗褐色，下位が褐色と典型的な凹レンズ状の自然堆積を示している。b・c周溝では上位の黒色土が無く，暗褐色，褐色土となっているのは覆土の上面の削平によるものであろう。含有物はローム粒子が少量から中量，焼土粒子や炭化粒子が微量から少量に含まれている。締まりはあるが，粘性のない土層となっている。

埋葬主体部は，長軸310cm，短軸215cmの長方形を呈し，長軸方向はN－26.5°－Eを指している。埋葬施設は，雲母片岩の板石を組み合わせた箱式石棺であるが，調査以前に撹乱を受けており，南西側に板石1枚が残存するのみで，他は失われていた。壁はロームで硬く明瞭で，直立ないしやや外傾して立ちあがり，北西壁の中央部には崩れがみられ，南東壁の下部は内湾する。底面もロームで硬く，四周に幅30～50cmで，深さ15～20cm程度の浅い凹みが巡り，石材を立てた痕跡を示すものと考えられる。底面の中央部に径30cm，深さ7～8cmの小ピットがみられたが，性格は不明である。底面には敷いたと考えられる玉石などは無かった。残されていた石棺材の板石の大きさは，長辺118cm，短辺90cmで，厚さは18～23cmを測る。石材は，内側にむけて26°北東方向へ倒




第12図　第７号墳実測図(1)




第13図　第７号墳実測図(2)

れている。石材の内面は平滑に整形されているが，外面は凹凸が認められている。

覆土は，褐色，暗褐色，明褐色，にぶい黄褐色を呈するが，ローム粒子，ローム小ブロック，粘土，雲母片岩の破片を少量から多量に含み，ほぼ水平状態に堆積しているが，締まりの弱い部分が多い。南西壁近くや北西壁の下部の土層は締まりがあり，この部分は埋土本来の状態を保っていたものと考えられる。しかし，その他の覆土は締まりが弱く，バサバサして崩れ易くなっている。調査時の聞き取りによれば，この主体部は地元の人々により約70年前に発掘されており，その時に石棺材としての雲母片岩の板石は取り出された由である。調査区北側の個人墓地内にはこれに相応しい板石が1枚立っているが，本墳のものとは特定できない。覆土の各所には粘土の塊や径15～20cm程度の雲母片岩の石片が多量に散在していたが，これらは本来，石棺材の裏込めとして使用されていたものの残骸と考えられる。

遺物はきわめて少なく，主体部からは性格不明の鉄製品1点，砥石1点と須恵器の甕の胴部片が出土したにすぎない。いずれも覆土の上～中位から検出されており，本墳に伴うものとは断言できない。周溝からの出土遺物では，a周溝の北西側の覆土中位から倒立の状況で出土した土師器の高坏の脚部片が目立つぐらいで，他には内耳土器片や石片が若干出土している。

本墳の時期は，主体部が撹乱されており，しかも周溝からの出土遺物もほとんどないという状況から推測することはむずかしいが，主体部の箱式石棺という型式および検出位置，僅かな遺物からみると，古墳時代後期の6世紀代の年代が与えられよう。

**第7号墳出土遺物**（第28図5）

5は，a周溝の北西側の覆土中位から逆位で出土した土師器の高坏の脚部片である。脚部は中空で，裾部にむかって開いている。3段の輪積痕が明瞭に残り，内面は雑なナデ，外面は縦ナデが施されている。胎土は砂粒・長石・石英粒・雲母を多く含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。現存高7.0cmである。

注(1) 茨城県教育委員会『重要遺跡調査報告書III』(1986) による。

(2) 新治村史編纂委員会『図説新治村史』(1986) による。

## 第2節　土　　坑

当遺跡から検出された土坑は55基である。形状や規模には各々差異が認められるもののほとんど伴出遺物がなく，時期や性格が不明のものが多い。

**第1号土坑**（第14図）

本跡は，調査区西側の $B2b_7$・$B2b_8$ 区にまたがって位置し，南側で第2号土坑と重複し，これを切っている。

平面形は，長径218cm，短径71cmの楕円形を呈し，長径方向はN－35°－Eである。壁は北西側がほぼ直立ないし若干内湾する傾向を有するが，南東側は緩く外傾する。壁はソフトロームであまり硬くない。底面は北から南方向へ向けて緩やかに低くなるが，全体としては平坦で硬い。東壁寄りの中央部の底面に少し高まりがみられる。確認面からの深さは62cmを測る。

覆土は，北東側の上位に一部撹乱があるが，上位が黒褐色土，中位が暗褐色，褐色土で，下位は明褐色土となっている。全体にローム粒子を中量から多量，炭化粒子を微量に含み，ローム小ブロックや焼土粒子が極微量に上位の黒褐色土中に混じっている。上位は締まりがあるが，中位以下はサラサラして崩れ易い締まりの弱い土層である。土層は，第41～45・56・57号土坑に類似している。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第2号土坑**（第14図）

本跡は，調査区西側の $B2b_7$・$B2b_8$ 区にかけて検出され，北側で第1号土坑と重複し，これに切られている。

平面形は，長径174cm，短径47cmの楕円形を呈し，長径方向はN－38°－Eである。壁は西側の中位が若干内湾して立ちあがり，南・東側の壁は外傾している。第1号土坑に比べて規模は小形化するが，壁・底面の形状等は類似している。底面はやや西側へ向けて傾いている。確認面からの深さは35cmを測る。

覆土は，土層観察用ベルトを設定できなかったが，第1号土坑にきわめてよく類似した褐色土で，サラサラした締まりの弱いものであった。

遺物は全く出土していないので，時期は不明である。

**第3号土坑**（第14図）

本跡は，調査区の中央やや西寄りの $B4b_8$・$B4b_9$ 区にまたがって位置している。

平面形は，長径217cm，短径148cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－90°である。壁はロームでやや外傾して立ちあがるが，南側は傾きが緩い。底面もロームで，全体としては平坦であるが，起伏もみられ東側へ若干傾いている。底面の北東コーナー部に100×60cm，高さ20cmほどの高まりを有する。また，土層図からみると底面の中央やや東寄りにロームの高まりが認められるので，これにより2基の土坑の複合の可能性も考えられるが，確実ではない。確認面からの深さは，中央の凹部で43cmを測る。

覆土は，全体的に褐色土から成り，10層以上に分層できたが，ローム粒子・炭化粒子の混入量の差によったものである。西側のテラス部の下位と中央部の下位にロームと考えられる明褐色土がみられる。覆土は全体的に締まりがあるが，中～下位には締まりの弱い部分がある。中央部の上位はやや暗い色調を呈している。

遺物は検出されていないので，時期は不明である。

**第4号土坑**（第14図）

本跡は，調査区の中央やや南側のB4c3・B4c9区にかけて検出されている。

平面形は，長軸223cm，短軸125cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－45°－Wである。北コーナー部は撹乱により形が崩れている。壁はロームで，直立ないしやや外傾して立ちあがり，北東側の壁はやや傾きが緩く，底面につづいている。その他の底面は平坦である。確認面からの深さは30cmを測るが，底面から5～10cmは掘り過ぎており，本来の深さは20～25cmの浅いものと思われる。

覆土は，上位が暗褐色，下位が黒褐色を呈し，北西側の上位に褐色土がみられる。含有物は，ローム粒子，ローム小ブロック，炭化粒子で，ローム粒子，ローム小ブロックは少量から中量，炭化粒子は極微量から微量に含まれ，いずれも締まりが弱い。

遺物は，西コーナー部近くの底面直上から土師器の坏の口縁部の小片が1点出土しているだけである。これから時期を考えると古墳時代後期の鬼高期と推定される。

**第4号土坑出土遺物**（第28図6）

6は，西端部の覆土中から出土した土師器の坏の口縁部片である。内外面は横ナデが施されている。胎土は砂粒・スコリア・雲母を微量含み，焼成は普通で，色調は赤色を呈している。推定口径15.0cm，現存高2.5cmである。

**第5号土坑**（第14図）

本跡は調査区の中央やや南側のB5c3区に位置している。

平面形は，長径273cm，短径194cmの楕円形を呈し，長径方向はN－64°－Eである。壁は底面から60cmほどまではほぼ直立しているが，上位は緩やかに外反しながら立ちあがる。底面の形状は長方形を呈するので，本来は長方形に掘削されたものと思われる。底面・壁ともロームで，壁はゴツゴツしている。底面は平坦で硬い。確認面からの深さは108cmを測る。

覆土は，所謂凹レンズ状の堆積を示し，上位が黒褐色，中位が暗褐色，下位は褐色を呈し，下位へいくほどロームの粒子の混入量が増し，中・下位にはローム小ブロックも少量から中量含まれている。壁際には褐色土がみられる。いずれの層も硬くよく締まっている。自然堆積と考えられる。覆土の最下層はきわめてよく締まっている。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第6号土坑**（第15図）

本跡は，調査区の中央部北側のA5$i_2$区からA5$j_3$区にかけて検出された溝状の土坑である。北西側は調査区域外へ延びている。

現存の最大長は900cmで，幅は最も広い部分で125cmである。長軸方向はN－64°－Wである。壁はロームで緩やかに外傾して立ちあがっている。底面もロームで若干の凹凸はあるが，全体的にはほぼ平坦である。確認面からの深さは，最も深い部分で19cmを測る。

覆土は，上位に黒褐色土，中位に暗褐色土，下位と壁際には褐色土が自然堆積している。上・中位にはローム粒子を少量から中量，炭化粒子を微量含み，下位にはローム土を多量に含んでいる。いずれもやわらかく締まりが弱い。

遺物は，土師器の小片が2点と縄文中期の阿玉台式土器の胴部片1点が検出されたが，本跡に伴うものとは考えられず，本跡の時期は不明である。

**第7号土坑**（第14図）

本跡は，調査区の中央部のB5$a_5$・B5$b_5$区にかけて位置している。

平面形は，長軸171cm，短軸98cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－87°－Eである。壁は東壁が直立に近いほかはやや外傾して立ちあがる。壁・底面ともロームで，硬くゴツゴツして凹凸があるが，締まっている。確認面からの深さは60cmを測る。

覆土は，上から極暗褐色土，褐色土，黒褐色土，褐色土の順に堆積しており，いずれも硬くよく締まっている。含有物としては，ローム粒子が少量から中量，炭化粒子が極微量から微量にほとんどの層に認められている。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第８号土坑**（第14図）

本跡は，調査区の中央部の南側の $B5d_8$ 区に位置している。

平面形は，長径149cm，短径132cmの不整円形を呈し，長径方向はＮ－48°－Ｅである。壁はロームで直立ないしやや外傾して立ちあがる。底面は全体的にはほぼ平坦であるが，やや起伏があり，中央部が少し高く，壁に沿って若干深く掘り込まれている。確認面からの深さは，最も深い部分で20cmを測る。

覆土は，褐色土でロームを多く含み，締まりが弱くやわらかい土層である。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第９号土坑**（第15図）

本跡は，調査区の中央部の $B5a_6$・$B5a_7$・$B5b_6$・$B5b_7$・$B5b_8$ 区の５つのグリッドにまたがって検出された溝状の土坑である。

平面形は，長径665cm，短径135cmの長楕円形を呈し，長径方向はＮ－67°－Ｗである。壁はロームで中央部から南東側にかけては直立気味に立ちあがるが，西側は傾斜が緩く，なだらかな状態で，西端部は，不明瞭である。底面はロームで断面形が舟底状をし，所々にロームブロックの露出部が認められゴツゴツしている。確認面からの深さは，中央やや南東よりが最も深く10cmを測り，東端で８cm，西側にかけては５cmから2～3cmとなりきわめて浅い。

覆土は，上位がローム粒子やローム小ブロックを少量含む黒褐色土と暗褐色土で，下位はロームを多く含む褐色土と明褐色土でいずれもやわらかく締まりが弱い。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第10号土坑**（第15図）

本跡は，調査区の中央部北側の $A5i_6$・$A5j_6$ 区にかけて位置し，第３号溝と重複しており，上面を切られている。

平面形は，長軸155cm，短軸67cmの不整長方形を呈し，北西側が突出して足型状にみえる。長軸方向はＮ－0°である。壁はロームで凹凸があり，東壁から北壁にかけては直立気味に立ちあがり，西壁は緩やかに外傾している。南壁はほとんど確認できない状況である。底面もロームで，北から南へむけて凹凸をもちながら低くなっている。確認面からの深さは38cmを測る。

覆土は，上位から中位にかけてローム粒子を中量から多量，炭化粒子を極微量から微量に含む暗褐色ないし褐色土で，締まりが弱い。底面近くと壁際には褐色土をまだらに含む締まった黄褐色のロームが堆積している。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第11号土坑**（第15図）

本跡は，調査区の中央部やや東側の $A6j_3$・$B6a_3$ 区にまたがって位置し，第３号溝と重複しているが，これによって上面を切られており，本跡の方が古い。

平面形は，長軸80cm，短軸68cmの不整方形を呈し，長軸方向はＮ－89°－Ｅである。壁はロームで直立しているが，北壁が高く30cmで，東壁が23cm，西壁が20cmで，南壁は５cmを測る。底面もロームで平坦であり，よく締まっている。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第12号土坑**（第15図）

本跡は，調査区のやや東側の $A6j_6$・$A6j_7$ 区にかけて位置し，第３・４号溝と重複し，いずれにも切られている。

平面形は，南側を第４号溝により失っており不明確であるが，現存部での長径77cm，短径70cmの楕円形を呈し，長径方向はＮ－90°－Ｅを指すものと思われる。壁はロームで，緩やかに外傾して立ちあがる。底面もロームでやや湾曲している。確認面からの深さは，中央部で40cmを測る。

覆土は，褐色土でローム粒子を少量から中量，炭化粒子を極微量に含み，上位にはローム小ブロックが極微量に混じっており，よく締まっている。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第13号土坑**（第15図）

本跡は，調査区のやや東側の北端部の $A6i_7$・$A6i_8$・$A6j_7$・$A6j_8$ 区の４グリッドにまたがって位置し，第３号溝に大半が重複し，南端部は第４号溝に切られている。第３号溝の覆土を掘り下げていく中で検出されたもので，新旧関係は不明確であるが，第３号溝より古いか若しくは同溝に伴うものと考えられる。土層の記録は残していないが，本跡の覆土は締まった褐色土である。

平面形は，北端部が調査区域外へ延びているが，現存の長軸166cm，短軸85cmの不整長方形を呈し，長軸方向はＮ－5°－Ｗを指すものと思われる。壁はロームで緩やかに外傾して立ちあがり，底面もロームで湾曲している。確認面からの深さは，最深部で47cmを測る。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第14号土坑**（第16図）

本跡は，調査区東側の北端部の $A6i_8$・$A6i_9$・$A6j_8$・$A6j_9$ 区にまたがって位置し，第３号溝の東端部と重複しているが，これよりも古い。また，南端部の上位は第４号溝に切られている。

平面形は，北側が調査区域外へ延びており，南端部が第４号溝に切られているために不明確で

あるが，現存部での長軸273cm，短軸208cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－80°－Wを指すものと思われる。壁はロームで各壁とも外傾して立ちあがり，東壁は特に緩やかである。底面もロームで，中央部が緩やかに凹み，硬く締まっている。確認面からの深さは66cmを測る。

覆土は，上位にローム粒子を微量に含む暗褐色土が堆積し，以下にローム粒子を少量から中量，炭化粒子を極微量に含む褐色土があり，いずれもよく締まっている。壁際の褐色土にはローム小ブロックが中量含まれている。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第15号土坑**（第16図）

本跡は，調査区のやや東側の $B6c_1$・$B6d_1$ 区にかけて位置している。

平面形は，不整三角形状を呈し，長径213cm，短径123cmを測り，長径方向はN－47°－Eである。壁はロームでほぼ直立し，底面もロームで起伏があり，中央部が高く盛り上り，南・北側は深く掘り込まれる。壁・底面ともあまり締まっていない。確認面からの深さは，最深部で30cmを測る。

覆土は，上位の中央部が暗褐色，その他は褐色を呈している。上位は締まりが弱いが，以下は締まりがある。含有物としてはローム粒子が少量，炭化粒子が微量含まれており，下位や壁際にはロームが多くなる。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第16号土坑**（第16図）

本跡は，調査区のやや東側の $B6c_9$・$B6d_9$ 区にかけて位置している。本跡の北西側は第5号溝と接しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長径178cm，短径110cmの楕円形を呈し，長径方向はN－43°－Eである。壁はロームで外傾して立ちあがり，北・東側は傾きが緩い。底面もロームで締まりがあるが，平坦面は北西側に偏っている。確認面からの深さは33cmを測る。

覆土は，褐色，にぶい褐色，明褐色を呈し，粗いローム粒子，ローム小ブロックを少量から中量，炭化粒子を極微量に含むザラザラした土層で，締まりが弱い。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第17号土坑**（第16図）

本跡は，調査区のやや東側の $B6a_0$・$B6b_0$ 区にかけて位置している。

平面形は，長軸214cm，短軸54cmの長方形を呈し，長軸方向はN－47°－Eである。壁はロームで直立気味に外傾しており，南西壁は垂直に近い。底面もロームで平坦で硬くしまっている。確認

面からの深さは29cmを測る。

覆土は，褐色を呈し，上位はローム粒子を中量，炭化粒子を微量に含み，締まりが弱い。下位はロームを多く含み，締まりがある。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第18号土坑**（第16図）

本跡は，調査区のやや東側の $B7b_2$・$B7b_3$・$B7c_2$・$B7c_3$ 区の4グリッドにまたがって位置し，東側には第20号土坑が隣接している。

平面形は，長軸212cm，短軸79cmの長方形を呈し，長軸方向はN－86°－Eである。壁はロームで直立し，底面もロームで平坦である。本跡はきわめて浅く，最深部でも12cmにすぎず，北側は3cm程度である。

覆土は，上位はローム粒子少量，炭化粒子極微量を含む褐色土で，締まりが弱い。下位と壁際にはロームブロックの多い明褐色土がみられ，締まりがある。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第19号土坑**（第16図）

本跡は，調査区のやや東側の $B6c_0$・$B6d_0$ 区にかけて位置し，第3号墳の周溝と重複しているが，これを切っているものと思われる。

平面形は，長軸216cm，短軸180cmの隅丸方形を呈し，長軸方向はN－28°－Eである。壁はロームで緩やかに外傾して立ちあがる。底面もロームで中央部がやや凹み，硬く締まっているが，小さな凹凸がある。確認面からの深さは，南東側の最深部で42cmを測る。

覆土は，上位から順に暗褐色土，褐色土，明褐色土が堆積し，含有物としてはローム粒子が上中位で少量，下位で多量に含まれ，炭化粒子は各層とも極微量で，締まりは弱い。

遺物は，土器片が4点出土したが，その中に木葉痕の認められる土師器の甕か鉢の底部片が1点ある。しかし，これらは本跡に伴うものとは考えられず，本跡の時期は不明である。

**第19号土坑出土遺物**（第28図7）

7は，南側の覆土中から出土した土師器の底部片で，木葉痕を有している。内外面ともナデが施され，内面は丁寧である。胎土は砂粒・長石・石英粒を含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。推定底径5.6cm，現存高1.5cmである。

**第20号土坑**（第16図）

本跡は，調査区のやや東側の B7$b_3$ 区に位置し，西側には第18号土坑が隣接している。

平面形は，長軸100cm，短軸71cmの長方形を呈し，長軸方向はN－16°－Wである。壁・底面ともロームで，壁は直立ないしやや外傾して立ちあがり，底面は平坦である。確認面からの深さは30cmを測る。

覆土は，ローム粒子・ローム小ブロックを中量から多量，炭化粒子を微量に含む褐色土・明褐色土で，やわらかく締まりがない。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第21号土坑**（第16図）

本跡は，調査区の東側寄りの B7$b_4$・B7$b_5$ 区にかけて位置している。

平面形は，長軸243cm，短軸99cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－79°－Eである。壁はロームで直立ないしやや外傾するが，ブロック状のロームで崩れ易い。底面もロームで壁近くはやや湾曲し，東側にかけて浅くなるが，全体としては平坦である。あまり硬くはない。確認面からの深さは33cmを測る。

覆土は，中央部が黒褐色・暗褐色の暗い色調を呈し，壁際と底面近くは褐色を呈している。中央部は粗いローム粒子を中量から多量，炭化粒子を微量に含み，ザラザラして締まりが弱い。壁際の褐色土にはロームを多く含み締まりがある。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第22号土坑**（第17図）

本跡は，調査区の東側寄りの B7$c_4$・B7$c_5$ 区にまたがって位置し，南端部は第３号墳の周溝と重複し，これを切っている。

平面形は，長軸209cm，短軸62cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－13°－Eである。壁はロームで緩やかに外傾して立ちあがる。壁質は脆く，崩れ易い。底面もロームであるが，凹凸が多くみられる。

覆土は，褐色土ないし暗褐色土で，粗いローム粒子を少量から中量，炭化粒子を極微量に含み，締まりはやや弱い傾向を示すが，北側寄りは若干締まりがある。

遺物は，縄文後期初頭と判断される土器片１点が中央やや北寄りの底面近くから出土したのみで，流れ込みと思われる。本跡の時期は不明である。

**第23号土坑**（第18図）

本跡は，調査区東側の南端部の B8$d_5$・B8$d_6$・B8$e_5$・B8$e_6$ 区の４グリッドにわたって位置する長

方形の大形土坑である。

平面形は，長軸370cm，短軸234cmの長方形を呈し，長軸方向はN－6°－Eである。3段に掘り込まれ，底面の最深部では124cmを測る。壁はロームで直立し，上・下段とも平坦面は東西両側が幅広く，南北両側が幅狭い。いずれの平坦面も中央部へむかって傾斜している。上段の東西両側平坦面の幅は45～55cm，南北両側は15～30cm，下段は東西両側の幅が20～25cm，南北両側の幅が5～10cmである。底面もロームで壁とともによく締まっている。壁・底面ともに精査したが，ピットや落ち込みは検出できなかった。

覆土は，上位の中央部が黒褐色土でその周囲が暗褐色土となり，中位以下は褐色土が主で，暗褐色土が混じる状況を呈し，壁際や底面近くにローム質の黄褐色土や明褐色土が堆積している。含有物は，ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子である。ローム粒子は上位が中量で，中位から下位にかけて多量となり，ローム小ブロックは上位は少量で，中位から下位にかけては中量から多量となる傾向を示している。炭化粒子は極微量から微量である。上位の土層は締まっているが，中位から下位にかけてはザラザラして締まりが弱くなる。全体的にみると，本跡の土層は自然堆積と判断される。

遺物は，須恵器壺の口縁部片が，確認面に近い本跡の覆土上位の南西側から出土したのみである。これから本跡の時期を考えると，古墳時代後期の6世紀末から7世紀初め頃と思われる。

**第23号土坑出土遺物**（第28図9）

9は，南西側の確認面から出土した須恵器の壺の口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は体部にはめこまれるように成形されており，体部上半に把手の剝落痕があり，体部も扁球状を呈していることから提瓶と考えられる。口縁部は頸部から直線的に外傾しているが，端部は内湾している。口縁部および体部の外面にはカキ目を施し，口縁部下位に1条の沈線が巡っている。内面は横ナデが施されている。口縁部内外面には灰釉がかぶっている。胎土は砂粒・長石粒を含み，焼成は良好で色調は灰黄褐色を呈している。口径9.6cm，現存高10.8cmである。

**第24号土坑**（第17図）

本跡は，調査区の東側の $B7a_7$・$B7a_8$ 区にかけて位置している。

平面形は，長径240cm，短径130cmの楕円形を呈し，長径方向はN－65°－Eである。壁はロームで緩やかに外傾して立ちあがるが，西壁の一部は立ちあがりが急である。底面は断面がV字状を呈している。確認面からの深さは，最深部で43cmを測る。

覆土は，上位が褐色土，下位が明褐色土でロームを多量に含み，炭化粒子を極微量に含み，下位は粘性があり，各層ともよく締まっている。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第25号土坑**（第17図）

本跡は，調査区の東側の $B7a_7$・$B7b_8$ 区にまたがって位置している。

平面形は，長径220cm，短径92cmの中央部がややふくらむ不整楕円形を呈し，長径方向はN－31°－Wである。壁はロームで外傾して立ちあがるが，北東側や南東側は緩やかである。底面もロームで緩い起伏があるが，硬くはない。南東側の壁の下部は焼けて焼土化している。

覆土は，南東端部に焼土が多く見られる以外は暗褐色土が主で，ローム粒子を中量，小さな炭化材を少量に含み，締まりが弱い。南東部には，焼土層の周囲に暗赤褐色やにぶい赤褐色を呈する焼土粒子を少量から多量，炭化粒子を少量，小さな炭化材や焼骨片を含むやわらかく締まりの弱い土層が堆積している。

遺物としては，上記の焼骨片や炭化物の他に焼けた鉄片もみられ，本跡は最近のものと推定される。

**第26号土坑**（第17図）

本跡は，調査区の東側の南端部の $B8d_6$・$B8d_7$・$B8e_6$・$B8e_7$ 区の4グリッドにまたがって位置するが，南側は調査区域外へ延びており，全容は把握できない。

平面形は，現存の長軸109cm，短軸184cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－18°－Wを指すものと思われる。壁はロームで，3段に掘り込まれ，第23号土坑と同様の形状を呈している。壁は全体的には外傾して立ちあがるが，上段の西壁と最下段の東壁は直立気味である。壁質はロームブロックが露出していて，凹凸がある。上・下段とも平坦面は水平に近く，第23号土坑とは異なっている。東西両側の段の幅が広く，南北両側の段の幅が狭い傾向は類似している。最下段は溝状を呈し，断面形がU字状となっている。壁面は西壁の傾きが緩く，東壁は急に立つ。確認面からの深さは94cmを測る。

覆土は，上位と南側の壁寄りが褐色土で，ローム粒子が中量，炭化粒子が極微量に含まれ，壁際は締まりがあるが，それ以外は締まりが弱い。中位以下は暗褐色土で，粗いローム粒子が多量，ローム小ブロックが少量，炭化粒子が少量含まれていて，ザラザラして締まりが弱い。

遺物は，北西側の壁近くの覆土下位からメノウ製の石鏃1点が出土したが，流れ込みと判断され，本跡の時期は不明であるが，形状からみると第23号土坑に近いものと推定される。

**第27号土坑**（第17図）

本跡は，調査区の東側の南端部の $B7d_7$・$B7d_8$・$B7e_7$・$B7e_8$ 区の4グリッドにまたがって位置す

るが，南側は調査区域外へ延びている。

平面形は，現存の長軸171cm，短軸122cmの隅丸方形を呈し，長軸方向はN－0°を指すものと思われる。壁はロームで直立ないしやや外傾して立ちあがる。西壁は上部の崩れが著しい。底面は中央部が溝状に凹み，湾曲気味となる。底面の凹みは幅が25～30cm前後で，深さは10cm内外で，第23・26号土坑のように明確な溝状を呈してはいない。北側が若干低く，南にむけてなだらかに上る。確認面からの深さは，最深部で96cmを測る。

覆土は，上位が黒褐色土，中位が暗褐色土で，下位は褐色土となる。上位は粗いローム粒子を中量，炭化粒子を極微量に含み締まりが弱い。中位は粗いローム粒子を少量から中量，炭化粒子を極微量に含み，ザラザラして締まりが弱い。下位はロームを多量に含み，締まっている。全体的にみると凹レンズ状の自然堆積を示している。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第28号土坑**（第17図）

本跡は，調査区の東側の $B8c_6$ 区に位置し，北東端が $B8c_7$ 区にかかっている。

平面形は，長軸253cm，短軸89cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－51°－Eである。壁はロームで直立ないし外傾して立ちあがり，南西壁の一部は内湾気味に直立する。底面もロームでほぼ平坦であるが，踏み固められてはいない。確認面からの深さは51cmを測る。

覆土は，上位が黒褐色土，中位が暗褐色土，下位と壁際が褐色土となり，凹レンズ状の自然堆積と考えられる。上・中位にはローム粒子を少量から中量，炭化粒子や小さな炭化材を極微量に含み締まりが弱い。下位は粗いローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，炭化粒子を極微量に含むが，上・中位よりは締まりがある。

遺物は，北東側の覆土上位から古墳時代後期の土師器坏の口縁部片が1点，南側の覆土中から胴部片2点が出土し，接合した。これからみると，本跡の時期は鬼高期と推定される。

**第28号土坑出土遺物**（第28図8）

8は，覆土中から出土した土師器の坏で，約8分の1程度しか残存していない。丸底の底体部から内湾して立ちあがり，口縁部との境に鋭い稜を有し，口縁部は直立している。口縁部内外面は横ナデ，体部内外面はナデが施されている。胎土は砂粒・雲母・スコリアを含み，焼成は普通で，色調は褐灰色を呈している。推定口径12.8cm，現存高3.6cmである。

**第29号土坑**（第19図）

本跡は，調査区の東側の北端部の $A8i_7$・$A8j_6$・$A8j_7$・$B8a_6$・$B8b_7$ 区の5グリッドにまたがって

位置する大形の不整楕円形を呈する土坑である。北東端部は調査区域外へ延びている。

平面形は，現存の長径665cm，短径188cmの不整楕円形を呈し，印象としては舟底状と考えられ，長径方向はN－25°－Eを指すものと思われる。壁はロームで途中に段を有しながら外傾して立ちあがる。北東，南西の両端部は緩やかに立ちあがる。底面も中央部が最も深く，ほぼ平坦であるが，中央にむかって周囲からなだらかに落ち込むように観察できる。確認面からの深さは，最深部で91cmを測る。

覆土は，上・中位が黒褐色土，極暗褐色土，暗褐色土と暗い色調を呈し，下位と壁際には褐色土，明褐色土がみられ，凹レンズ状の自然堆積と判断される。上・中位にはローム粒子が少量，炭化粒子が極微量に含まれ，上位は締まりが弱いが，中位は締まりがある。下位は粗いローム粒子が多量，ローム小ブロックが少量，炭化粒子が極微量に含まれ，ザラザラして締まりが弱いが，底面近くは締まりがある。

遺物は，南西端の覆土上面の確認面から5～10cmぐらい下位にまとまって口縁部を欠失する須恵器壺が破片の状態で出土した以外には，須恵器の甕の胴部片が11点覆土中から散在して出土しただけである。

本跡は，後記する第32号土坑を古墳の主体部とし，第31・38号土坑とともに周溝となる可能性が考慮されるが，まとめであらためて記述したい。

**第29号土坑出土遺物**（第28図12）

12は，南西側の覆土上位から破片が10数点まとまって出土して器形が復元された須恵器の長頸壺である。頸部以上は欠失し，肩部，体部，底面にも欠損がある。底面は平坦であるが，端部が外下方へ若干突出し，底面の外周に幅1cmほどの低隆帯が巡っている。底部から外傾して立ちあがり，肩部で強く屈曲して頸部に至っている。体部中位に1条の沈線が巡り，肩部には，断面三角形の鋭い突帯が3条巡っている。内外面とも横ナデが施されている。胎土は砂粒・長石・石英粒を含み，焼成は良好で，色調は褐灰色を呈している。底径9.8cm，現存高13.3cmである。

**第30号土坑**（第17図）

本跡は，調査区の東側のB8c8・B8c9区にかけて位置している。

平面形は，長径238cm，短径94cmの不整長楕円形を呈し，長径方向はN－63°－Eである。壁はロームで南・西壁は外傾して立ちあがり，北・東壁は緩やかに傾斜している。底面は緩やかに傾いており，中央部が最も深くなり29cmを測る。

覆土は，上位が暗褐色土，下位と東壁寄りは褐色土，明褐色土となっている。各層とも締まりがあり，ローム粒子，ローム小ブロックを少量含んでいる。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第31号土坑**（第19図）

本跡は，調査区の東側の B8$a_9$・B8$a_0$・B8$b_9$・B8$b_0$区の４グリッドを中心とした位置にあり，北東側の一部は A8$j_0$区にかかっている。北東側で第34・38号土坑と接している。

平面形は，長径720cm，短径373cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－50°－Eである。壁はロームで全体的に緩やかに立ちあがり，底面との区別も明瞭ではない。南西側の傾斜はやや急である。底面もロームで最深部で46cmを測り，周囲にむかって上っていく。南西寄りの底面には起伏や凹凸がみられる。

覆土は，基本的には上位が黒褐色土で，下位が褐色土となり，上位が締まりが弱く，下位は締まりがある。上位にはローム粒子が少量，炭化粒子が極微量に含まれ，中央部には暗褐色土を斑に多量に含む。下位にはローム粒子が多量，炭化粒子が極微量，黒褐色土が微量に含まれている。

遺物は，北東側の覆土中位の黒褐色土層中から煙管の一部が１点と須恵器の甕の胴部の小片２点が出土しただけで，本跡の時期は不明である。

**第32号土坑**（第18図）

本跡は，調査区の東側の A8$j_8$・B8$a_7$・B8$a_8$区にかけて位置している。

平面形は，長軸360cm，短軸269cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－46°－Eである。壁はロームで直立ないし外傾して立ちあがり，確認面からの最深部では129cmを測る。壁に沿って粘土とロームが互層的に積み重ねられていたような痕跡が観察された。また，底面もきわめてよく締まったロームで，凹凸があり底面には雲母片岩の板石（幅30～60cm，厚さ３～５cm）が中央部を中心に敷かれたように残っている。底面の周囲には幅20～30cm，深さ５～10cmの周溝状の溝がやや不規則に断続的に巡っている。

覆土は，ごく一部に暗褐色を呈する部分がみられるが，大半は褐色ないし明褐色のロームと粘土を主とするもので，上位は締まりがあり，中・下位は締まりのある土層と締まりのない土層が互層的に堆積しているが，底面直上の褐色土層は硬くよく締まっている。全体的にローム粒子やロームブロック，粘土が多く含まれ，雲母片岩の板石片が混入する割合が高い。覆土は後世の撹乱を受けているものと思われ，それによってロームや粘土・雲母片岩片が雑多に混在するものと判断される。

遺物は，土師器，須恵器片の他に擂鉢，土鍋，陶器片および焼骨片が若干出土しているが，本跡に伴うと思われるものはなく，本跡の時期は不明である。なお，覆土の下位から底面にかけて大量の雲母片岩片が出土しており，底面近くの周壁部には多量の粘土が存在し，最厚部で50cm，

平均でも10～20cmを測る。これらの出土遺物と底面の周溝状の落ち込みから判断すると，本跡は古墳の埋葬主体部で，雲母片岩の箱式石棺が設置され，周囲に粘土が貼られていたものと推測される。現状では撹乱が著しいが，このような推定も可能かと思われる。

**第32号土坑出土遺物**（第28図11）

11は，南側の覆土中から出土した陶器の擂鉢の口縁部片である。体部から外傾して立ちあがり，肩部に高い突帯を巡らし，口縁部は内傾気味に立ち，端部は外傾している。内外面とも釉を施しており，口縁部と内面は灰白色，体部外面はにぶい黄橙色を呈している。胎土は砂粒・長石・石英粒を多く含み粗い。焼成は良好である。推定口径29.0cm，現存高5.7cmである。

**第33号土坑**（第18図）

本跡は，調査区の東側の $B8_{c4}$・$B8_{c5}$ 区にかけて位置している。

平面形は，長径159cm，短径95cmの楕円形を呈し，長径方向はN－54°－Wである。壁はロームで，緩く外傾して立ちあがる。底面もロームであるが平坦ではなく，断面形が擂鉢状を呈し狭い。確認面からの深さは，中央部で26cmを測る。

覆土は，上位が暗褐色，下位が褐色を呈し，いずれも締まりがある。含有物はローム粒子と炭化粒子が主で，上位はいずれも少量で，下位はローム粒子のみを多量に含んでいる。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第34号土坑**（第20図）

本跡は，調査区の東側の $A8_{j0}$ 区に位置し，東側で第38号土坑，南側で第31号土坑と接しているが，新旧関係は不明であり，あるいは3者は一連の遺構として把握されるものかもしれない。

平面形は，現存の長軸113cm，短軸112cmの隅丸方形を呈し，長軸方向はN－10°－Wを指するものと思われる。壁・底面ともロームで，壁は緩く立ちあがり，底面は平坦で硬い。確認面からの深さは14cmを測る。

覆土は，土層図を作成できなかったが，ローム粒子を少量含む褐色土が堆積していた。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第35号土坑**（第18図）

本跡は，調査区の東側の北端近くの $A8_{i7}$・$A8_{i8}$・$A8_{j7}$・$A8_{j8}$ 区の4グリッドにまたがって位置している。

平面形は，長軸220cm，短軸145cmの不整長方形を呈し，長軸方向はN－58°－Eである。壁はロー

ムで良好に検出され，西壁は直立し，その他は外傾して立ちあがる。底面もロームで凹凸があり，中央部には凹みがある。確認面からの深さは，最深部で69cmを測る。

覆土は，全体的に暗褐色で，ローム小ブロックを極微量に混入し，締まりがある。南西側などの壁寄りには褐色土が堆積してやや明るい色調を呈し，含有物はローム粒子少量，炭化粒子極微量である。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第36号土坑**（第19図）

本跡は，調査区の東側の $B9a_2$・$B9b_3$ 区にかけて位置している。

平面形は，長径157cm，短径58cmの長楕円形を呈し，長径方向はN－5°－Eである。壁はロームで直立ないしやや外傾して立ちあがる。底面もロームで南から北へ向けてやや低くなり，北西端部に深さ45cmの小ピットが穿たれている。小ピットの北壁はやや抉り込まれている。確認面からの深さは31cmである。

覆土は，上位が暗褐色を呈し，以下は褐色で全体的に締まりが弱い。含有物はローム粒子が少量ずつ各層に含まれ，ローム小ブロックや炭化粒子が極微量に混じっている。小ピットの覆土は，暗褐色土でローム粒子・ローム小ブロックを少量から中量に含み，やわらかく締まりがない。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第37号土坑**（第19図）

本跡は，調査区の東側の $B9a_3$ 区に位置している。

平面形は，長軸255cm，短軸129cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－60°－Eである。壁はロームで外傾して立ちあがる。壁高は西側で約40cm，東側で約30cmとなるが，これは地山の傾斜によるものである。底面もロームで締まりがあり，僅かな凹凸を有するが，基本的には平坦である。確認面からの深さは，最深部で48cmを測る。

覆土は，全体的に粗いローム粒子中量，ローム小ブロック少量を含む褐色土で，上位より下位の方がやや締まりがある点から分層したが，ほとんど同一に近いものである。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第38号土坑**（第20図）

本跡は，調査区の東側の $A8i_0$・$A9i_1$・$A8j_0$ 区の3グリッドにかけて位置する溝状の土坑で，南側で第31・34号土坑と接しているが，新旧関係は不明である。あるいは3基が一連のものとして把えられ，古墳の周溝となる可能性もある。本跡の北側は調査区域外へ延びている。

平面形は，現存の長径565cm，短径85cmの長楕円形を呈し，長径方向はN－11°－Eを指すものと思われる。壁はロームで緩やかに外傾して立ちあがる。底面もロームであるが，締まりはあまりなく北側にむけて幅広くなっていく。底面には凹凸があり，やや目立つ凹みが中央部と南側寄りに認められる。確認面からの深さは，最深部で30cmを測る。

覆土は，場所によって若干異なるが，上位が暗褐色土ないし黒褐色土で，下位は褐色土となる。含有物は，ローム粒子が上位で少量から中量，下位では多量に含まれ，全体的に締まりのある土層となっている。炭化粒子や焼土粒子の混入は極微量である。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第39号土坑**（第20図）

本跡は，調査区の東側の $A9j_6$・$B9a_6$ 区にかけて位置している。

平面形は，長軸152cm，短軸83cmの隅丸方形を呈し，長軸方向はN－9°－Wである。壁はロームで外傾して立ちあがるが，北東側などでは直立気味である。底面もロームでよく締まっていてほぼ平坦であるが，若干の凹凸がある。確認面からの深さは78cmである。

覆土は，明褐色土ないし褐色土で，粗いローム粒子が中量から多量，ローム小ブロックが微量，炭化粒子が極微量に含まれており，ザラザラして全体的には締まりが弱い。若干の色調の差や混入量の量比などにより7層に区分したが，各層とも類似した層である。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第40号土坑**（第20図）

本跡は，調査区の東側の $A9j_6$・$A9j_7$ 区に大半が位置し，南端部が $B9a_6$・$B9a_7$ 区にかかっている。

平面形は，長径272cm，短径150cmの長楕円形を呈し，長径方向はN－87°－Eである。壁はロームでやや外傾して立ちあがり，西壁は特に緩やかである。底面もロームで，中央の最深部へむけてなだらかに下りる皿状を呈している。深さは30cmを測る。

覆土は，中央部の上位が暗褐色土で，壁寄りと下位は明褐色土ないし褐色土である。上位はローム粒子を少量含み締まっているが，下位はローム粒子の粒が粗く，きわめて多量に含みにザラザラして崩れ易く締まりも弱い。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第41号土坑**（第20図）

本跡は，調査区の東側の $A9j_7$・$A9j_8$・$B9a_7$・$B9a_8$ 区の4グリッドにまたがって位置している。

平面形は，長径252cm，短径145cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－0°である。壁・底面と

もローム で，壁は直立ないしやや外傾して立ちあがる。底面は全体的にみると緩やかな凹凸があり，北西壁寄りが最も深く，37cmを測る。壁は凹凸があり硬いが，底面はあまり硬くない。

覆土は，上位は黒褐色ないし暗褐色のやや暗い色調を呈するが，下位は褐色ないし明褐色を呈し，明るい。含有物は粗いローム粒子が中量から少量，ローム小ブロックが少量から中量に含まれ，ザラザラして全体的には締まりは弱い。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第42号土坑**（第20図）

本跡は，調査区の東側の $A9j_9$・$B9a_9$ 区にかけて位置している。

平面形は，長径130cm，短径78cmの楕円形を呈し，長径方向はN－87°－Eである。壁・底面ともロームであるが，あまり硬くない。壁は外傾して立ちあがり，西側がやや急で，東側にむけてなだらかに立ちあがる。底面も西寄りが深く，最深部で40cmを測る。

覆土は，西寄りの底面近くに暗褐色のやや暗い色調の部分がある以外は，褐色ないし明褐色を呈する。粗いローム粒子が極めて多量に含まれ，ザラザラして締まりが弱い。

遺物は，土師器・須恵器片３点，雲母片岩の小片４点などが出土したが，図示できるものはない。本跡の時期は不明であるが，覆土が類似する他の土坑との関連が考えられる。

**第43号土坑**（第21図）

本跡は，調査区の東側の $B9a_9$・$B9a_0$ 区にかけて位置している。

平面形は，長径190cm，短径164cmの楕円形を呈し，長径方向はN－24°－Wである。壁はロームで緩く外傾して立ちあがり，南側には浅い凹みがあるが明瞭ではない。底面もロームで擂鉢状を呈し硬い。確認面からの深さは，最深部で49cmを測る。東側は撹乱を受けている。

覆土は，上位が暗褐色，極暗褐色のやや暗い色調を呈し，下位は褐色ないし明褐色を呈する。含有物はローム粒子・ローム小ブロックで，粒子が粗くザラザラして締まりが弱い。

遺物は土師質土器の小片１点のみで，本跡の時期は不明である。

**第44号土坑**（第21図）

本跡は，調査区の東側の $B9a_0$・$B0a_1$・$B9b_0$・$B0b_1$ 区の４グリッドにまたがって位置し，南東側で第45号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長径350cm，短径180cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－60°－Wを指すものと思われる。壁はロームで北側は外傾し，南側はほぼ直立し，西側は緩く外傾し，東側は緩やかで不明瞭となる。底面もロームで緩い起伏があり，中央部は特に凹凸が目立つ。北端部には凹部があ

り，北西壁下に小ピット，東側に落ち込みを有する。確認面からの深さは，中央部で38cm，東側の落ち込みの最深部で63cmを測る。

覆土は，褐色，明褐色，黄褐色の明るい色調を呈し，ローム粒子の粒度の粗密，ロームブロックの大小，量差や僅かな色調の違いで分層したが，全体的にみると粗いローム粒子をきわめて多量に含み，ザラザラして締まりの弱いものである。

遺物は北西壁下の小ピットから土師質土器の小片１点が出土しただけで，本跡の時期は不明である。

**第45号土坑**（第21図）

本跡は，調査区の東側の $B9a_0$・$B0a_1$・$B9b_0$・$B0b_1$ 区の４グリッドにまたがって位置し，北西側で第44号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は，長径306cm，短径213cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－41°－Wを指すものと思われる。壁はロームで硬く，外傾して立ちあがるが，南側は緩やかである。底面もロームで硬いが，踏みしめられてはいない。凹凸があり，北東壁際には落ち込みがある。確認面からの深さは，最深部で50cmを測る。

覆土は，褐色，明褐色を呈するが，南東側と北西側では含有物や締まり具合いが異なる。南東側は，粗いローム粒子中量，ローム小ブロック少量を含むザラザラした土層で，締まりが弱い。北西側は，ローム粒子を少量から中量，黒褐色土や褐色土をまだらに含み，やや締まりがある。

遺物は，南東側のザラザラした覆土中から土師質土器の器高の低い皿の小片が多数出土し，注目される。

**第46号土坑**（第22図）

本跡は，調査区の東側の $A9j_0$・$A0j_1$・$B9a_0$・$B0a_1$ 区の４グリッドにまたがって位置し，東側を第２号堀に切られている。

平面形は，現存の長径600cm，短径406cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－90°を指すものと思われる。壁はロームで緩やかに立ちあがるが，西側はやや急である。底面もロームで全体的に起伏がある。確認面からの深さは，最深部で62cmを測る。

覆土は，上位が黒褐色，中位が暗褐色，下位が褐色を呈し，所謂凹レンズ状の自然堆積を示している。上・中位には粗いローム粒子が中量から多量，炭化粒子が極微量に含まれ，締まりがある。下位はローム粒子少量，炭化粒子極微量を含み，上・中位より更に締まりが強い。

遺物は土師器，須恵器，土師質土器，陶器片などが若干と雲母片岩・花崗岩の石片がみられたのみである。中世の所産と考えられる第２号堀に切られているので，本跡はこれよりは古いが，

詳しい時期は不明である。

**第47号土坑**（第22図）

本跡は，調査区の東側の $A0j_2$・$A0j_3$・$B0a_2$・$B0a_3$ 区の4グリッドにまたがって位置し，第2号堀に西側を切られている。

平面形は，現存の長径531cm，短径321cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－69°－Eを指すものと思われる。壁はロームで全体的には緩く立ちあがるが，南東側はやや急となる。底面もロームで凹凸や起伏があり，南東側の最深部で65cmを測る。

覆土は，基本的には上位から順に黒褐色土，暗褐色土，褐色土が堆積し，中央部には最上位に褐色土が覆っている。南側は撹乱を受けている。黒褐色土にはローム粒子が少量，炭化粒子が微量含まれ，締まりが弱い。暗褐色土には粗いローム粒子が中量から多量，炭化粒子が極微量に含まれ，締まりがある。褐色土にはローム粒子が少量から中量，炭化粒子が極微量に含まれ，締まりがある。全体的にみると，所謂凹レンズ状の自然堆積と判断される。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第48号土坑**（第21図）

本跡は，調査区の東側の $A0j_3$・$A0j_4$・$B0a_3$・$B0a_4$ 区にまたがって位置している。

平面形は，長軸237cm，短軸110cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－52°－Eである。壁はロームで直立ないし外傾して立ちあがるが，北西壁の上部は撹乱を受け，南東側の上部にも崩れがみられる。底面もロームでほぼ平坦で締まりがあるが，西壁下に少し凹みがある。確認面からの深さは93cmである。

覆土は，中央部が暗褐色，黒褐色の暗い色調を呈し，壁寄りと下位には褐色土ないし明褐色土が堆積している。含有物は，上位はローム粒子が中量，炭化粒子，ローム小ブロックが微量に含まれ締まっている。下位は粗いローム粒子が多量に含まれ，締まりがやや弱い。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第49号土坑**（第23図）

本跡は，調査区の東側の $A0j_6$ 区に位置し，北東側を第53号土坑に切られている。

平面形は，現存の長軸156cm，短軸132cmの不整方形を呈し，長軸方向はN－0°を指すものと思われる。壁はロームで北・南壁は直立ないし外傾し，東・西壁は緩やかに外傾している。確認面からの深さは26cmを測る。

覆土は，褐色土の単一層で，上位は締まりがなく下位は締まりがある。含有物としてはローム

をまだらに，炭化粒子を少量含んでいる。

遺物は，西壁際の確認面から長径20～25cmの雲母片岩の板石１点が出土したが，本跡の時期は不明である。

**第50号土坑**（第21図）

本跡は，調査区の東側の $A0j_7$・$B0a_7$ 区にかけて位置している。

平面形は，長径76cm，短径64cmの不整円形を呈し，長径方向はN－71°－Wである。本跡は小ピットの集合体状を呈する小形の土坑である。壁はロームで直立気味に立ちあがるが，硬くはない。底面もロームであるが，締まりがなく４か所の凹みから成る。

覆土は，褐色，明褐色を呈し，ローム粒子少量，炭化粒子極微量を含み，締まりが弱い。

遺物は，土師器の坏の破片２点が出土したが，本跡に伴うものとは思われず，時期は不明である。

**第50号土坑出土遺物**（第28図10）

10は，北西側の覆土中から出土した内黒の土師器の坏で，約４分の１が残存している。丸底気味の底部から内湾して口縁部に至っている。口縁部外面と内面は横ナデ，底体部は雑なナデが施されている。胎土は微砂を含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。推定口径11.8cm，現存高2.8cmである。

**第51号土坑**（第21図）

本跡は，調査区の東側の $B0c_5$ 区に位置している。

平面形は，長径287cm，短径83cmの長楕円形を呈し，長径方向はN－65°－Wである。壁・底面ともロームで締まりは普通である。壁は外傾しており，北東側が若干緩やかである。底面は北西から南東方向にむけて傾き，最深部で45cmを測り，北西側では20～25cmを測る。

覆土は，上位が暗褐色，下位が明褐色を呈し，全体的に締まりが弱い。含有物は少なく，ローム粒子少量，ローム小ブロック，小さな炭化材を微量に含んでいる。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第52号土坑**（第23図）

本跡は，調査区の東側の北端部の $A0i_2$・$A0i_3$ 区に位置し，北側は調査区域外へと延びている。平面形は，現存の長径246cm，短径116cmの不整楕円形を呈し，長径方向はN－54°－Eを指すものと思われる。壁はロームで外傾して立ちあがり，東側は特に緩やかである。底面もロームで緩い

起伏がある。確認面からの深さは32cmを測る。南西端の一部は撹乱を受けている。

覆土は，上位が黒褐色，中位が暗褐色，下位が褐色を呈し，基本的には凹レンズ状の自然堆積と考えられる。含有物はローム粒子が少量から中量，炭化粒子が極微量から微量に含まれ，上位は締まりが弱いが，中・下位は締まっている。

遺物は，中央部の確認面から45×25cmほどの大きさの雲母片岩の板石が出土しただけで，本跡の時期や性格は不明である。

**第53号土坑**（第23図）

本跡は，調査区の東側の $A0j_6$・$A0j_7$ 区にかけて位置し，南西側で第49号土坑を切っている。

平面形は，長軸186cm，短軸113cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－33°－Eである。壁はロームで外傾して立ちあがるが，北東側は急で北西側は緩やかである。底面もロームで南西から北東方向にむけて階段状に落ち込み，特異な形状を呈する。最深部の深さは75cmを測る。

覆土は，中央部が暗褐色，黒褐色を呈し，壁寄りは褐色，明褐色を呈する。各層中にはローム粒子が微量から多量，炭化粒子が極微量に含まれ，よく締まっている。壁寄りにはローム小ブロックが少量加わる部分がある。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第56号土坑**（第23図）

本跡は，調査区の東側の $B9a_9$・$B9a_0$・$B9b_9$・$B9b_0$ 区の4グリッドにまたがって位置し，第5号墳の北側の周溝の壁面にかかっている。新旧関係は，本跡の上面が周溝により削られたと考えられ，本跡の方が古いものと思われる。

平面形は，長軸260cm，短軸112cmの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－52°－Wである。壁はロームで硬く明瞭で，ほぼ直立気味で，北西・南東側はやや外傾している。底面もロームで硬く良く締まっており，平坦である。壁高は北東側が高く80～85cm，南西側は25～30cmと差がある。

覆土は，上位から黒褐色土，暗褐色土，褐色土の順に凹レンズ状に堆積し，壁際を除いて粗いローム粒子が中量からきわめて多量に含まれザラザラしているが，一部を除いて締まりがある。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

**第57号土坑**（第20図）

本跡は，調査区の東側の $B9a_8$・$B9a_9$ 区にかけて位置している。

平面形は，長径150cm，短径69cmの楕円形を呈し，長径方向はN－67°－Wである。壁はロームで外傾して立ちあがる。底面は凹凸があり，北から南へむけて傾斜する。確認面からの深さは，最

深部で27cmを測る。

覆土は，南東側の上位が褐色土で，その他は明褐色土でともに締まりはある。上位には粗いローム粒子が多量，下位にはローム粒子が中量，ローム小ブロックが少量含まれている。

遺物は出土していないので，時期は不明である。

## 第3節　溝・堀

当遺跡からは第1～第6号の6条の溝ないし堀と考えられるものが検出されている。第2号としたものは形状や出土遺物から中世の構築と推定されるが，他はほとんど出土遺物がなく，時期は不明である。

### 第1号溝（第24図）

本跡は，調査区の東側の $B9c_7$～$B9c_9$・$B9d_8$～$B9d_9$・$B9e_9$ 区の計6グリッドにまたがって位置し，南側は調査区域外へと延びている。本跡は，第5号墳の残存する墳丘と周溝の間に挟まれて検出されたが，覆土からみると古墳よりは新しいものと思われる。北西端部は一部攪乱されている。

平面形は，北西・南東方向をむく弧状を呈し，現存部での全長10.2m，最大幅1.53m を測る。壁はロームで外傾して立ちあがるが，南西側の傾きがやや急で，北東側は緩やかとなる。断面形はV字状を呈し，底面の平坦部は幅20～30cmで狭い。北西側の端部は緩やかに立ちあがり，自然に消滅するように観察される。壁のロームはゴツゴツして崩れ易い。

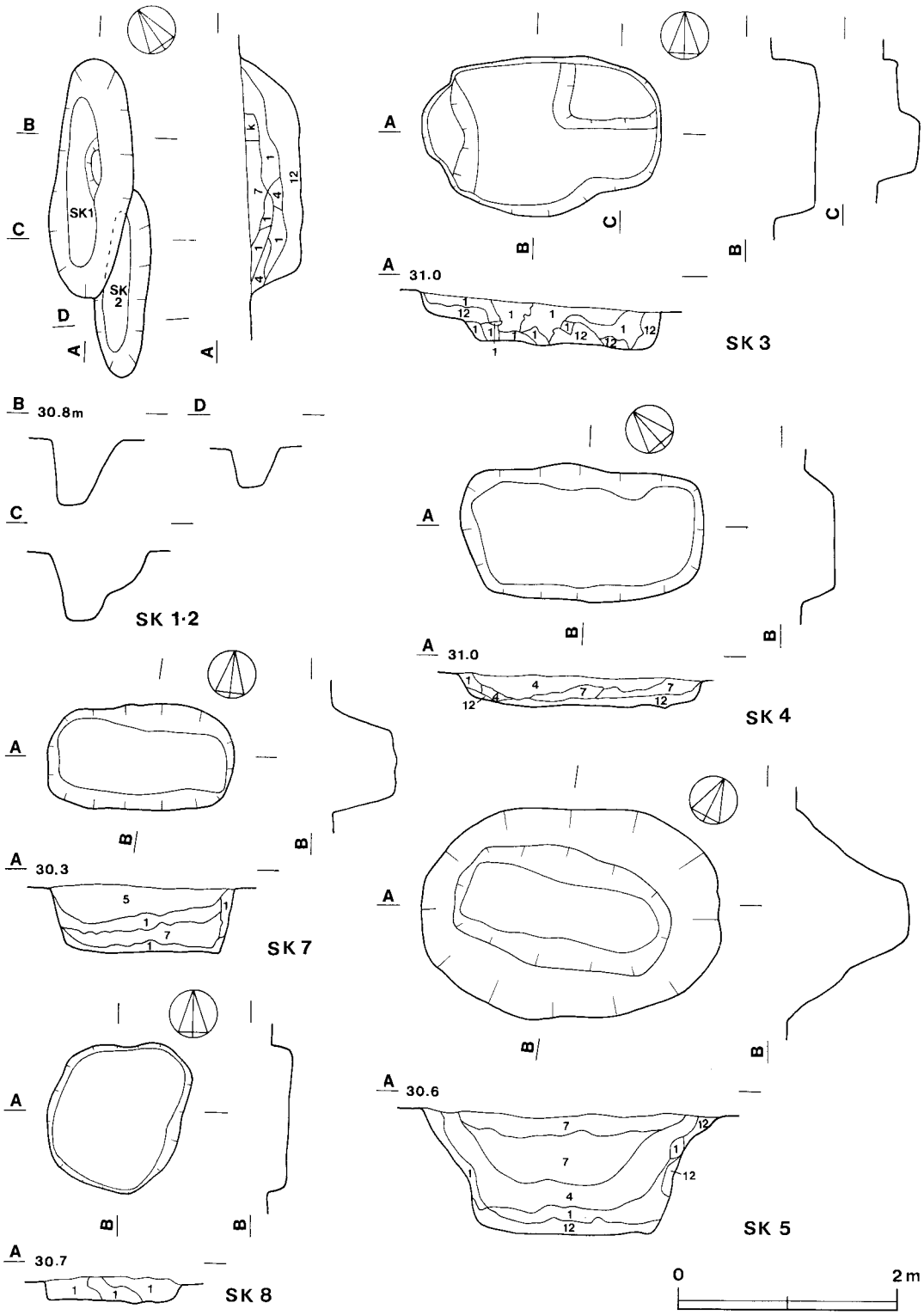
覆土は，中央部が黒褐色，暗褐色を呈し，底面と壁際は褐色となっている。中央部には粗いローム粒子を少量から中量，炭化粒子を極微量に含み，やわらかく締まりが弱い。褐色土には多量のロームをブロック状に含み，締まりは弱い。自然堆積と考えられる。

遺物は出土していないので，時期は不明である。覆土の締まり具合から判断するとそれほど古いものとは思われない。

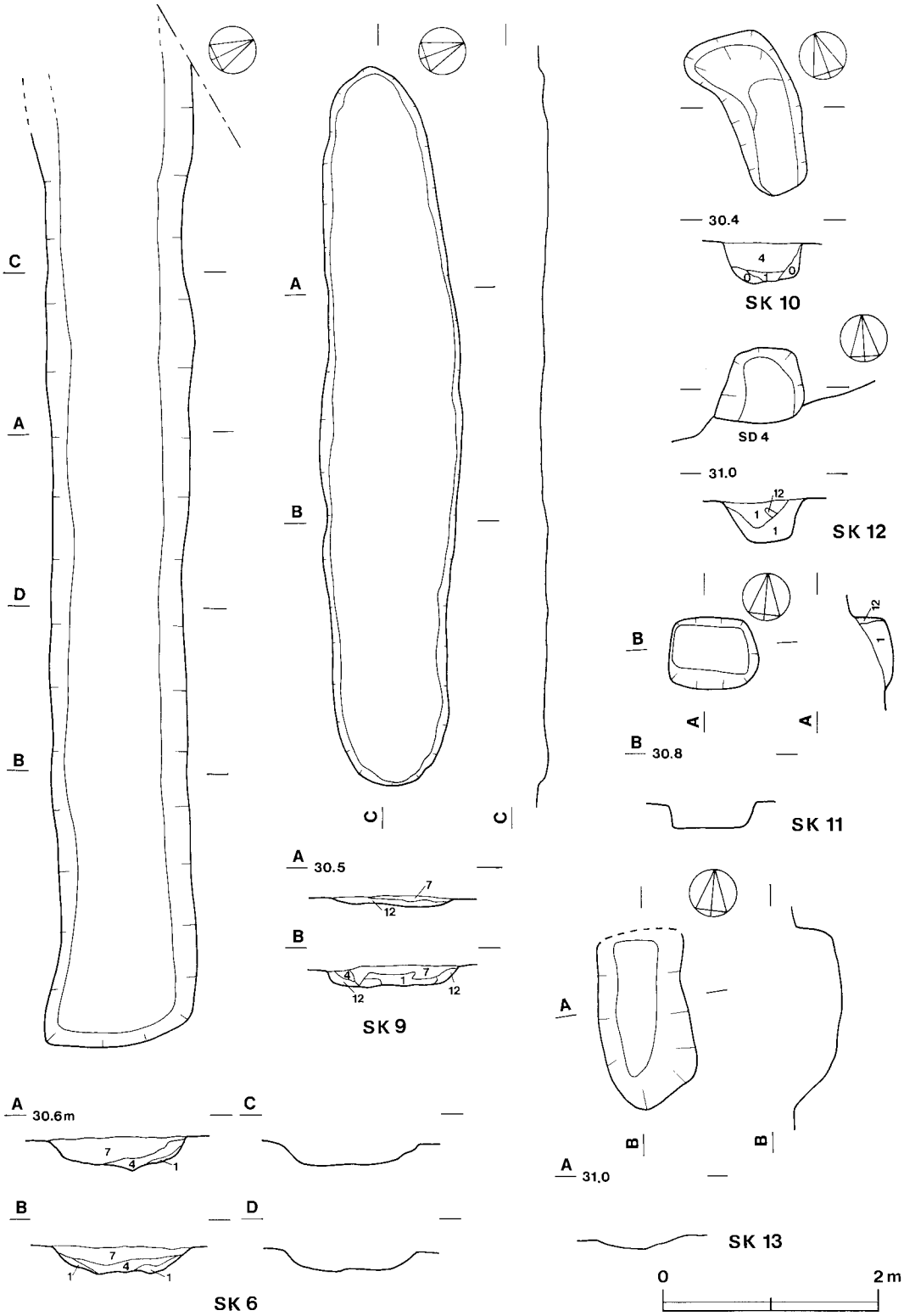
### 第2号堀（第26図）

本跡は，調査区の東側の $A0i_1$・$A0j_2$・$A0j_1$・$A0j_2$・$B0a_1$～$B0e_2$ 区の計14グリッドにわたって位置し，第5号墳の周溝の一部と第46・47号土坑を切って南北に延びている。両端とも調査区域外へ続いている。

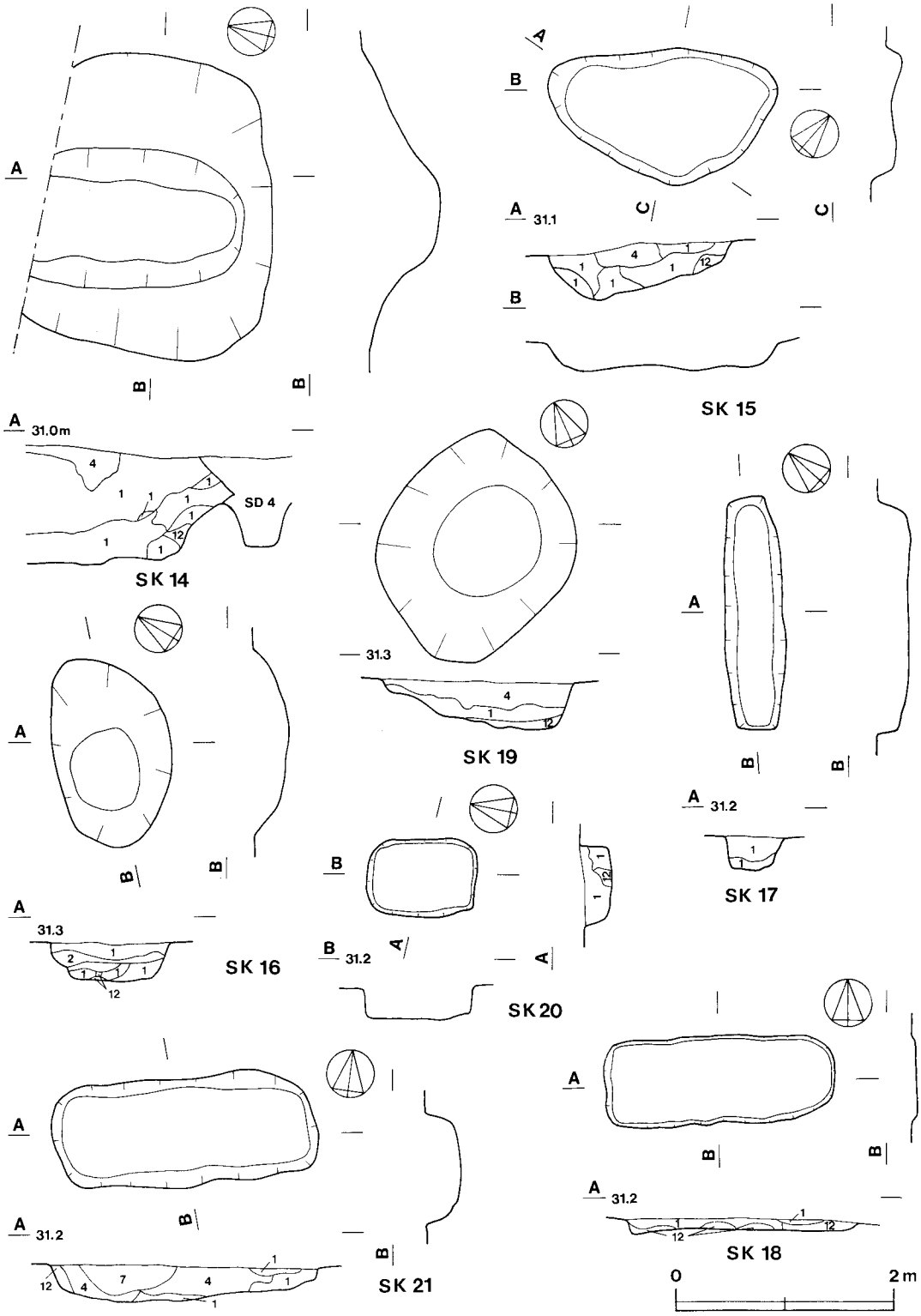
本跡は，現存部の全長23.12m，最大幅2.97m を測る。壁・底面ともロームできわめて明瞭に検出されている。壁は外傾しており，底面は平坦で逆台形状の断面形を呈する。壁は直線的な外傾ではなく，緩やかなカーブを描き，底面近くの10～30cmほどは直立気味となる。中央部に長さ280



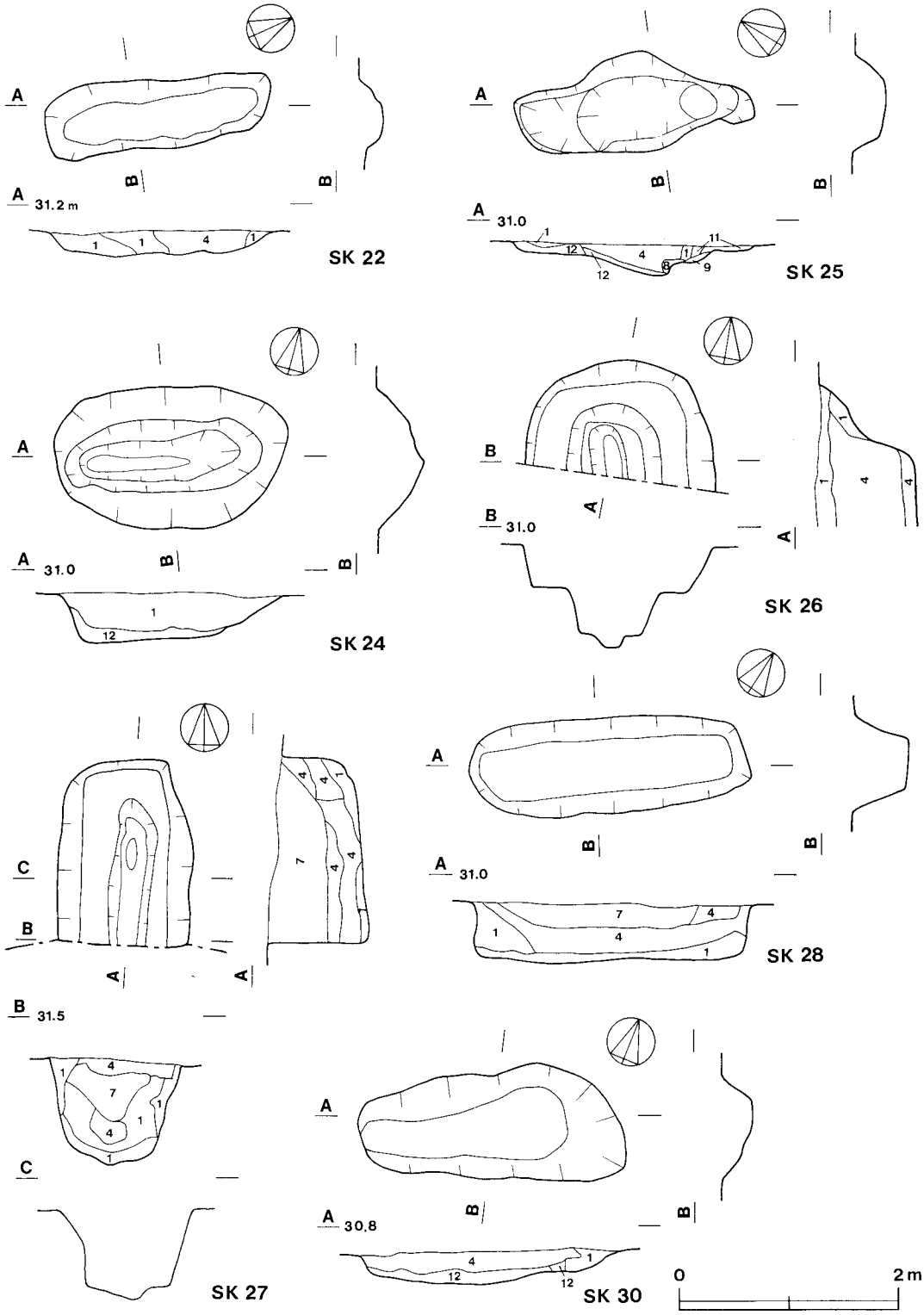

第14図　土坑実測図(1)



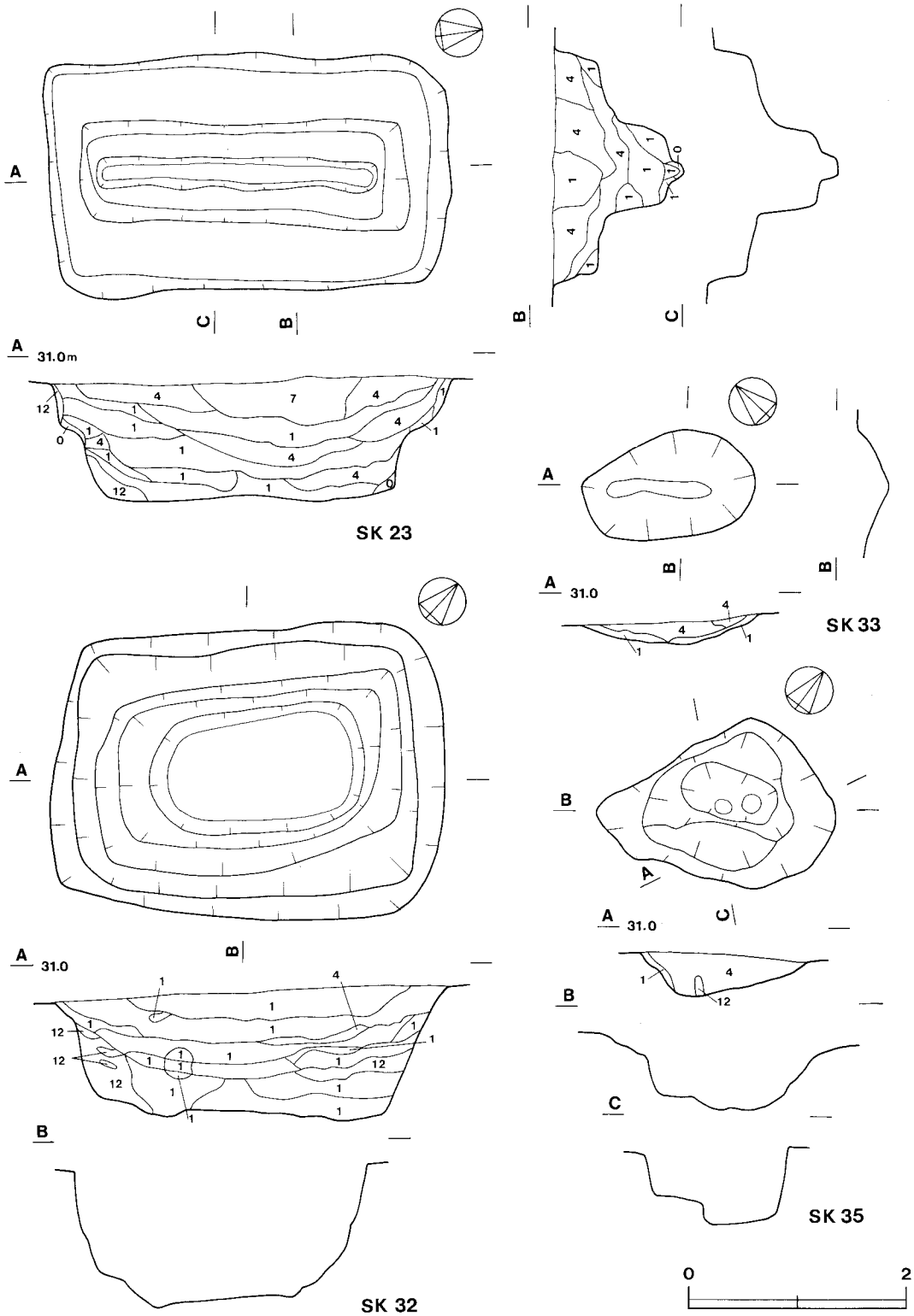

第15図　土坑実測図(2)



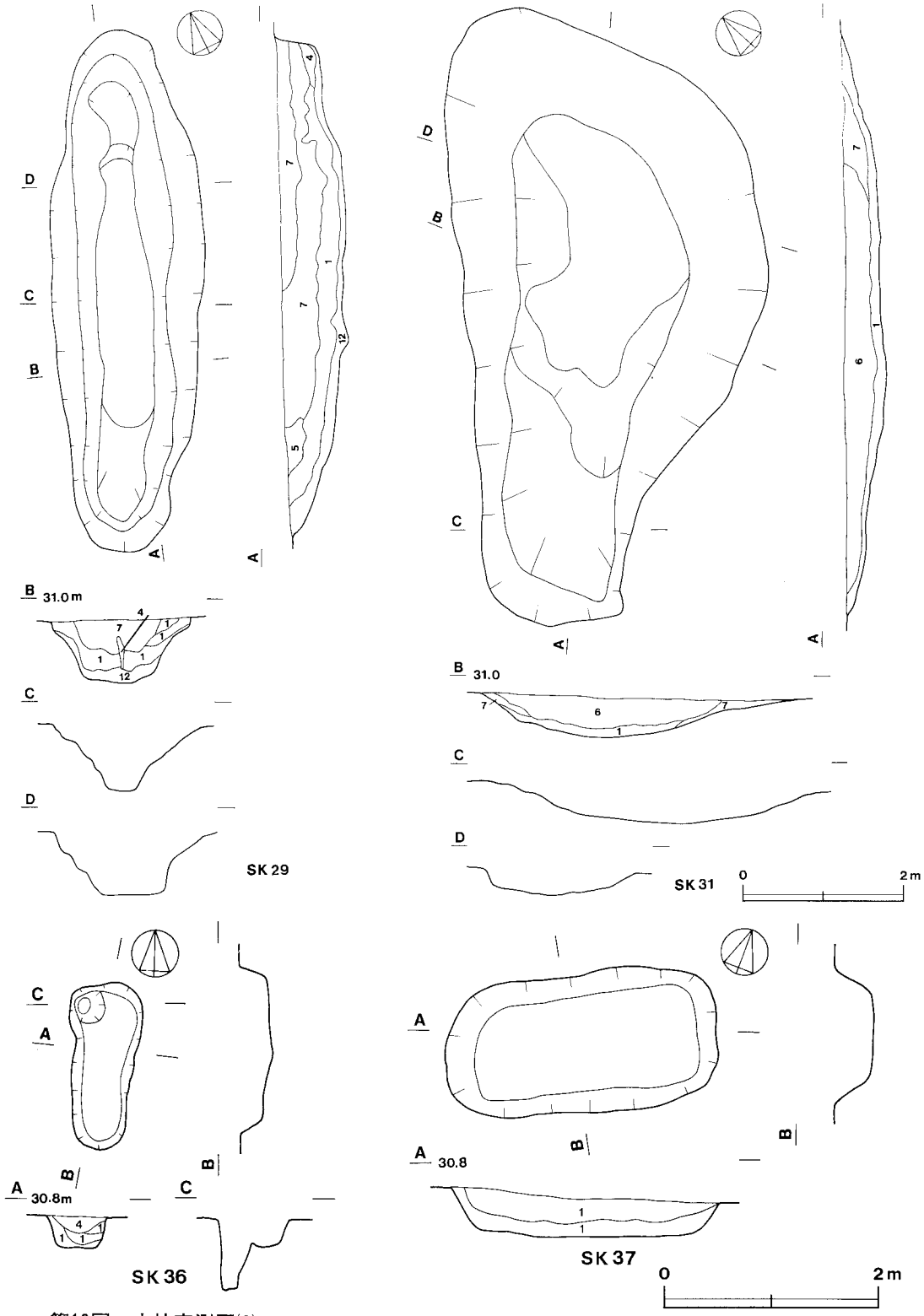

第16図　土坑実測図(3)



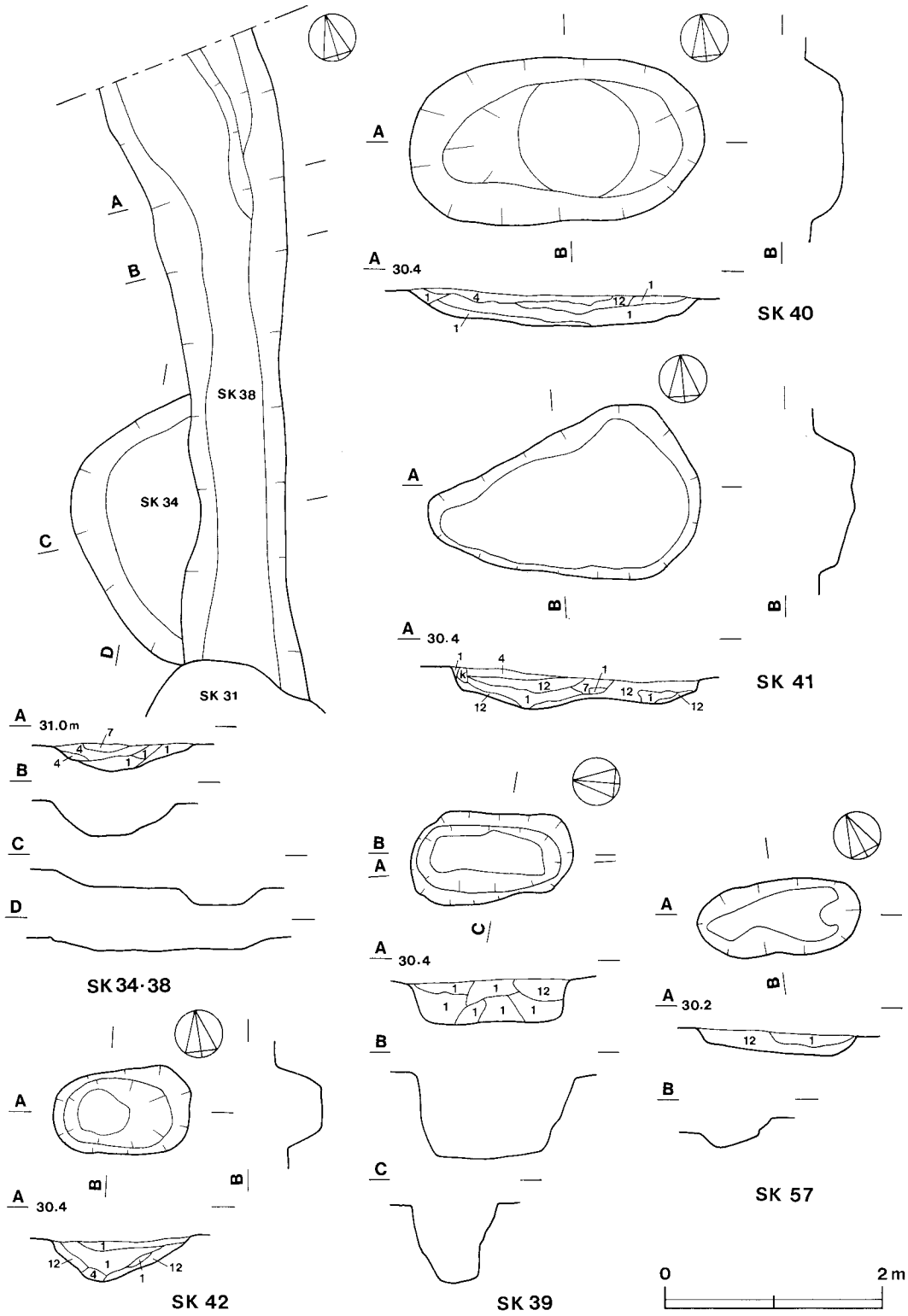

第17図　土坑実測図(4)



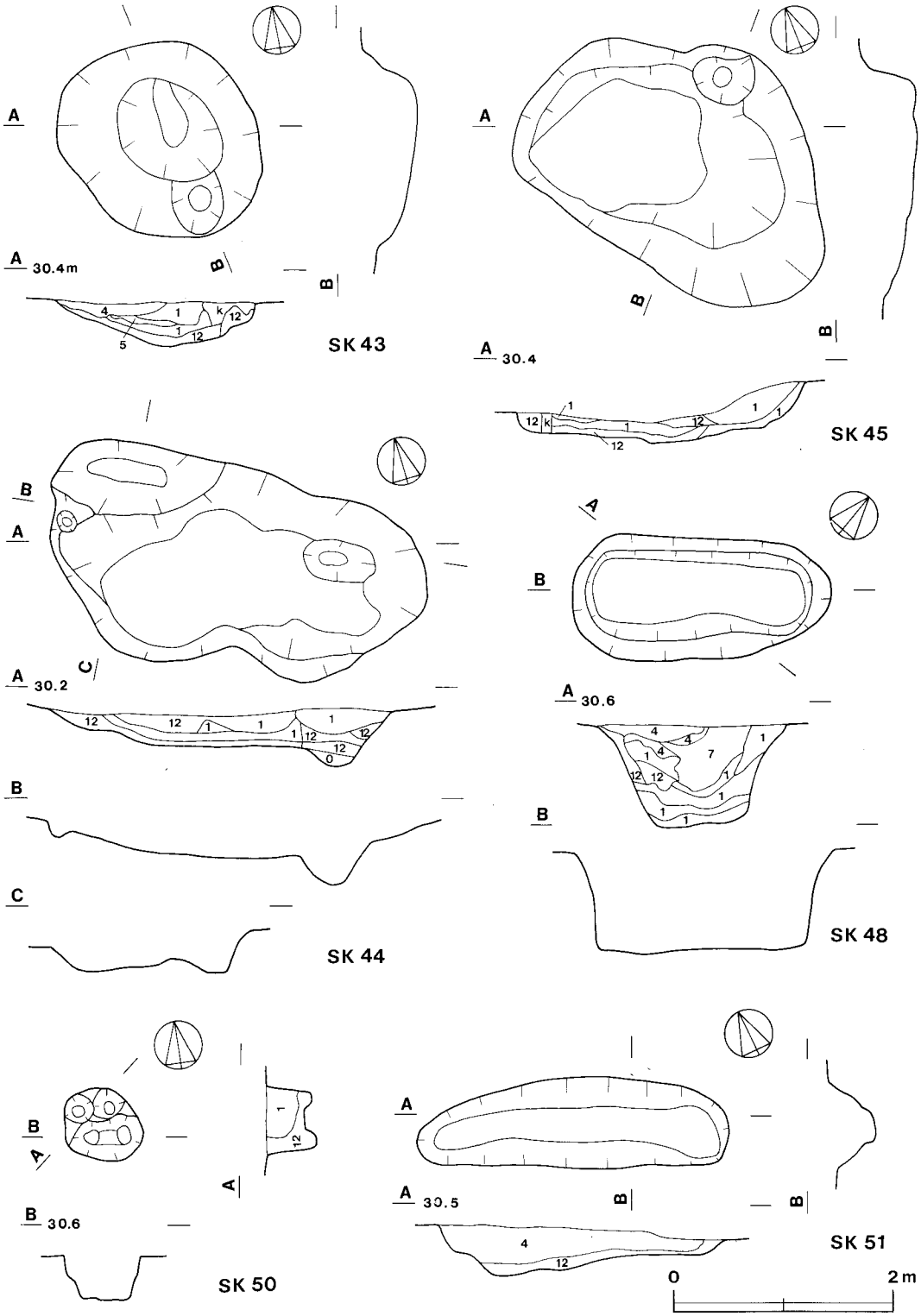

第18図　土坑実測図(5)



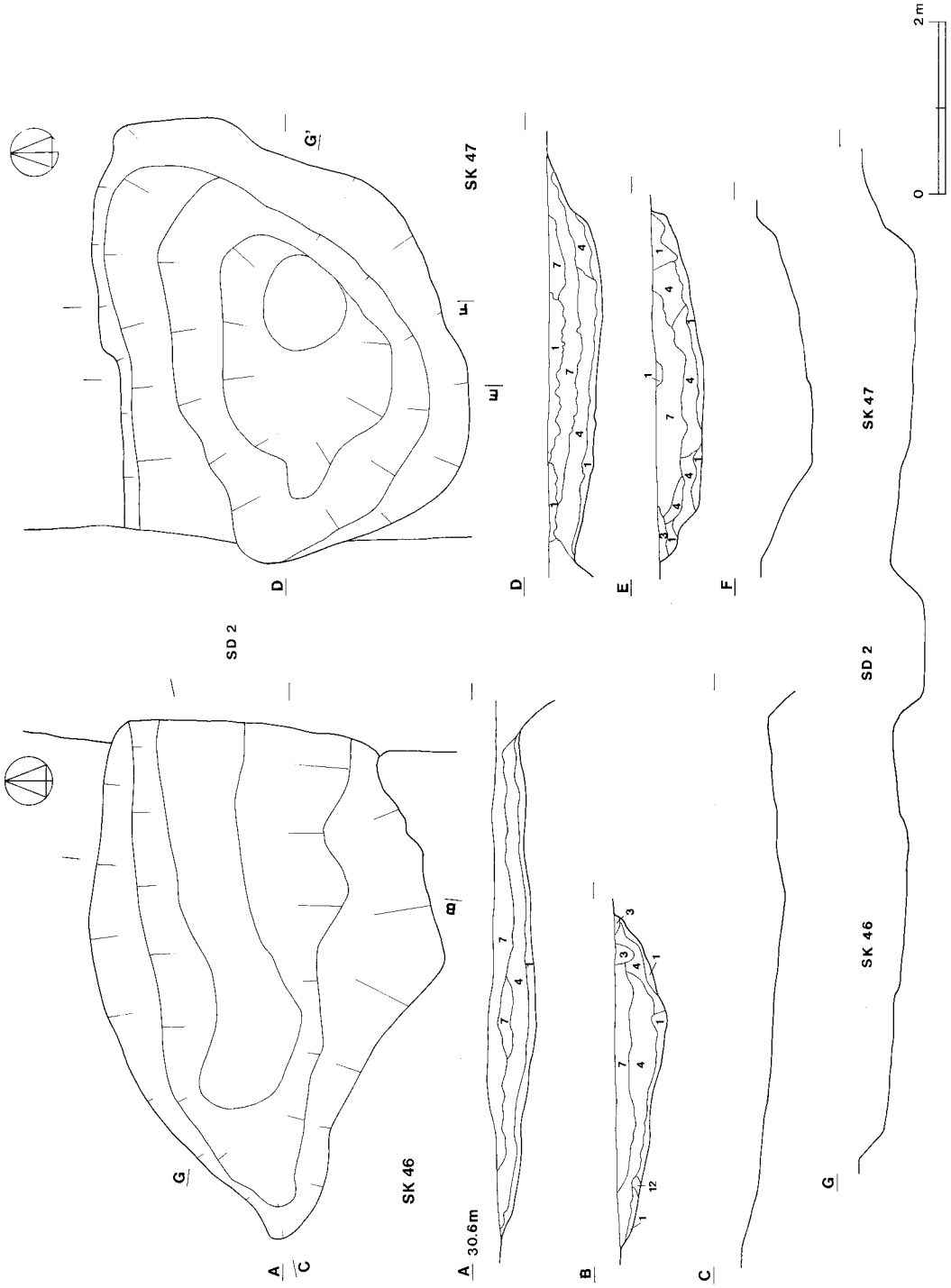

第19図　土坑実測図(6)


SK 38
SK 34
SK 31
A
B
C
D
31.0m
SK 34·38
SK 40
30.4
SK 41
SK 42
SK 39
SK 57
30.2
0
2m

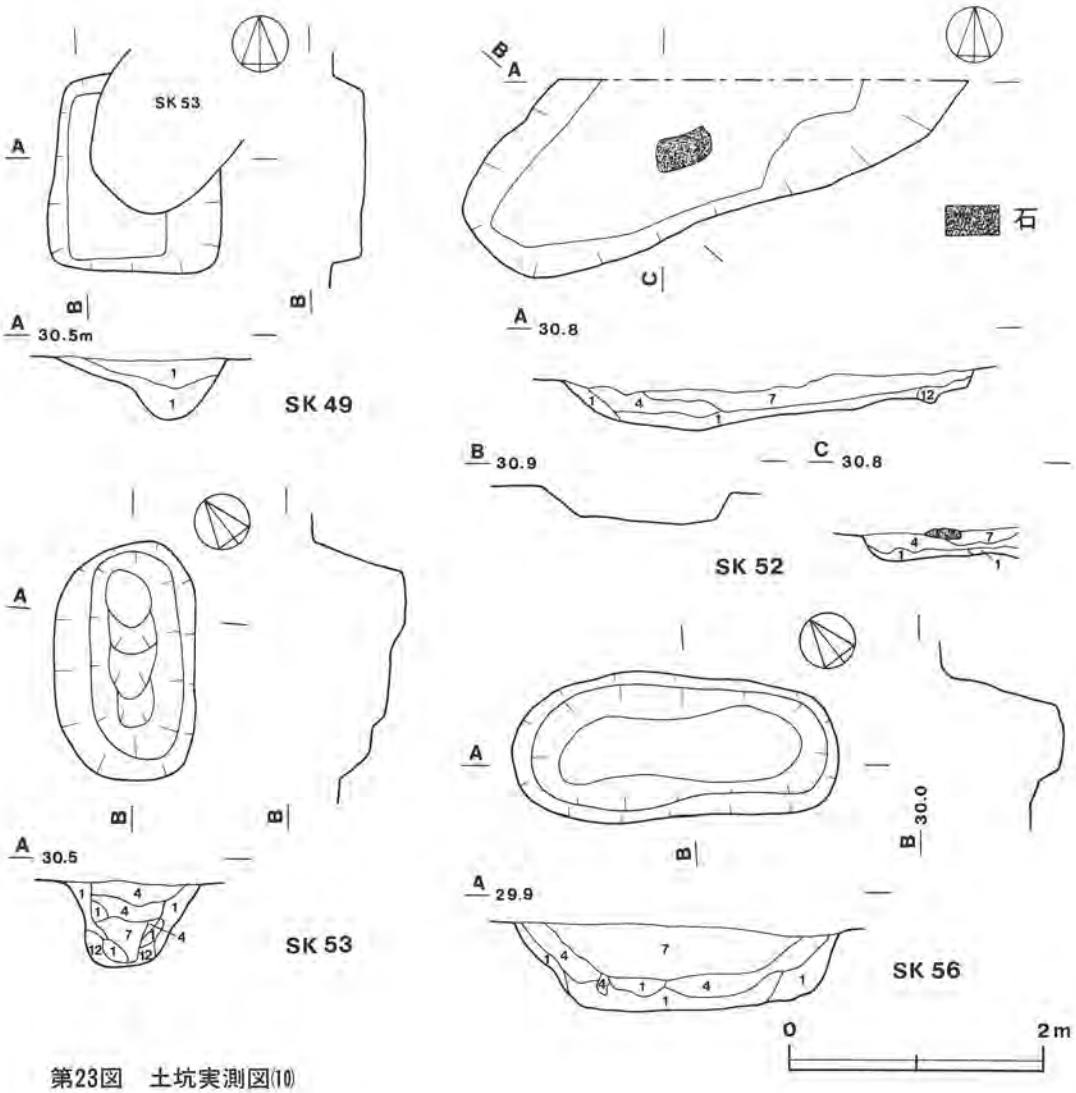
第20図　土坑実測図(7)


SK 43
SK 45
SK 44
SK 48
SK 50
SK 51
A 30.4m
A 30.4
A 30.2
A 30.6
B 30.6
A 30.5
0
2m

第21図　土坑実測図(8)




第22図　土坑実測図(9)




第23図　土坑実測図(10)

cm程の陸橋部が掘り残されている。この部分は確認面からの深さが約40cmで，底面は緩やかで南北端へ下っている。堀の深さは北側で85cm，南側で129cmを測り，南側の方が一段と深く掘り込まれている。底面の幅は95～120cmを測り，若干の幅の広狭はあるが，全体的としては直線的に掘削されている。陸橋部の周囲は精査したが，ピットなどは検出されなかった。

覆土は，本跡の北端部と２基の土坑と重複する地点の２か所で観察した。いずれも褐色を主体とし，壁際や覆土下位に暗褐色を呈する部分がみられる。２か所とも凹レンズ状の自然堆積を示し，全体的に締まりが弱い。覆土の中央部や底面近くには締まりのある部分がある。含有物は粗いローム粒子，ローム粒子が少量から多量に含まれ，明褐色土や黒褐色土の小ブロックが少量から多量に混入し，ザラザラしている。

遺物は，陸橋部の南北両側の覆土下位から底面にかけて出土しており，大半が本跡に伴うものと考えられる。北側では土師質土器の皿，常滑の大甕の破片や馬歯が，南側では陸橋部寄りからほぼ完形の土師質土器の皿などが出土している。これらから判断すると，本跡は中世（13～14世紀頃）に使用されていたものと推定される。

**第２号堀出土遺物**（第28図14～18）

14は，陸橋部より南側の覆土下位から出土した土師質土器の皿で，約３分の１が残存している。丸底気味の底部から口縁部にむけて内湾して立ちあがっている。口縁部内外面は横ナデ，底体部はナデが施されている。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は普通で，色調は橙色を呈している。推定口径11.0cm，現存高2.3cmである。

15は，陸橋部より南側の覆土下位から逆位で出土した土師質土器の皿で，口縁部と体部の一部を欠く以外はほぼ完存している。丸底気味の底部から体部にむけて緩く立ちあがり，軽い稜を有して口縁部にかけて外傾している。口縁部内外面は横ナデ，底体部はナデが施されている。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色を呈している。口径12.2cm，底径3.0cm，器高3.2cmである。

16・17は，陸橋部より北側の覆土下位から破片で出土し，接合の結果，器形が復元された土師質土器の小皿で，共に丸底気味の底部から口縁部にむけて内湾して立ちあがっている。口縁部内外面は横ナデ，底体部は雑なナデが施されている。胎土は砂粒・長石粒を含み，焼成は普通で，色調は前者は橙色，後者は明赤褐色を呈している。16には雲母も含まれている。16は推定口径7.8cm，推定底径3.7cm，器高1.9cmである。17は推定口径7.8cm，推定底径3.2cm，器高2.1cmである。

18は，陸橋部より北側の覆土中から出土した土師質土器の小皿で，約３分の１が残っている。丸底気味の底部から口縁部にむけて内湾して立ちあがっている。口縁部内外面は横ナデ，体部から底部には内外ともに雑なナデを施している。胎土は砂粒・雲母・長石粒を含み，焼成は普通で，色調は明赤褐色を呈している。推定口径8.2cm，底径2.4cm，現存高1.7cmである。

**第３号溝**（第24・25図）

本跡は，調査区の中央部の北側を下弦状に第４号溝と並走するように走っている。本跡の調査中に南側に並走する第４号溝を検出した。本跡は，東・西端とも調査区域外へ延びており，全容は把握できていない。現存部の全長は約60m，幅は２～３ｍである。本跡は，中央部から東側にかけて第10・13・14号土坑と重複しているが，これらの上面を切っており，いずれよりも新しいものと判断される。また，溝にかかる部分は大木が多く，根による撹乱が著しく，更に最近のゴミ穴もみられ，遺存状況は良好ではない。壁はロームで外傾して立ちあがり，西側は緩やかな段

を有し，東側ではなだらかに立ちあがる。東側の B6$a_3$区あたりでは溝の北側の覆土上位にきわめて硬い土層が確認され，溝の一部が道路として使用された可能性が高い。底面もロームで硬く平坦であるが，丸味を有する部分もある。確認面からの深さは約45～70cmを測るが，50～60cmの部分が多い。

覆土は，褐色土を主体として上・中位に暗褐色や黒褐色を呈する部分が僅かにみられる。壁寄りと底面近くには明褐色のロームが堆積している。含有物はローム粒子が少量から中量，ローム小ブロック，炭化粒子，焼土粒子が極微量に含まれており締まっている。道路として使用されたと考えた部分はきわめて硬く，敲くと金属音を発する程である。

遺物は少なく，西端寄りの土層ベルトの上位から出土した土師質土器の小皿(第28図19)，瀬戸のおろし皿の底部片（第28図13)，土師質土器の皿の半欠品，内耳土器片，砥石１点などである。その他頁岩製の石槍の欠損品１点が検出されているが，本溝に伴うものではない。

本跡の時期は，遺物や覆土の状況からみると中世後半から近世にかけてと推測されるが，確実ではない。性格については，本跡に並ぶように旧道が設置されており，現在でもこの道が高岡と田宮の両地区を分ける地境となっていることから判断して地境溝とするのが妥当かと思われる。

**第３号溝出土遺物**（第28図13・19）

13は，東側の覆土中から出土した瀬戸の灰釉の折縁深皿の底部片である。低い高台部はほぼ直立し，皿部は外傾している。内面中央に四重の同心円文が沈線で描かれ，高台部外面には斜格子目文が刻まれ，おろし皿としての機能が考えられる。灰釉は高台部外面を除いて施され，ガラス釉で貫乳が認められる。推定底径8.0cm，現存高1.9cmである。

19は，西側の覆土中から出土した土師質土器の小皿で，口縁部の約３分の１を欠失している。糸切りの平底から体部にややふくらみをもちながら外傾している。口縁の一部に黒色の付着物があり，灯芯による焦げと思われる。内外面とも横ナデを施している。胎土は微砂を含み，焼成は普通で，色調は浅黄橙色を呈している。口径6.8cm，底径2.8cm，器高2.2cmである。

**第４号溝**（第24・25図）

本跡は，調査区の中央部の北側を下弦状に第３号溝と並走するように延びており，東端部は A7$i_1$区で終っている。西端部は A5$j_5$区に始まり，B6$a_1$区でやや幅広くなり，A6$j_9$区でまた幅狭くなっている。本跡は平面や断面での観察によれば，２度以上にわたって掘削されたものと考えられる。まず最初に東・西端に幅狭く残存する細く浅い溝が掘られ，次に中央部に前者より幅の広い溝が掘り込まれたと思われる。中央部の一部には断面図で見るような段が残り，古い溝の存在を示している。第３号溝との新旧関係は土層図にみるごとく，本跡の方が新しいものと判断される。ま

た，各所にゴミ穴などの撹乱を受けており，遺存状況は良くない。

本跡の全長は66.72m，幅は最大で1.54m，最小で0.25m である。深さは中央部の最深部で84cmを測る。壁はロームで直立ないし外傾して立ちあがり，底面もロームで平坦で硬い。

覆土は，暗褐色ないし褐色を呈し，ローム粒子，粗いローム粒子を中量から多量に含み，ザラザラして締まりが弱い。ロームやローム小ブロックの混入も目立ち，全体としてはやわらかく新しい時期の覆土と考えられる。

遺物は，須恵器片，土師器片も若干出土しているが，他に近現代の陶器片やガラス製の遊技具も出ており，すべて流れ込みと判断される。したがって，本跡の時期・性格ともに不明である。

**第5号溝**（第26図）

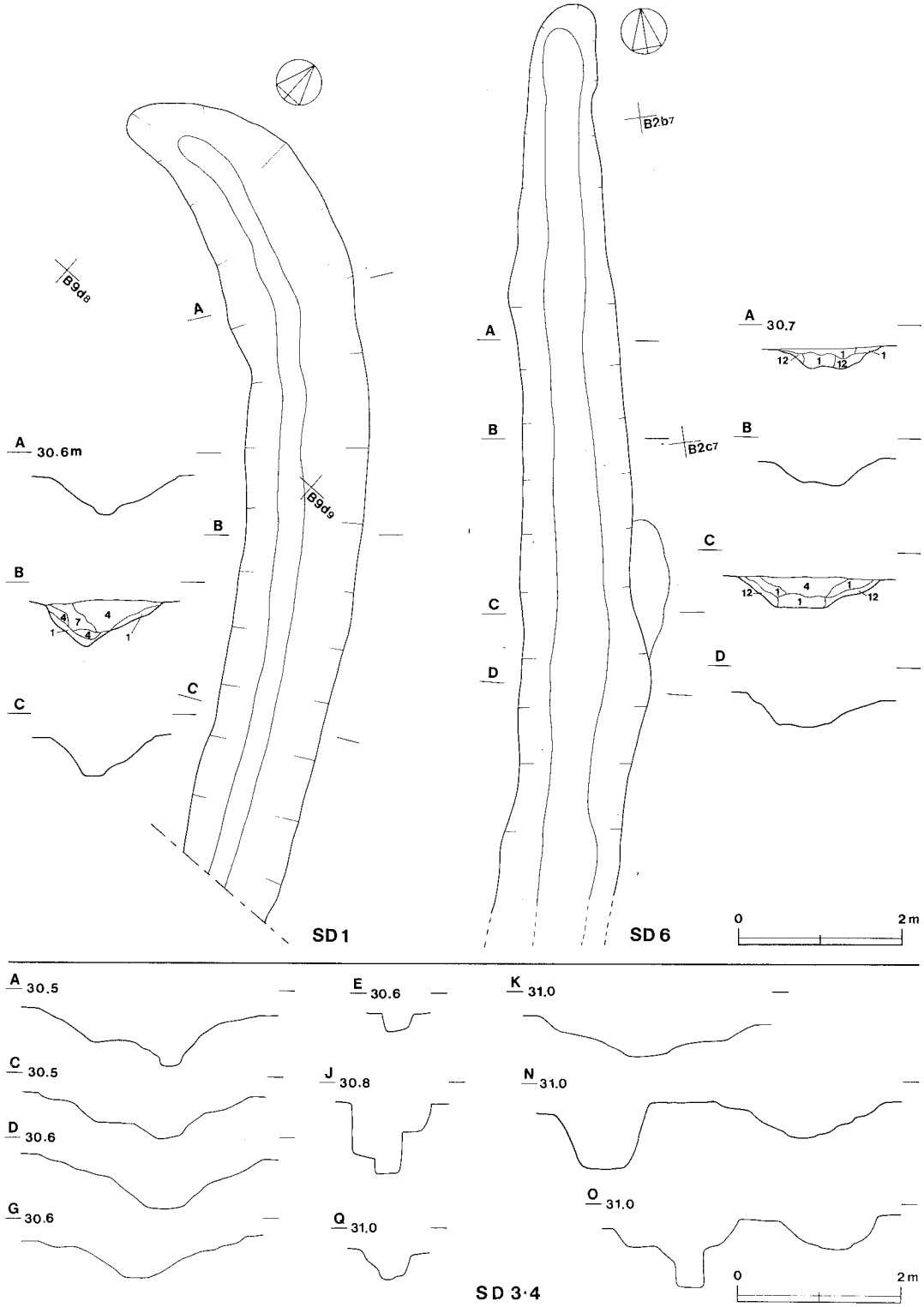
本跡は，調査区の中央部やや東側の $B6d_7$・$B6d_8$ 区から東ないし北東方向へ延び，$B7b_1$・$B7b_2$ 区でほぼ直角に屈曲して北へ走る。本跡は2条の溝から成り，北・西側をa溝，南・東側をb溝と呼称する。a溝は屈曲して間もなくの $B7a_1$ 区で消滅し，b溝は北方へ延びて先端は $A7i_1$ 区に達する。a・b溝とも南東端は調査区域外へと続いている。a溝の現存長は24.34m，最大幅は0.93mで，b溝の現存長は30.97m，最大幅は1.41m で，b溝の方がやや幅広く，長い。両溝の間は地山面がきわめて硬くなっていて，道路状を呈している。壁はロームで外傾して立ちあがり，底面もロームで硬いが，凹凸や起伏がみられる。a溝の北端部は撹乱を受けている。

覆土は，褐色土が主で，底面近くには明褐色土が堆積しており，b溝の一部には暗褐色を呈する部分もある。含有物としては，ローム粒子ないし粗いローム粒子が少量から中量，炭化粒子が極微量に含まれ，ローム小ブロックがまだらに混じっている。全体的には締まりのある土層となっているが，$B6c_9$ 区あたりでは，a・b溝とも締まりが弱く，やわらかい土層である。傾向としてはa溝の方がb溝より締まりが弱いように観察される。

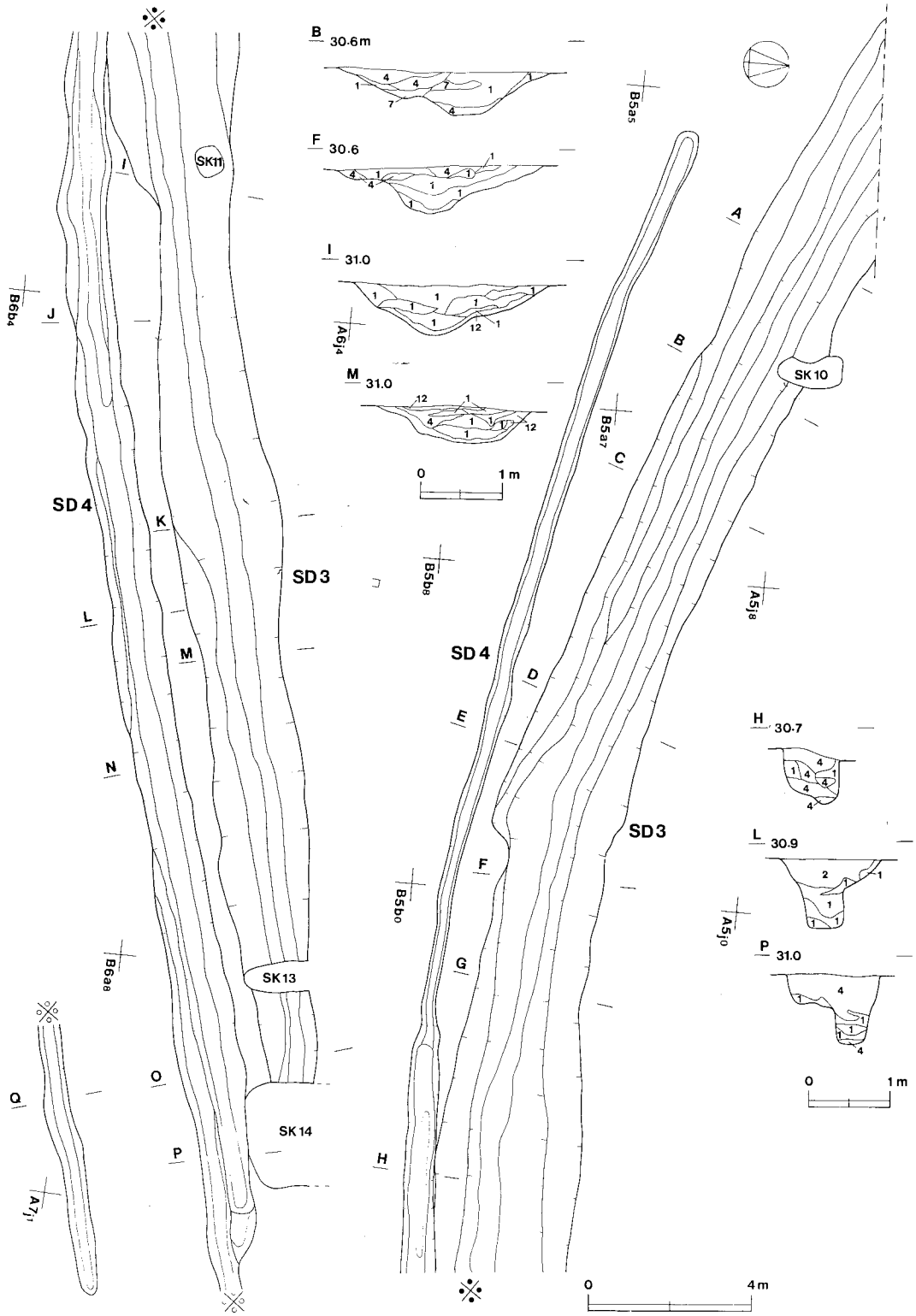
遺物は，須恵器片，土師質土器片，陶器片，土鍋片など12点が出土したが，いずれも本跡に伴うとは考えにくい。また，溝の南西側の $B6c_8$・$B6c_9$・$B6d_8$・$B6d_9$ 区の交点あたりを中心に大は100×90cm，小は60×35cmの粘土ブロックや雲母片岩の板石片が20～30点ほど出土しているが，まとまりは無く覆土中に散在している。本跡は時期・性格ともに不明である。

**第6号溝**（第24図）

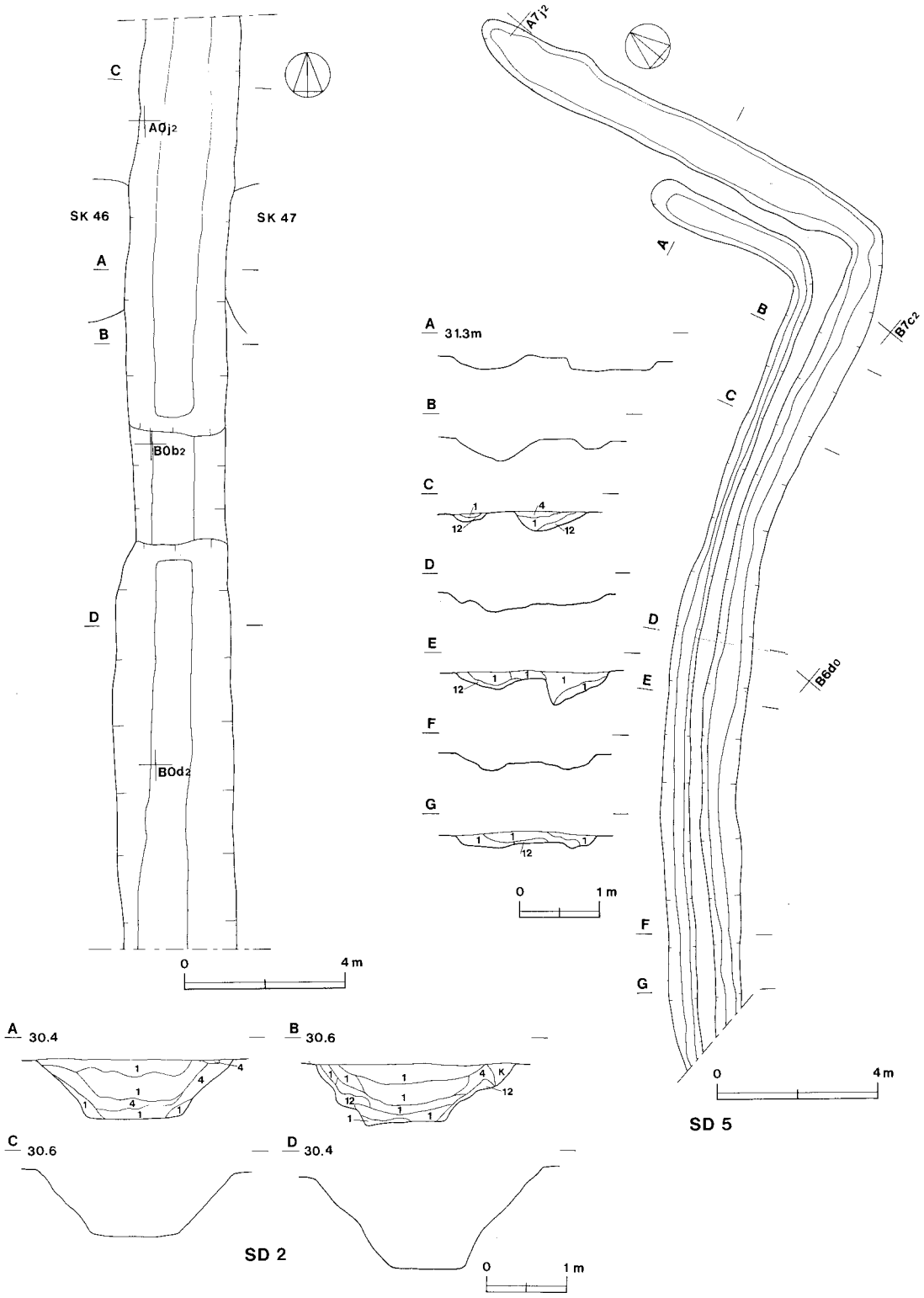
本跡は，調査区の西側の $B2a_6$～$B2d_6$ 区の4グリッドにわたって南北に延びているが，南端は調査区域外へと続いている。現存部の全長は11.0m で，最大幅は1.84m である。中央部の東側が若干浅く張り出している以外はほぼ直線的な溝である。南側から北側にかけて深さも浅く，幅も狭くなっていき，北端は自然消滅的に消えている。北側で28cm，南側で41cmの深さを測る。壁・底


B9d8
B9d9
A
B
C
A 30.6m
B
C
SD1
B2b7
B2c7
A
B
C
D
A 30.7
B
C
D
SD6
0
2m
A 30.5
C 30.5
D 30.6
G 30.6
E 30.6
J 30.8
Q 31.0
K 31.0
N 31.0
O 31.0
SD 3·4
0
2m

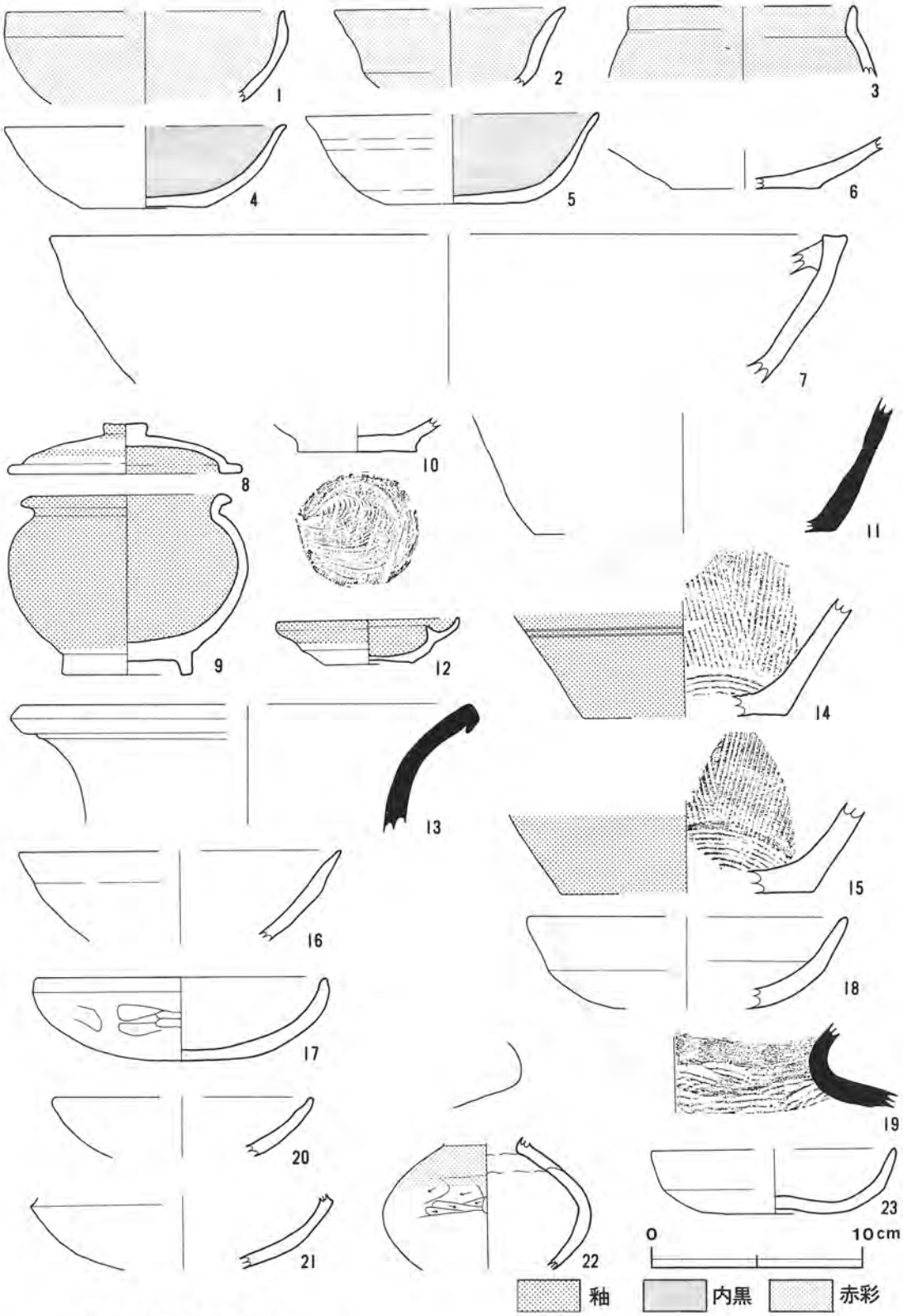
第24図　溝実測図(1)


B 30.6m
F 30.6
I 31.0
M 31.0
0 1m
SK11
SK10
SK13
SK14
SD4
SD3
SD4
SD3
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
B5a5
B5a7
B5b8
B5b6
A5j8
A5j10
A6j14
B6b4
B6a8
A7j1
H 30.7
L 30.9
P 31.0
0 1m
0 4m

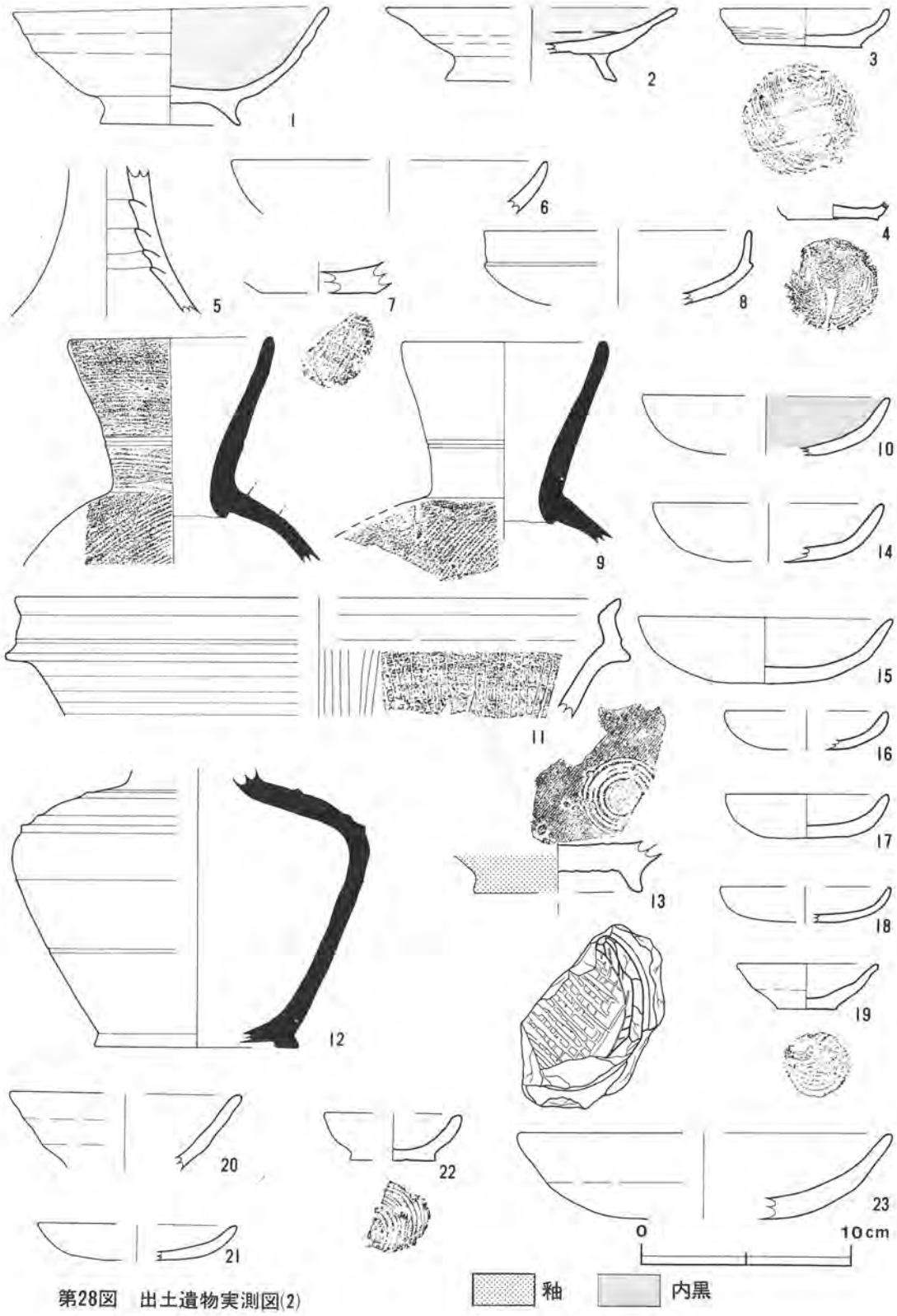
第25図　溝実測図(2)


SK 46
SK 47
A0j2
B0b2
B0d2
A7j2
B7c2
B6d0
A 31.3m
0 4m
0 1m
SD 5
A 30.4
B 30.6
C 30.6
D 30.4
SD 2

第26図　溝・堀実測図(3)




第27図　出土遺物実測図(1)




第28図　出土遺物実測図(2)

面ともロームで硬く，壁は外傾して立ちあがり，底面はほぼ平坦である。

覆土は，上位が暗褐色，下位が褐色，壁際が明褐色を呈する締まった土層である。北側では覆土が浅く，上位の暗褐色土は失われている。いずれにもローム粒子が少量から中量，炭化粒子が極微量に含まれている。凹レンズ状の自然堆積と考えられる。

遺物は，土師器片3点，須恵器片2点，陶器片1点の計6点が出土したが，いずれも胴部片で図示しうるものではない。これらは本跡に伴うものとは考えられず，本跡の時期は不明である。本跡は北から南への傾斜があり，排水溝的な用途が考えられる。

## 第4節　西側谷地形部の遺物

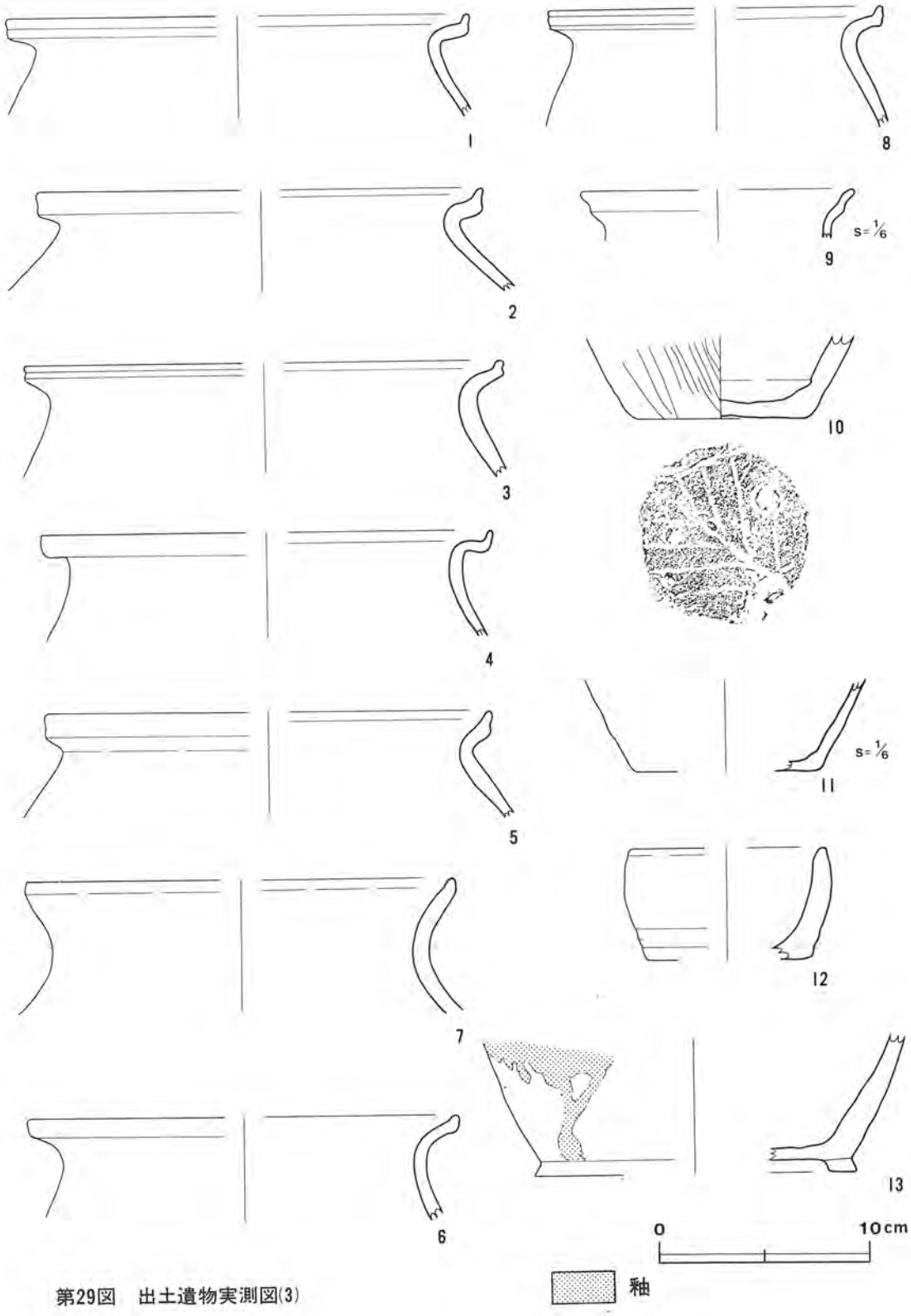
当遺跡の西端部からは自然埋没の谷地形部が検出されている。大グリッドではA1・A2・B1・B2の4グリッドにわたり，A区の南側とB区の北側に遺物が集中している。遺物は大半が，土師器と須恵器の小破片で，接合し得たものはきわめて少ない。遺物の量は，遺物収納箱（60×40×20cm）で8箱におよぶ。このうち，須恵器の甕3点（第31図4～6）はB2d1区から正位および横位の状態で，須恵器の坏，高台付坏，蓋などと共にまとまって出土している。また，B2c1区，B2e1区からも須恵器の坏，蓋などが比較的まとまって検出されているが，特に意識的に配置されたものとは言えない。これらは，標高28.7～29.0mの間に集中する傾向を示している。

土師器（第29図1～12，第30図15～25）

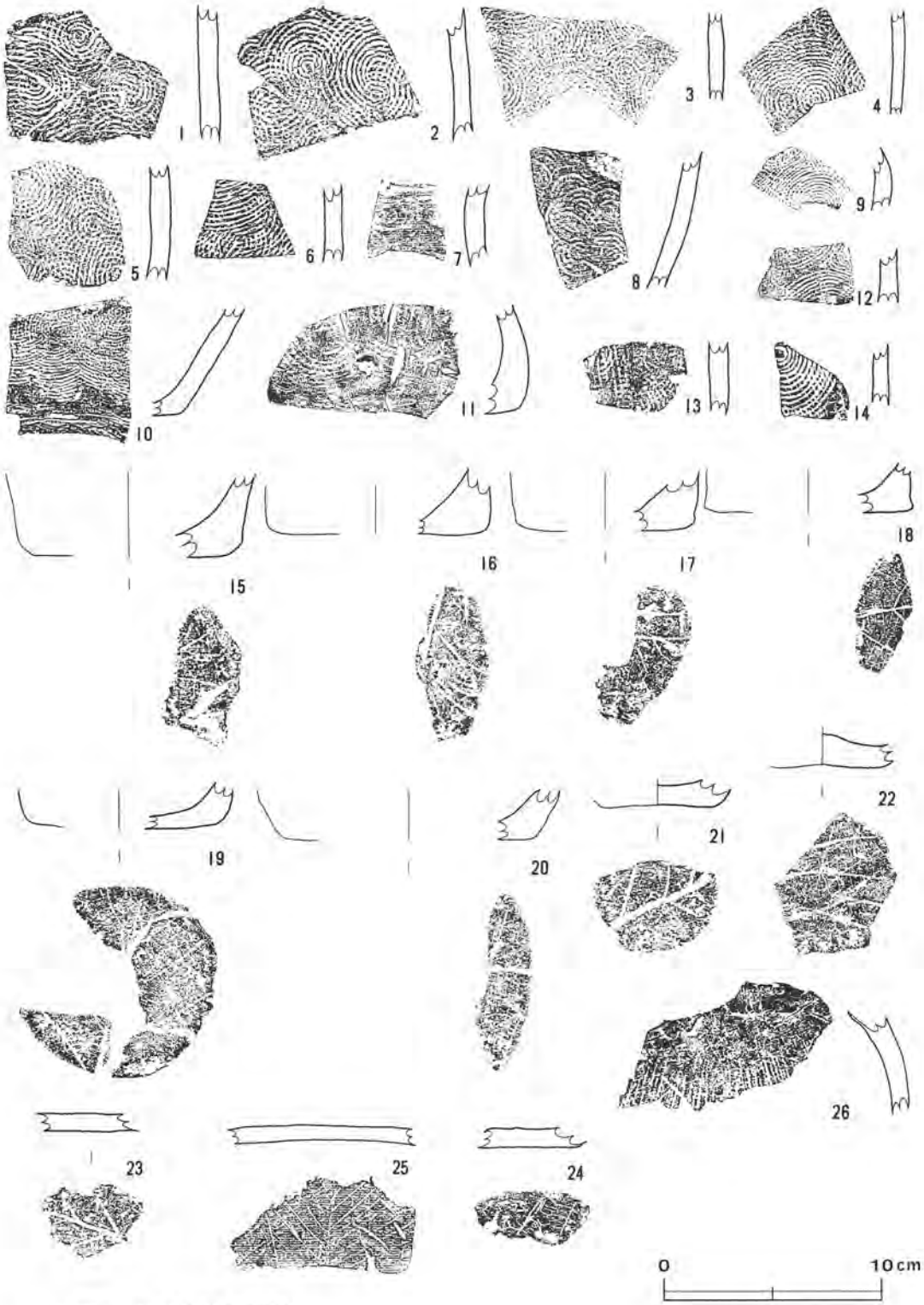
1～11は甕の口縁部および底部片である。1～4・8は口縁端部のつまみあげが顕著な一群で所謂「常陸型甕」の範疇に含まれるものである。5～7も若干のつまみあげを有するが，9は端部を丸くおさめている。10・11は底部片で，10は外面のヘラケズリが著しい。12は手づくねの痕跡を残す土器である。15～24は木葉痕を有する底部片である。25にはヘラ描きによる擬似木葉痕が認められる。

須恵器（第31図1～11，第32図1～35，第33図1～19，第30図1～14）

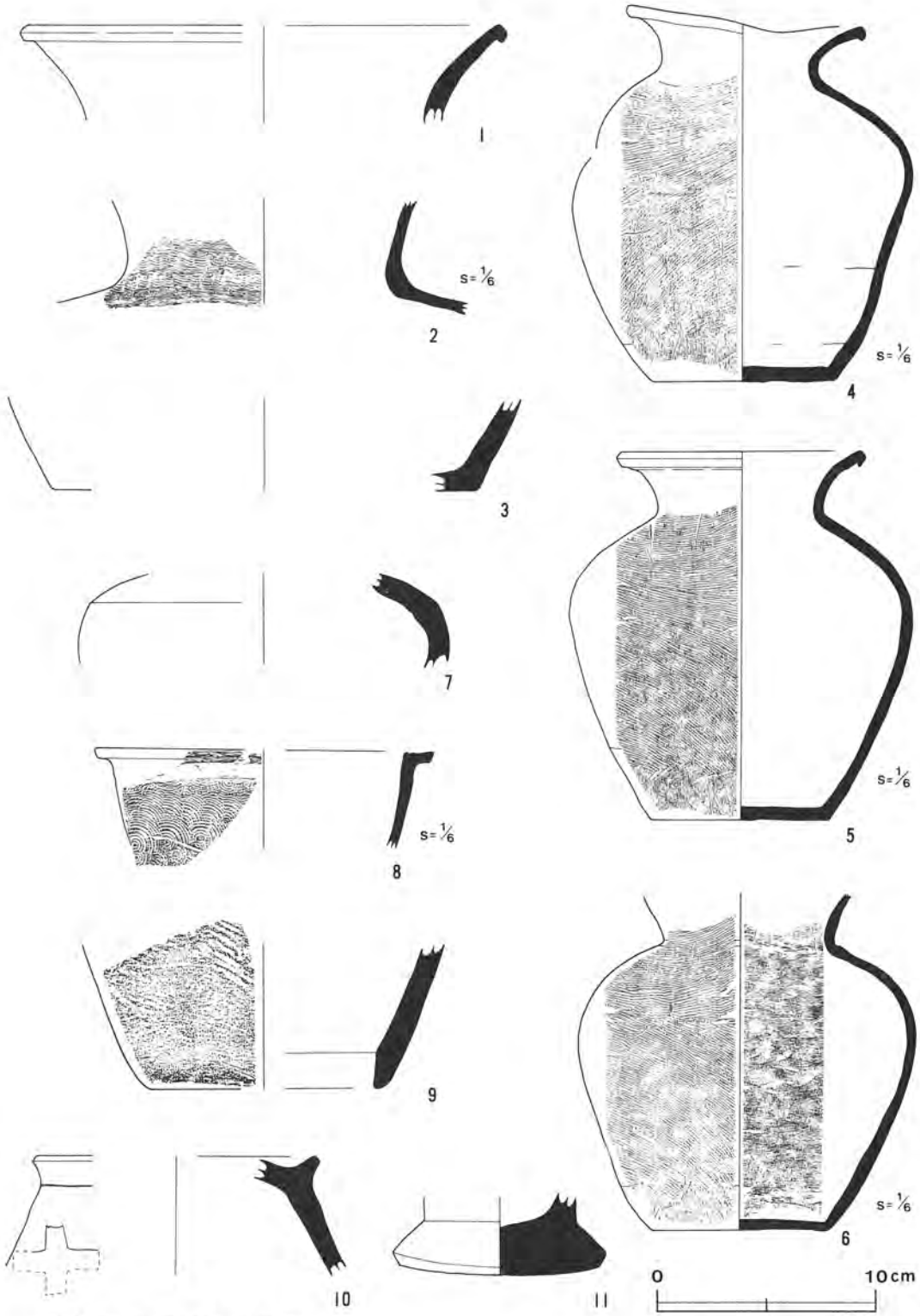
1～6は甕で，4～6はいずれも外面に平行タタキ目を有している。4・5は歪みが著しい。7は壺の肩部片，8～9は甑である。8の外面には同心円文のタタキ目が施されている。9は無底式である。10は円面硯の破片で，十字状の切り込みがうかがえる珍しい例である。11は擂鉢の底部片である。第32図1～10は蓋で，1～9は坏蓋で，鈕は扁平なもの，宝珠状を呈するものなどにわかれ，天井部は平坦に作出されるものとなだらかに降るものにわかれる。4の内面にはかえりが認められる。10は壺蓋である。11は高坏の脚部片，12は完形の短頸壺である。13～28は坏で，口縁部は直線的に外傾するもの，端部が外反するもの，内湾気味に立ちあがるものなどのバラエティがある。底部は平底で，ヘラにより調整されている。23・26は丸底気味となっている。



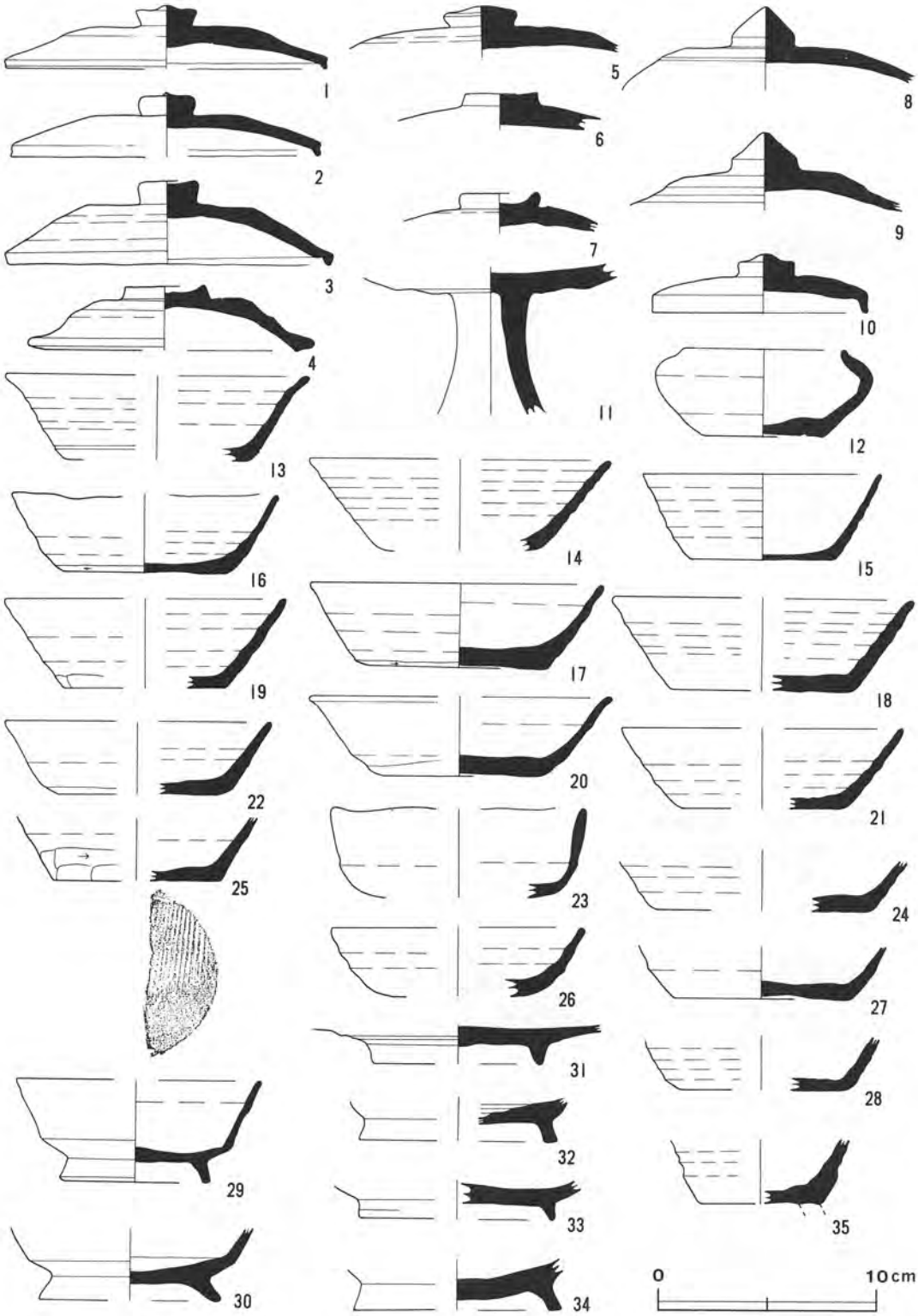

第29図　出土遺物実測図(3)



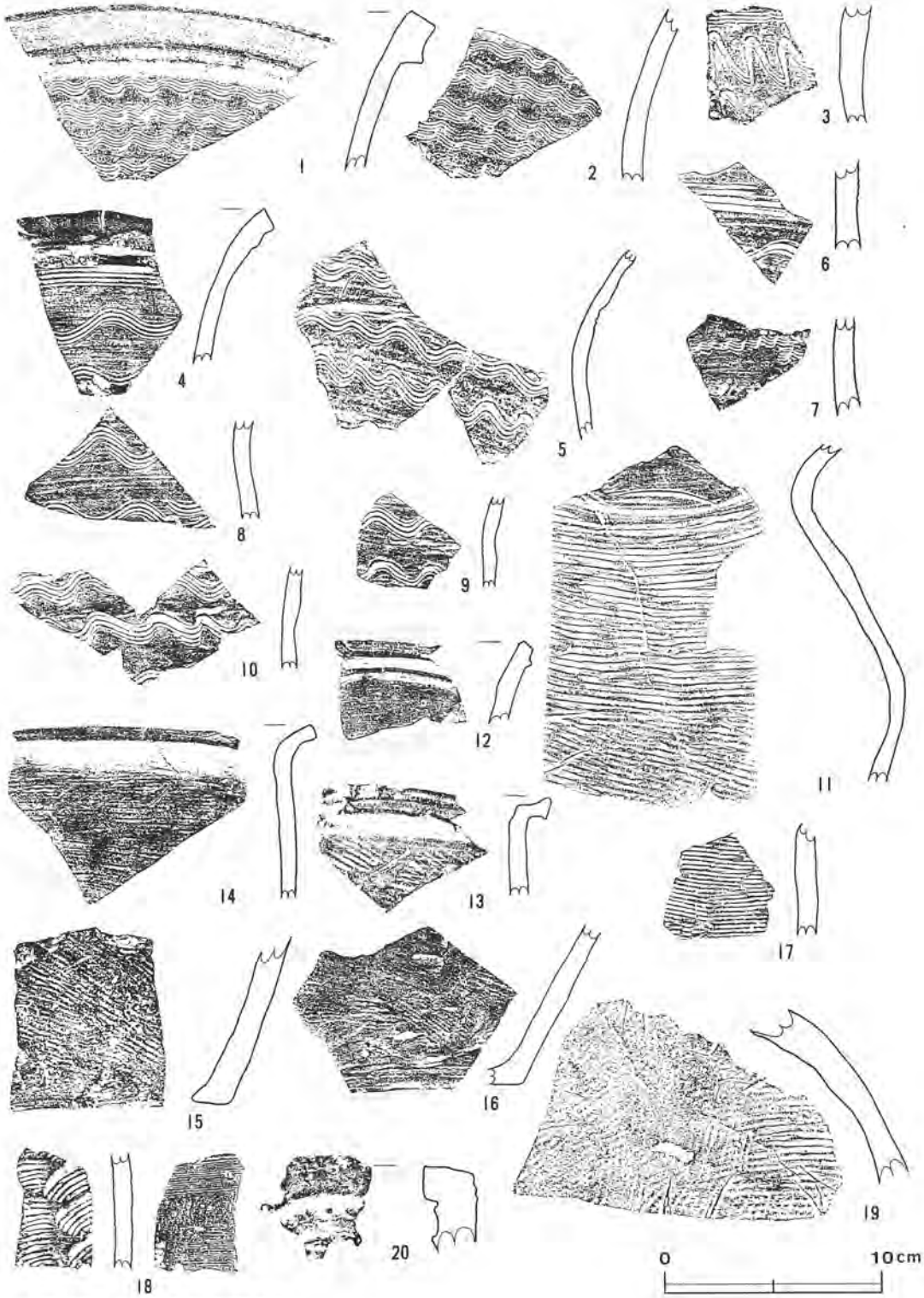

第30図　出土遺物実測図(4)




第31図　出土遺物実測図(5)




第32図　出土遺物実測図(6)




第33図　出土遺物実測図(7)

29～35は高台付坏で，高台部はハの字状に開いている。第33図１～19は甕ないし甑の破片で，１～10は波状文が描かれ，11～19は横位ないし斜位のタタキ目が施されている。第30図１～14は，外面に同心円文のタタキ目を有する甕の胴部ないし底部の破片である。

その他の遺物（第29図13，第33図20，第30図26）

13は猿投窯産の壺の底部片である。外面には白黄色の釉がかかっている。20は丸瓦の小破片である。珠文がわずかに残っている。26は朝顔形円筒埴輪の破片と思われるものである。

以上，西側谷地形部の遺物の大半は，須恵器の坏蓋や坏や甕などの形状などからみると，８世紀初頭から９世紀前半代の年代と推定される。

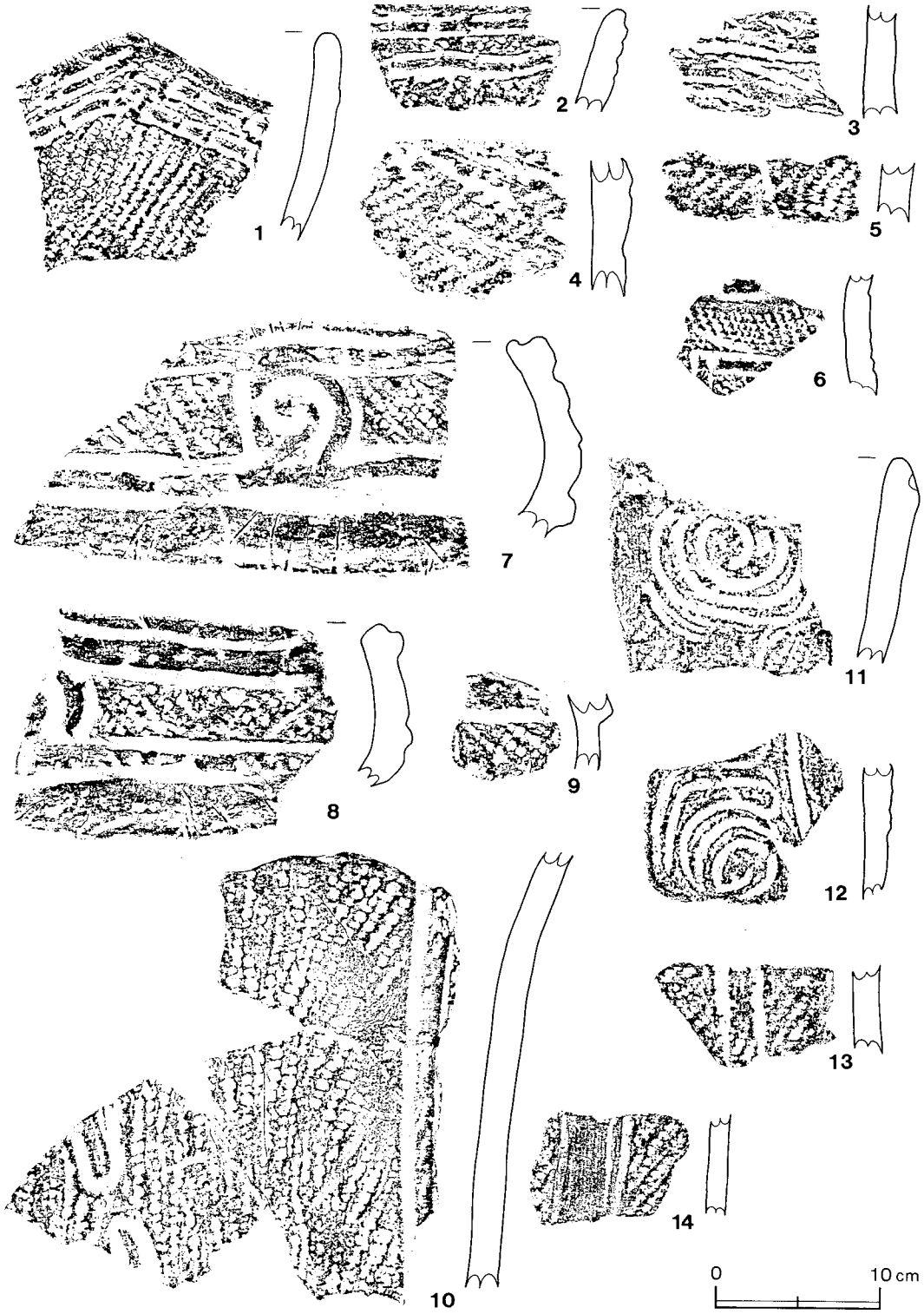
## 第５節　その他の遺物

当遺跡からは遺構に伴わない状態で出土した各時期の遺物が少量ずつある。縄文時代前～後期の土器片，石槍・石鏃，弥生時代後期の土器片，土師器・須恵器および土師質土器・陶器片，滑石の模造品，砥石などである。

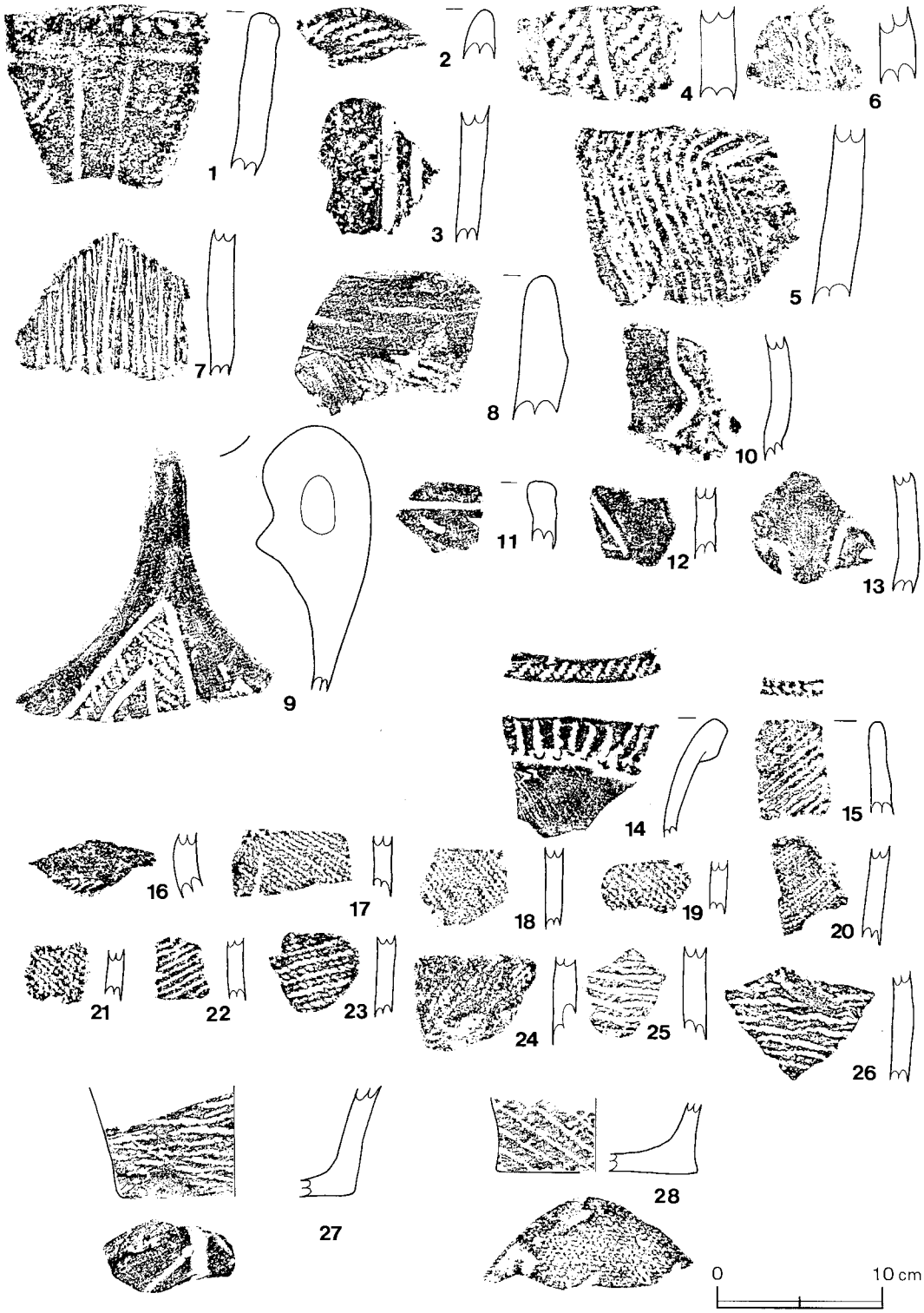
縄文式土器（第34図１～14，第35図１～13）

１～５は，胎土に植物繊維を混入する前期前半の黒浜式土器である。１～２は口縁部片で，単節LRの縄文地文上に２条の半截竹管による押引文を巡らしている。３～５は胴部片で，３は沈線文，４・５は単節LRの縄文が施されている。６は，半截竹管による区画内に密な貝殻腹縁文が充塡されている胴部片で，興津式土器と判断される。

７～14と第35図１～８は，中期後半の加曽利Ｅ式土器である。７～９はキャリパー形深鉢形土器の口縁部片で，単節RLの縄文地文上に隆線の渦巻文と長方形の区画文を描き，沈線を沿わせている。胎土は砂粒の他に長石，石英粒及び雲母片を含み粗い。10は胴部片で，RLの地文上に垂下する直線文と対向する曲線文が施されている。11・12は，縄文地文上に沈線による渦巻文が描かれる土器で，11の口縁部直下には刺突文が巡っている。13・14は胴部の小片で，共にRL縦位回転の縄文地文上に２条の沈線を垂下させており，14は沈線間を磨消している。14の内面には炭化物の付着がみられる。１は胴部片で，破片上端に刺突列と１条の沈線を巡らし，以下に直線的な磨消帯を施すが，磨滅が著しく文様は不鮮明である。２は波状を呈する口縁部の小片で，LRの縄文が施されている。３・４はRL縦位回転の縄文地文上に２～３条の沈線が垂下している。５～７は条線文が施文されている胴部片で，５・６は縦位波状に，７は雑に直線的に施文されている。５・７には長石，石英粒の混入が多く粗雑な胎土である。８は口縁部無文帯を微隆線で区画するもので，加曽利ＥⅣ式土器である。




第34図　出土遺物実測図(8)




第35図　出土遺物実測図(9)

9～13は，後期初頭の称名寺式土器である。9は鋭角的な波状口縁を呈し，把手は中空となる。器面には直線的な磨消縄文が描かれている。10は第22号土坑出土の胴部片で，磨消縄文内に刺突が加えられている。11～13は，刺突文と沈線文の組み合わせによるもので，称名寺II式に属するものと思われる。11・13は胎土に多量の長石，石英粒を含み粗雑である。

弥生式土器（第35図14～28）

14は，口縁部片がやや外反し，頸部を無文帯とする。口唇部に縄文を施し，口縁直下にヘラ状工具による刻目を有している。15は口唇部と口縁部に縄文を施文している。16～24は15と同タイプの頸胴部片である。25～27はこれらとは異なる間隔のやや粗い附加条縄文を施している。28は附加条2種である。

土師質土器（第28図20～23）

20～23は，土師質土器の皿で，大小がある。22の底部は糸切りされている。

砥石（第36図1～13）

1～5は第1号墳の表土中から，6は第7号墳の主体部から，7は第5号墳の表土から，12は第3号溝の覆土中から出土したもので，他はグリッドからの出土である。1は図示した2面が良く磨られている。2・3・5は薄く扁平なもので，2は表面，3・5は裏面が平滑に磨られている。5は8と同様に先端が尖り気味となる。6は表裏面が良く磨られ，側面に切断痕が明瞭に残る。断面の中央部がふくらみ，他と異なる特徴を有している。4は厚手の不整方形を呈し，表面のみがきわめて平滑に磨られている。7は左側面のみが磨られているが，他の面は粗いままである。8は表面が平滑となり，断面が片刃状を呈している。9は断片で，表面のみ使用されている。10は小形の細身のもので4面とも磨られている。11は表裏面を中心に磨られている。12は裏面がきわめて平滑となっている。13は表裏と右側面が使用されている。石材はいずれも砂岩である。

紡錘車（第36図14）

14は滑石製で，半分以上を欠失している。小形で扁平なタイプに属する。西側谷地形部から出土している。

石製模造品（第36図15・16）

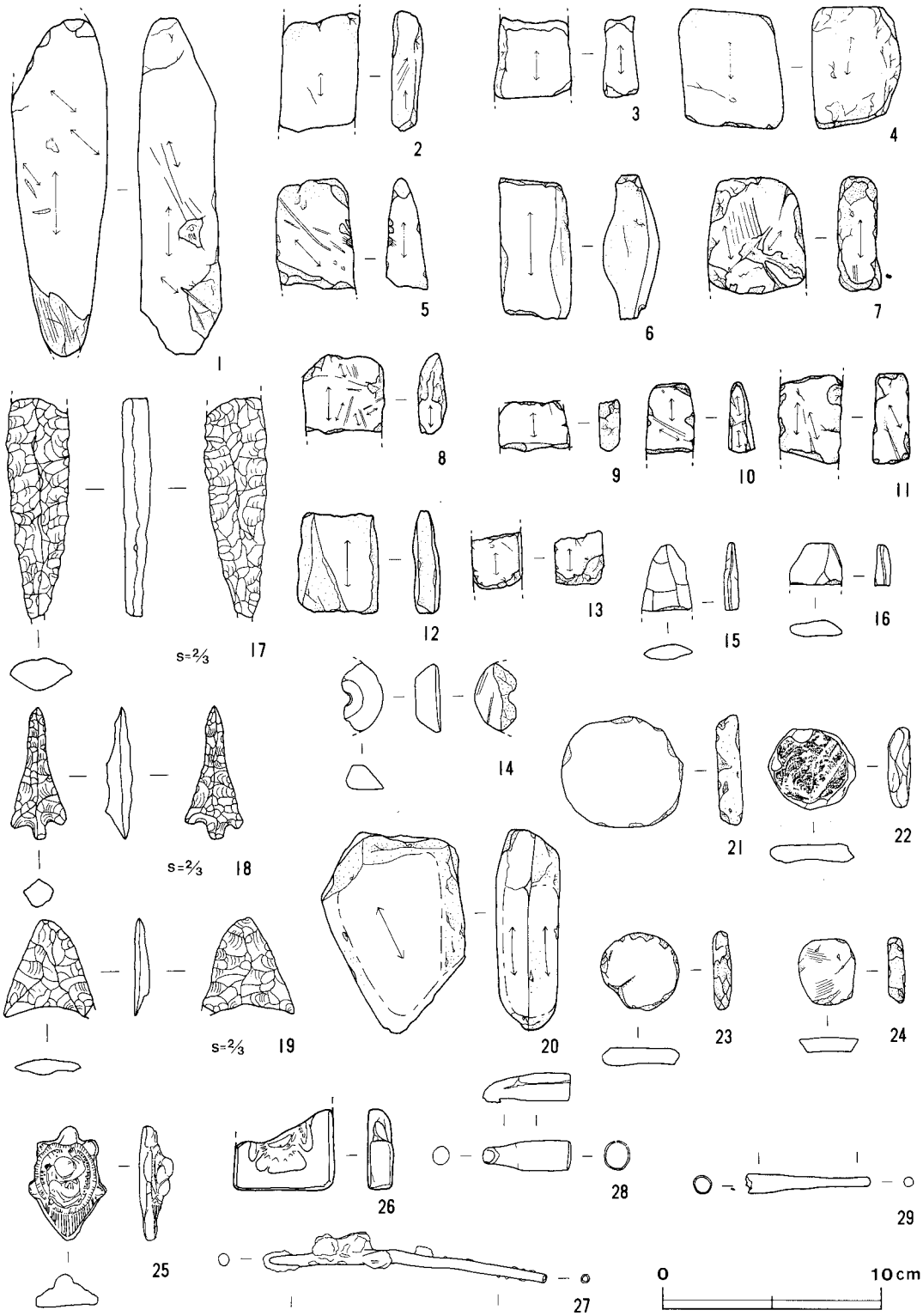
15・16とも滑石製で，いずれも剣形の欠損品である。剝落が著しい。西側谷地形部から出土している。

石槍（第36図17）

17は頁岩製で，基部の一部と先端は欠失している。断面菱形を呈し，並列剝離が施されている。第3号溝の覆土中から出土したが，形態からみると縄文時代草創期の所産と考えられる。

石鏃（第36図18・19）

18は頁岩製の有茎石鏃で，丁寧な剝離が加えられている。第5号墳の北東側の周溝から出土し




第36図　出土遺物実測図(10)

ている。19はメノウ製の無茎石鏃で，脚端部と先端部を欠くが扁平で丁寧な作りである。第26号土坑から出土している。

土製品（第36図20～26）

20は施釉陶器の破片を利用した砥石で，表面及び側面が平滑に磨られている。21～24は打ち欠きと一部研磨により円板に加工されたものである。21・24は陶器片で，21の表面に灰釉がある。22・23は土師質土器で，22は糸切り痕の底部片。25は泥めんこで，亀にのる人物を表わす。浦島太郎かとも思われる。26は泥めんこの土型と思われるもので，上半を欠失している。20は第32号土坑，21は第５号墳，22～26は第１号墳の表土ないし覆土中から出土している。

鉄製品（第36図27）

27は第７号墳の主体部から出土した中空の棒状鉄製品で，使途は不明である。

銅製品（第36図28・29）

28・29は第31号土坑およびグリッドから出土した煙管で，同一個体とは考えにくい。

# 第5章　まとめ

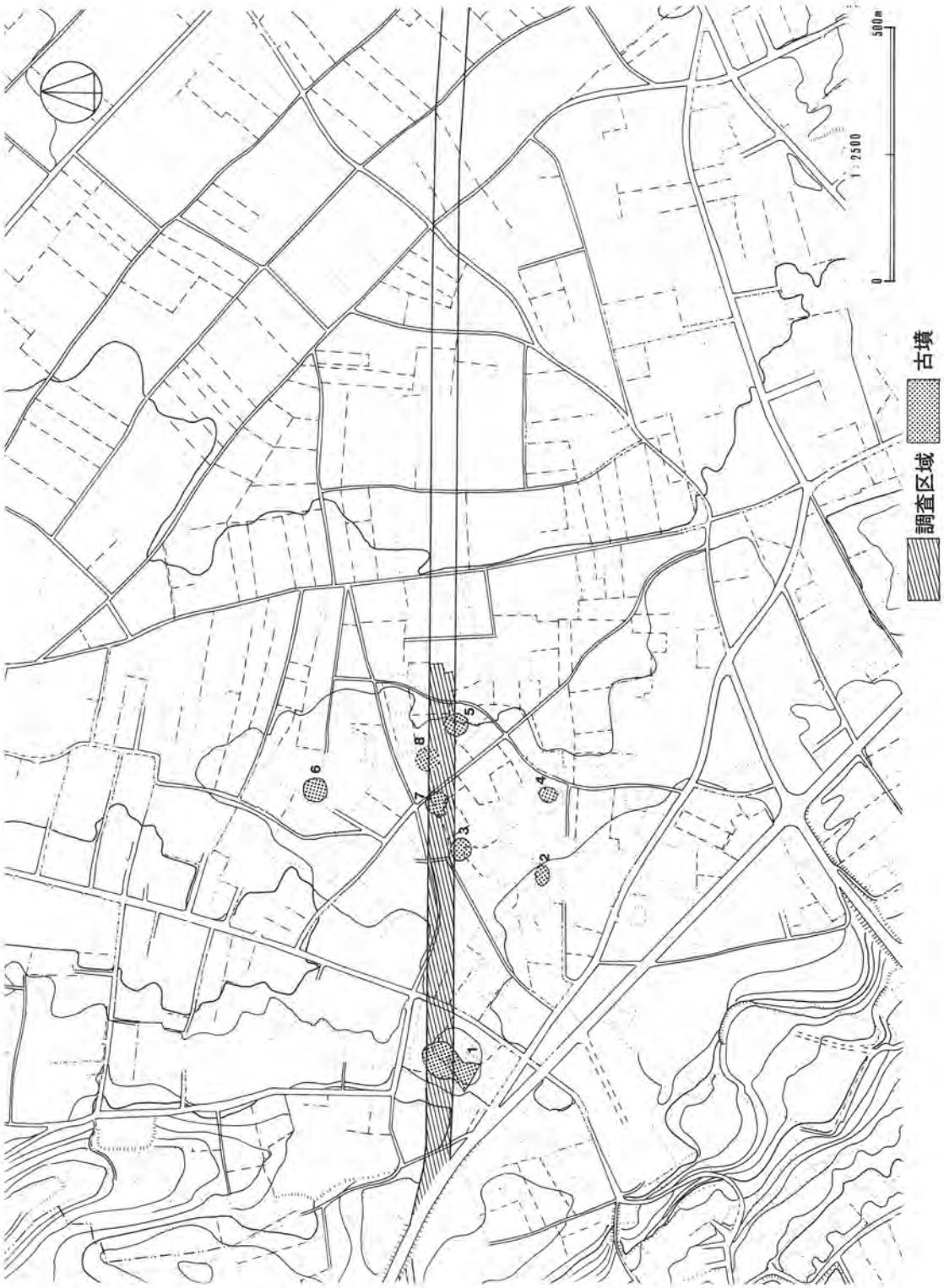
## 1　遺構について

### a　古墳

田宮古墳群は，これまで前方後円墳1基と円墳数基から成るものとして周知されてきた。[1] 今回の調査にあたっては，古墳の位置の略図が示されている茨城県教育委員会発行の『重要遺跡調査報告書Ⅲ』所収の「田宮古墳群」によって古墳番号を理解した。第1号墳は古墳群の主墳とされる前方後円墳で，火矢塚と別称されている。今回の調査区にかかったのは上記の第1号墳と第3・5号墳の2基の円墳であり，第2・4号墳は調査区外の南側に，第6号墳は北側に確認されている。現況が墓地となっている第6号墳[2]からは，以前に人物・水鳥・馬などの形象埴輪が出土している。

第1号墳は全長約45mの前方後円墳で，調査区には後円部の大半と括れ部の一部がかかり，主体部の横穴式石室は，玄室部の全容が明らかとなったが，羨道部は一部しか検出できなかった。墳丘は2段に築成されていることが判明した。主体部は調査前に盗掘されていて，骨片と雲母片岩の石片が出土したが，それ以外の遺物は発見できなかった。したがって，本墳の構築時期を特定することはむずかしいが，墳丘の形態や主体部の構造，僅かに伝聞される出土遺物から考えると古墳時代後期の6世紀代のものと推定される。第3号墳は，周溝の一部が調査区にかかったもので墳丘はエリア外に位置している。推定で径30～33mの円墳で，周溝の幅は5m余を測り，比較的大形の古墳と判断される。出土遺物はきわめて少なく，構築時期の推定はむずかしいが，完形の土師器の坏からみれば6世紀後半から7世紀前半と推定される。第5号墳は，墳丘と周溝の約3分の1が調査区にかかったもので，南側の3分の2はエリア外に位置している。推定で径43mの円墳と考えられ，周溝の幅は7～8mを測り，大形古墳である。主体部は検出されず，墳丘や周溝からの出土遺物もきわめて少なく，構築時期の推定はむずかしいが，6世紀代のものと考えられる。第7号墳とした古墳は，調査区の東側から検出した箱式石棺の主体部とこれを囲むように断続的に巡る周溝により命名したもので，墳丘を全く失っていた。あらためて周溝の形状から見直してみると，南西側に短い前方部を有する帆立貝式前方後円墳の可能性が考えられる。周溝の外径で25m程の小規模墳で，南西側の前方部と後円部の境に主体部が位置している。主体部は盗掘を受けており，鉄製品と砥石片などが出土しただけである。周溝からは高坏の脚部片が出土したのみで，時期判定はむずかしいが，古墳時代後期の6世紀代と推測される。

また，調査区の東側のA8・B8区の東半部から検出された第32号土坑は，覆土に多量の雲母片岩片と粘土を含み，撹乱を受けているが古墳の主体部の可能性が高い。この主体部を囲むように検




第37図　田宮古墳群分布図

出された第29・31・34・35・38号土坑は覆土や形状からみて古墳の周溝の残存部と考えられる。以上のことからその存在が推定される古墳を第８号墳と命名したい。周溝の巡り方から推測される墳形は円墳と考えられる。第29号土坑出土の須恵器の壺からみると，７世紀前半ごろの年代が考えられる。

以上から当古墳群は，第１号墳と第７号墳の２基の前方後円墳と第２～６・８墳の６基の円墳の合計８基の古墳から構成されるものと考えられる。今回の調査区にかかったのは第１・３・５・７・８号墳の５基で，そのうち主体部が検出され，墳形の全容がほぼ明らかとなったのは第１・７号墳の２基の前方後円墳である。第１号墳の主体部は括れ部に位置する横穴式石室で，盛土を切って構築されている。古墳の主軸方向と主体部の主軸方向は一致していない。第７号墳の主体部も括れ部に位置し，地下に構築された箱式石棺で，その上に盛土されていたものと推測される。古墳の主軸方向と一致する方向に主体部が設けられている。第７号墳と類似する古墳としては，隣接する土浦市の石倉山５号墳[3]，牛堀町堂目木１号墳[4]，同町観音寺山１号墳[5]などの例があげられる。いずれも前方部の短い墳形と地下構築の箱式石棺を古墳の主軸と同方向に設けるという共通点を有する。このタイプの類例を加えたことは今回の成果の一つと考えられる。

### b　土坑

当遺跡からは55基の土坑が検出されたが，遺物を伴うものがきわめて少なく時期不明のものが大半である。性格も不明のものが多く，第29・31・32・34・35・38号の各土坑が古墳の一部を構成するものとして把握できたにすぎない。この他の土坑としては，第23・26号土坑が長方形の整った形状を呈し，６世紀後半から７世紀前半代に比定される提瓶を出土しており，注目される。

### c　溝・堀

当遺跡からは６条の溝・堀が検出されている。第１号溝は図示していない他の同様の溝とともに第５号墳の墳丘の削除に際して根切り溝として設けられたものと思われる。第２号堀は当遺跡の東側をほぼ南北に縦断している。断面形は⅂⅃形を呈し，中央部に土橋を設けている。出土した土師質土器などから中世13～14世紀の中世城館跡に関連するものと推定される。付近に所在するとされる田宮館跡に直接結びつける証左は無いが，何らかの関連を考えて良いものと思われる。第３～５号溝は，現代の道路および畑の地境と一致しており，地境溝として掘削されたものと推定されるが，時期は不明である。特に第３号溝は田宮と高岡の地境とされている道路の下から検出されており中世ぐらいまではさかのぼる可能性が高い。第６号溝は遺跡の西端に位置し，底面が北から南へ傾いていることから排水溝と考えられる。時期は不明である。

## 2　遺物について

当遺跡からは縄文時代から近現代に至る多種多様な遺物が出土しているが，遺構に伴うのは古墳時代後期と中世である。遺物の種類としては土器・陶磁器・石器・石製品・土製品・鉄製品・銅製品がある。土器は縄文時代前・中・後期の小片で，黒浜式・興津式・加曽利Ｅ式・称名寺式土器である。弥生時代の土器も小片で，後期の附加条縄文を施すものである。古墳時代前中期の土器の出土は無く，後期の土師器には坏・高坏・坩があり，古墳の墳丘下や周溝から出土して，古墳の年代推定の手がかりとなっている。須恵器には壺や提瓶があり，第８号墳の周溝や土坑から出土している。奈良・平安時代の土師器・須恵器および灰釉陶器は西側の谷地形部から多量に出土しており，当遺跡の遺物の大半を占める。土師器は甕・坏を主とし，須恵器は甕・壺・坏・高台付坏・蓋・擂鉢・硯などが出土している。量的には土師器の甕と須恵器の甕・坏・蓋が多くみられ，擂鉢と硯は１点ずつにすぎない。灰釉陶器は猿投窯産の壺の底部片１点のみである。これらの遺物は８世紀初頭から９世紀前半頃の年代が考えられる。

陶器としては第２号堀から出土した常滑の大甕の破片や瀬戸の天目茶碗の小片などがある。

石器には縄文時代草創期の所産と考えられる石槍１点と有茎・無茎の石鏃が各１点ずつある。

石製品には砥石が13点，紡錘車１点，石製模造品２点がある。

土製品としては土製円板４点と陶器片を利用した砥石１点，泥めんこが１点みられる。

鉄製品は第７号墳の主体部から出土した不明鉄製品１点のみである。

銅製品は煙管だけである。

最後に，当遺跡から出土した須恵器の硯について若干ふれておきたい。当遺跡の出土例は破片にすぎないが，脚部に十字形の透しを有する点はこれまでに報告された県内の諸例[(6)]と異なっており注目される。この十字形の透しについて類例を探索してみると，隣県の福島県において３例確認されている[(7)]。また，五島美術館の『日本の陶硯』によれば，熊本県，宮城県にも類例があり，前者は９世紀，後者は８世紀に位置づけられている。北陸地方にも類例があると同書に記載されている。福島県の陶硯を集成された和深氏は，十字形の透しをもち，硯面が平坦となるタイプを奈良時代後半に位置づけておられる。当遺跡の例は硯面の遺存状態が良くないが，前記の見解には矛盾しないと考えられ，当遺跡の例も奈良時代後半に属するものと思われる。

註(1)　田宮古墳群の数については，以下の三書において前方後円墳（火矢塚）１基は変らないが，円墳の数は異なっている。ａでは７基，ｂでは６基，ｃでは５基としている。

ａ茨城県史編さん委員会原始古代史部会『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　1979年

ｂ新治村史編纂委員会『図説新治村史』　1986年

c 茨城県教育委員会『重要遺跡調査報告書III』　1986年

(2)　註(1)bにおいて第5号墳とされているものと同一の古墳と推定される。

(3)　小室勉「5号墳」　『土浦市烏山遺跡群　土浦市烏山住宅団地造成地内埋蔵文化財2・3次調査報告書』　茨城県住宅供給公社　1975年

(4)　茂木雅博「堂目木1号墳調査報告」　『茨城考古学』第1号　茨城考古学会　1968年

(5)　茂木雅博他『常陸観音寺山古墳群－第1次調査の概要－』牛堀町文化財保護委員会　1973年

(6)a 五島美術館『日本の陶硯』　1978年

b 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター「陶硯関係文献目録」　『埋蔵文化財ニュース』　41　1983年

c 佐々木義則「考察－硯について－」　『さらしい』第IV号　茨城大学考古学研究会　1987年　本書には茨城県陶硯出土遺跡地名表と文献目録が付載されている。

d 市毛美津子「水戸市内出土の陶硯について－大塚新地遺跡出土の陶硯を中心として－」『水戸市立博物館館報』第3号　1988年

(7)　和深俊夫「四郎作遺跡出土の陶硯について－福島県出土陶硯集成－」　『四郎作遺跡』いわき市教育委員会　1983年

# 終　章　　む　す　び

昭和62年10月に開始した田宮古墳群の発掘調査は，古墳５基，土坑55基，溝５条，堀１条の遺構と多数の遺物を検出して翌昭和63年３月に終了した。田宮古墳群に対する今回の調査は，国道125号の道路改良工事に伴うもので，調査面積は8,811m²である。

田宮古墳群は，これまでは前方後円墳１基と数基の円墳から成る古墳群として認識されてきたが，今回の調査により墳丘を失ってはいたが，帆立貝式の前方後円墳（第７号墳）が確認されたことは大きな成果である。主墳の第１号墳（火矢塚）は，主体部が盗掘を受け副葬品は検出できなかったが，横穴式石室を埋葬施設とすることは確認できた。墳丘も後円部は２段に築成されており，当古墳群の主墳とするに相応しい規模と形態を有することが判明した。

第３・５号墳は，墳丘および周溝の一部が調査できたにすぎないが，規模の大きい周溝を有する円墳と考えられる。第７・８号墳は，いずれも墳丘を失っており，断続的に巡る周溝の存在と箱式石棺を設置したと考えられる土坑から復元されたものである。第７号墳は北東側の周溝の一部が，第８号墳は北側半分がエリア外に属している。主体部はいずれも撹乱されていて，古墳に伴うと思われる遺物は検出できなかった。

以上のことから田宮古墳群は，今回の調査区域外に所在する３基の円墳を含めて，前方後円墳２基，円墳６基から構成される古墳群と把握された。しかし，調査区域外にも墳丘を失った古墳の存在する可能性は大きく，本来的にはより大規模な古墳群であったと考えられる。

土坑・溝・堀については，各遺構からの出土遺物がきわめて少なく，時期不明とせざるを得ないものが多い。また，性格についても充分に把握できたとは言えない。この中で第２号堀とした遺構は，出土土器から中世の所産と考えられ，付近に所在するとされる田宮館跡との関連が想定される。今後の調査・検討を期待したい。

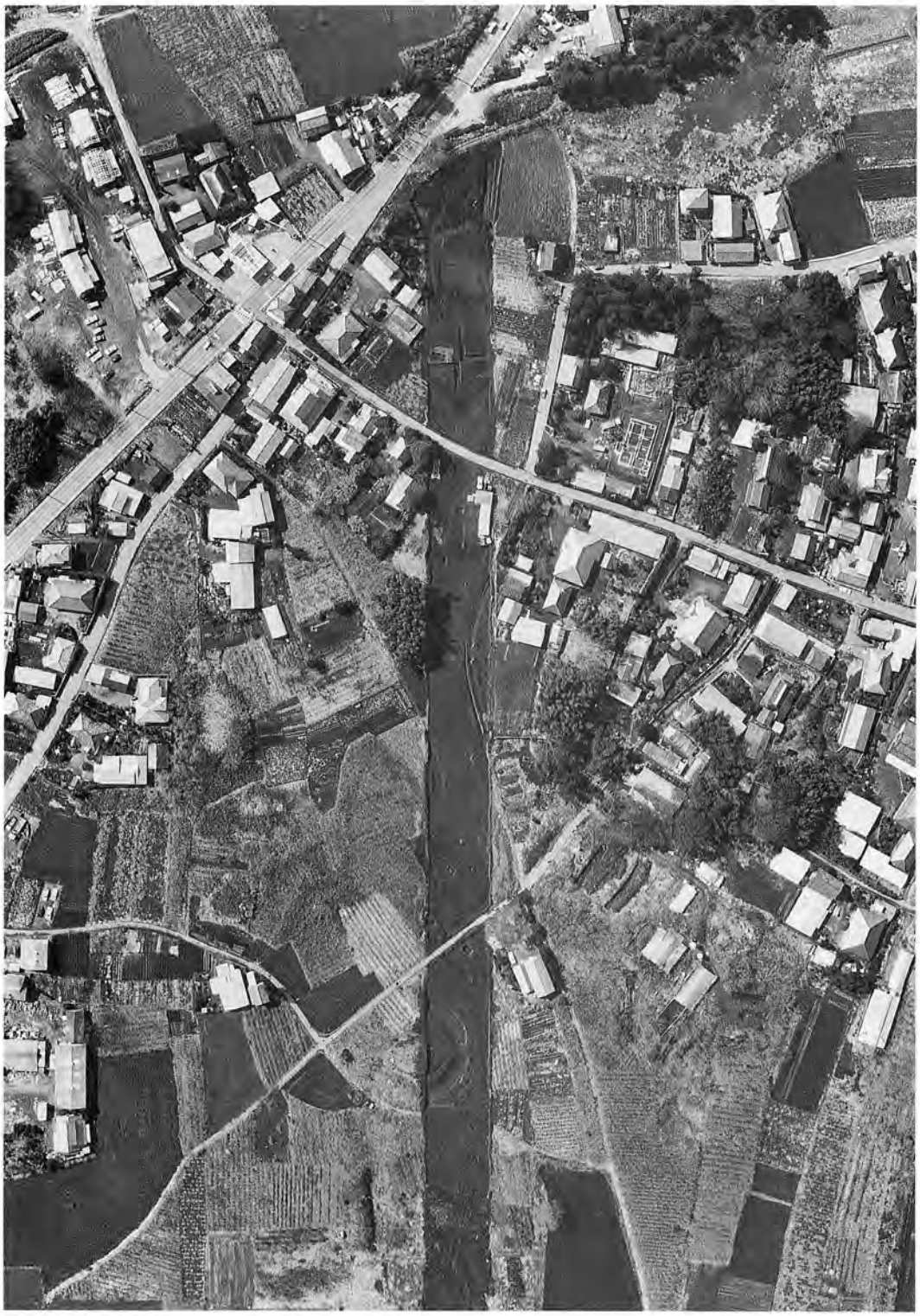
遺物については，縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代および中世にかけての土器などが出土しているが，その大半は当遺跡の西側の谷地形部から出土した土師器や須恵器である。これらは奈良時代から平安時代初頭の遺物と考えられる。須恵器の甕・坏・蓋には著しい歪みを呈するものが目立つことからみると，これらの遺物は窯跡の不良品とも考えられる。付近に存在するとされる田宮須恵器窯跡との関連も推測される。

田宮古墳群の調査と整理を担当し，調査成果をできる限り報告書に反映しようと努めたが，決して充分なものとは言えない。

なお，本報告書をまとめるにあたり，新治村教育委員会をはじめ，関係各位の御指導・御協力に対し，文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

# 写　真　図　版

ＰＬ17～22の遺物に付した番号は，挿図の番号と一致させている。番号なしは写真のみ掲載したものである。



田宮古墳群全景

第１号墳伐開前全景

第１号墳伐開後全景

第１号墳調査後全景

第１号墳

第１号墳東側トレンチ土層

第１号墳南側トレンチ土層

第１号墳主体部全景

第１号墳主体部遺物出土状況

第１号墳主体部遺物出土状況

第3号墳全景

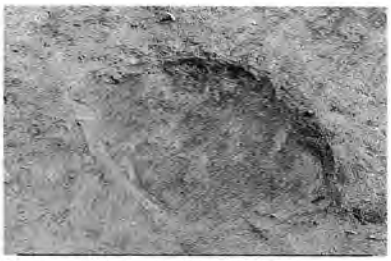
第5号墳伐開前全景

第5号墳伐開後全景

第1・3・5号墳

第1号墳西側周溝遺物出土状況

第1号墳西側周溝人骨出土状況



第1号墳西側周溝人骨埋納土坑全景

第3号墳北側周溝遺物出土状況

第3号墳西側周溝遺物出土状況

第3号墳西側周溝遺物出土状況

第５号墳全景

第５号墳全景

調査区中央部調査前全景

第５号墳他

第５号墳墳丘土層

第５号墳墳丘土層

第５号墳墳丘東西土層（西側）

第５号墳墳丘南北土層（北側）

第５号墳墳丘東西土層（東側）

第5号墳西側周溝土層

第5号墳西側周溝遺物出土状況

第5号墳北東側周溝遺物出土状況

第5号墳北東側周溝遺物出土状況

第5号墳北東側周溝遺物出土状況

第5号墳北東側周溝遺物出土状況

第5号墳北東側周溝遺物出土状況

第7号墳主体部遺物出土状況

第5・7号墳

第７号墳全景

第７号墳ａ周溝遺物出土状況

第７号墳主体部土層

第７号墳主体部石材出土状況

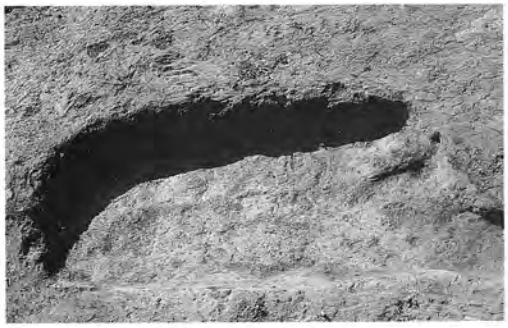
第７号墳主体部遺物出土状況

第７号墳主体部全景

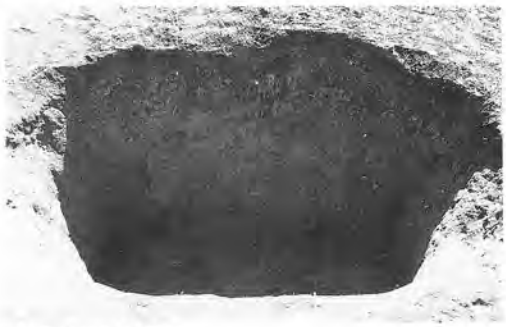
第７号墳

第1・2号土坑全景

第3号土坑全景



第4号土坑全景



第5号土坑全景

第6号土坑全景

第7号土坑全景

第8号土坑全景

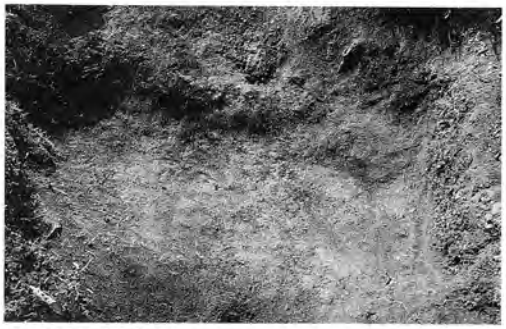
第9号土坑全景

第1～9号土坑

第10号土坑全景

第11号土坑全景

第12号土坑全景



第13号土坑全景

第14号土坑全景

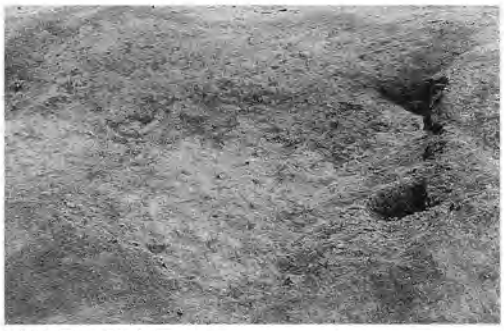
第15号土坑全景

第16号土坑全景

第17号土坑全景

第10～17号土坑

第18号土坑全景



第19号土坑全景

第20号土坑全景

第21号土坑全景

第22号土坑全景

第23号土坑遺物出土状況

第23号土坑全景

第24号土坑全景

第18～24号土坑

第25号土坑全景

第26号土坑全景

第27号土坑全景

第28号土坑全景

第29号土坑遺物出土状況

第29号土坑全景（東から）

第29号土坑全景（南西から）

第30号土坑全景

第25～30号土坑

第31号土坑全景

第32号土坑遺物出土状況（南西から）

第32号土坑遺物出土状況（南東から）

第32号土坑全景（北東から）

第33号土坑全景

第34号土坑全景

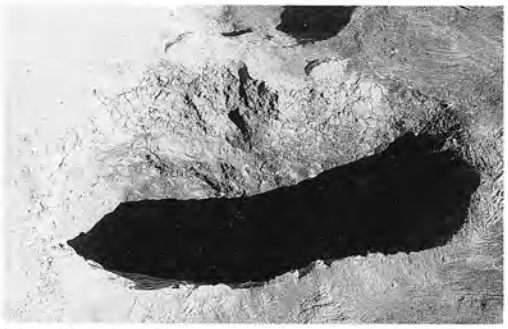
第35号土坑全景

第36号土坑全景

第31～36号土坑

第37号土坑全景

第38号土坑全景



第39号土坑全景

第40号土坑全景

第41号土坑全景

第42号土坑全景

第43号土坑全景

第44号土坑全景

第37～44号土坑

第45号土坑全景

第46号土坑全景

第47号土坑全景

第48号土坑全景

第49号土坑全景

第50号土坑全景

第51号土坑全景

第52号土坑全景

第45～52号土坑

第53号土坑全景

第56号土坑土層

第56号土坑全景

第57号土坑全景

第1号溝全景

第2号堀土層

第2号堀全景（南から）

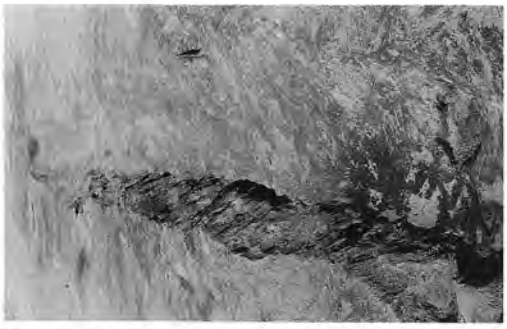
第53・56・57号土坑，第1号溝・第2号堀

第2号堀遺物出土状況

第2号堀遺物出土状況

第3，4号溝全景

第5号溝全景



第6号溝全景

基本土層

第2号墳全景

第4号墳全景

第2号堀・第3～6号溝他

甕

坏

硯

灰釉陶器

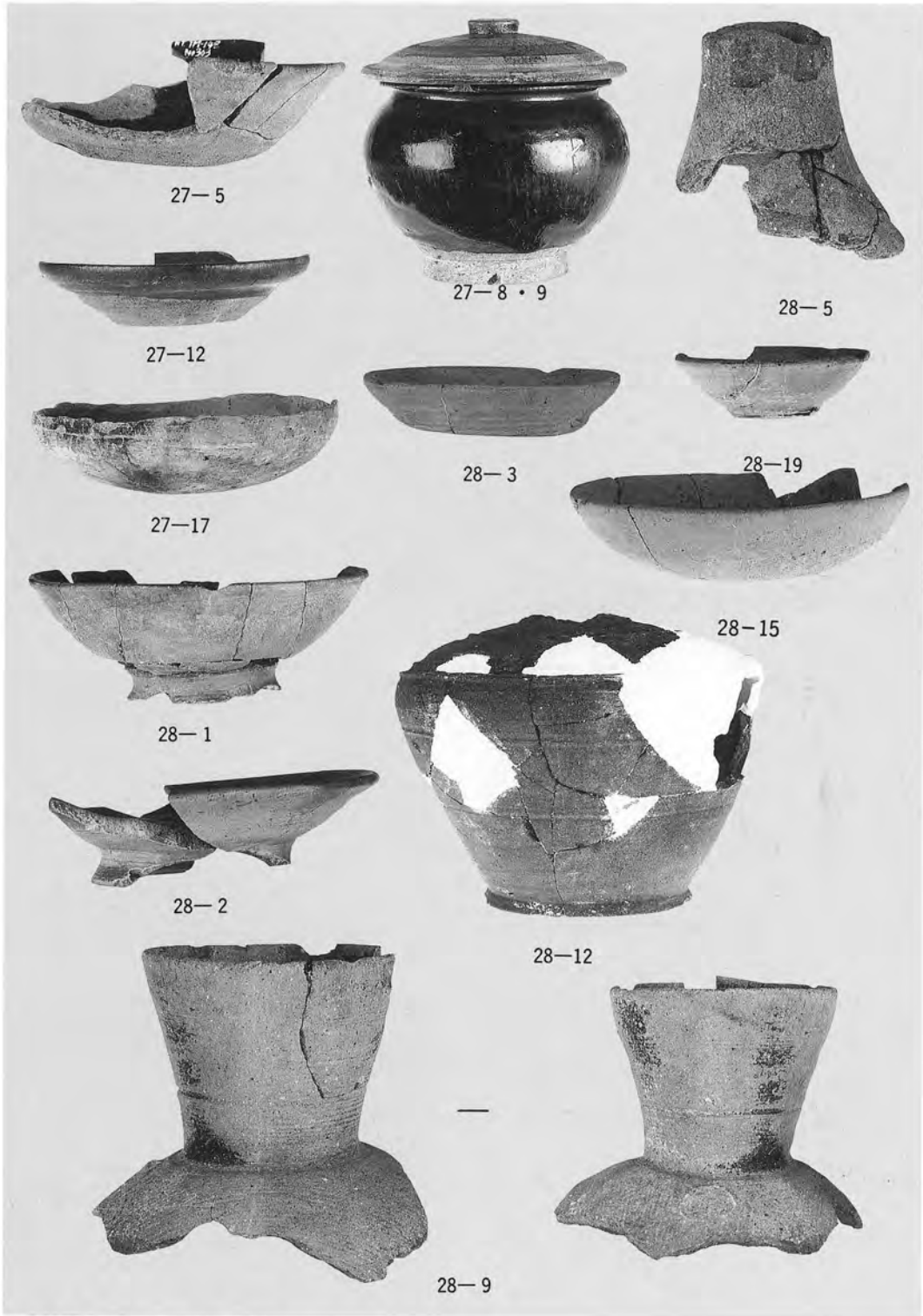
蓋

蓋

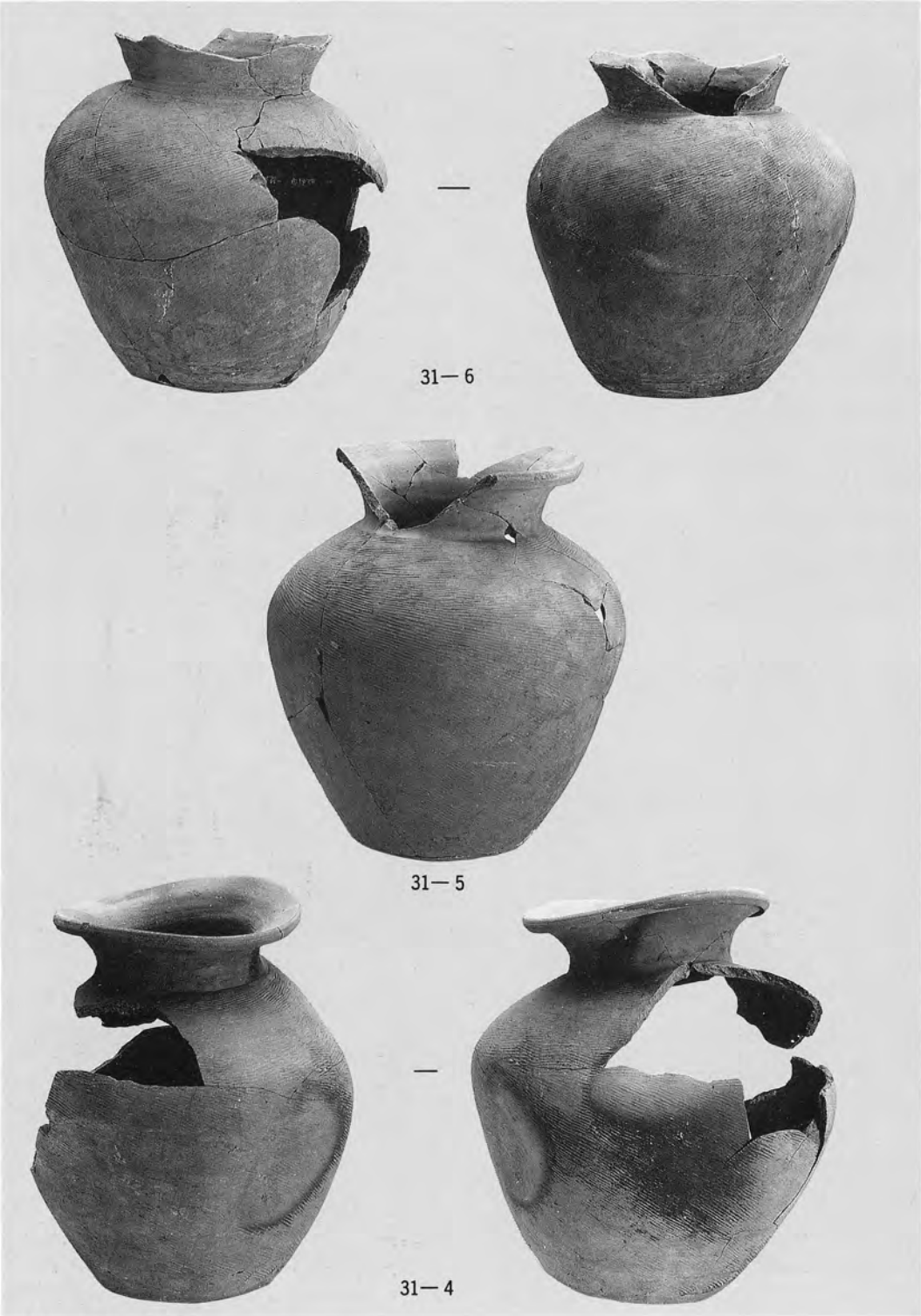
蓋

蓋

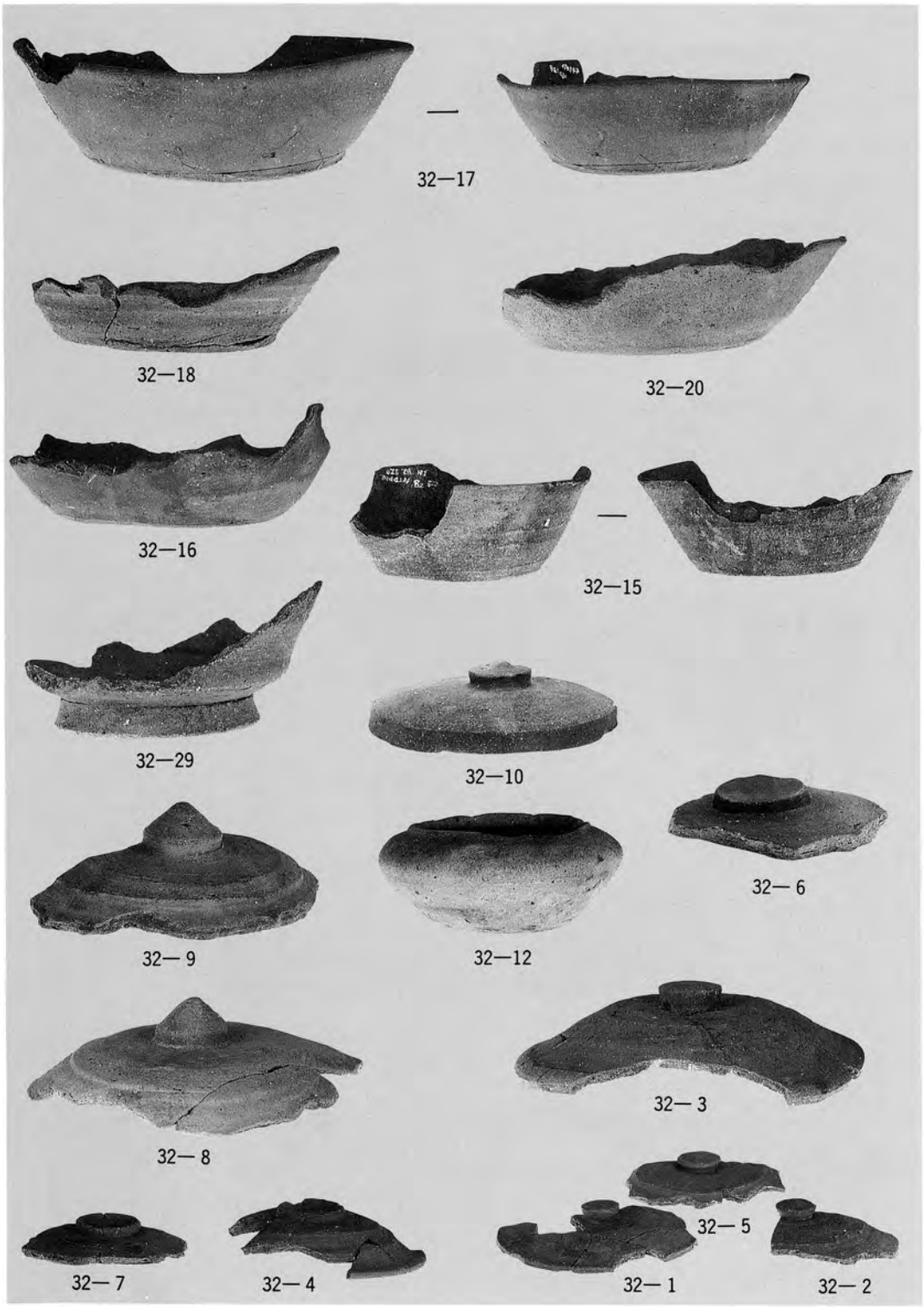
西側谷地形部遺物出土状況



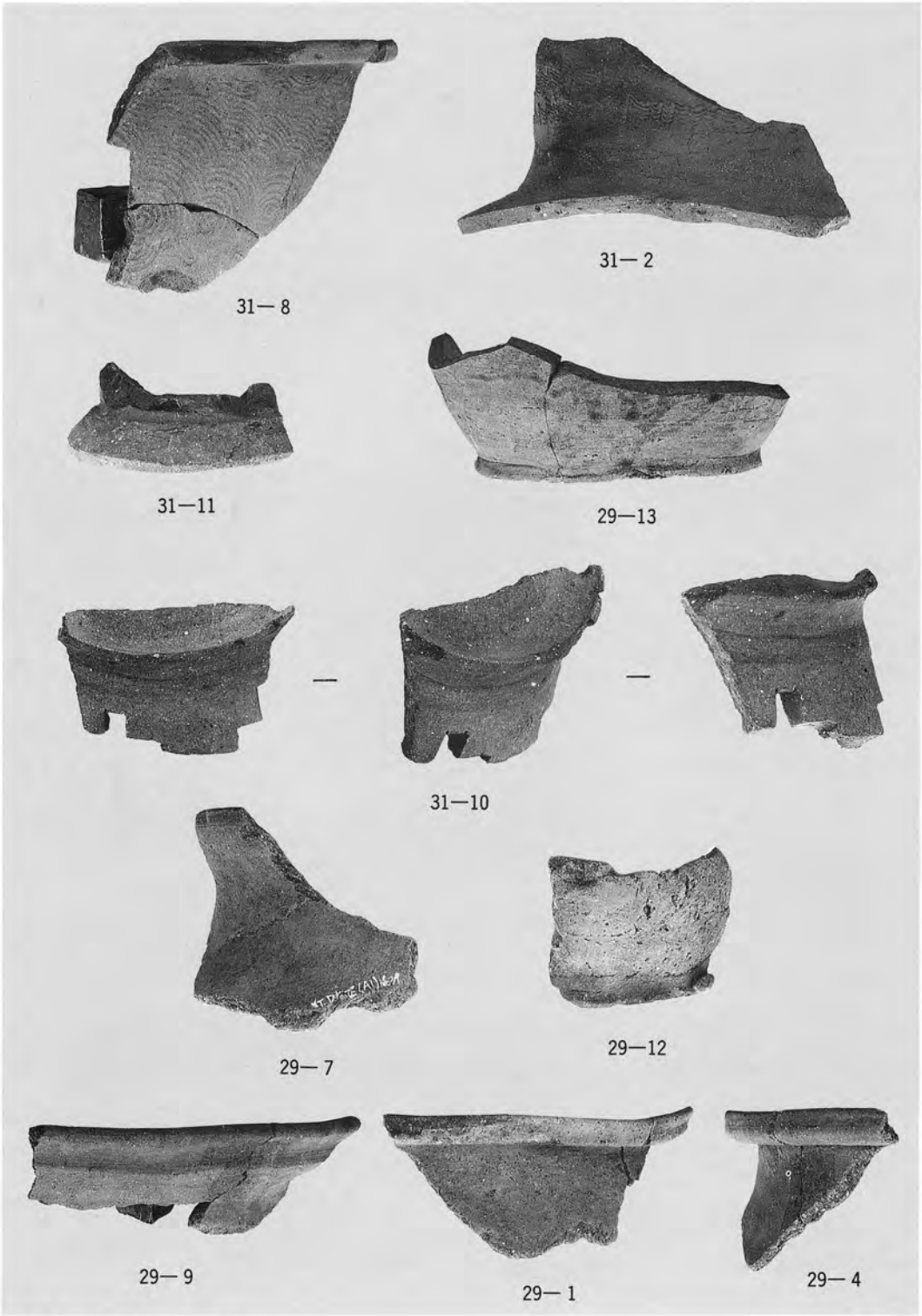

古墳・土坑・溝・堀出土遺物




西側谷地形部出土土器(1)



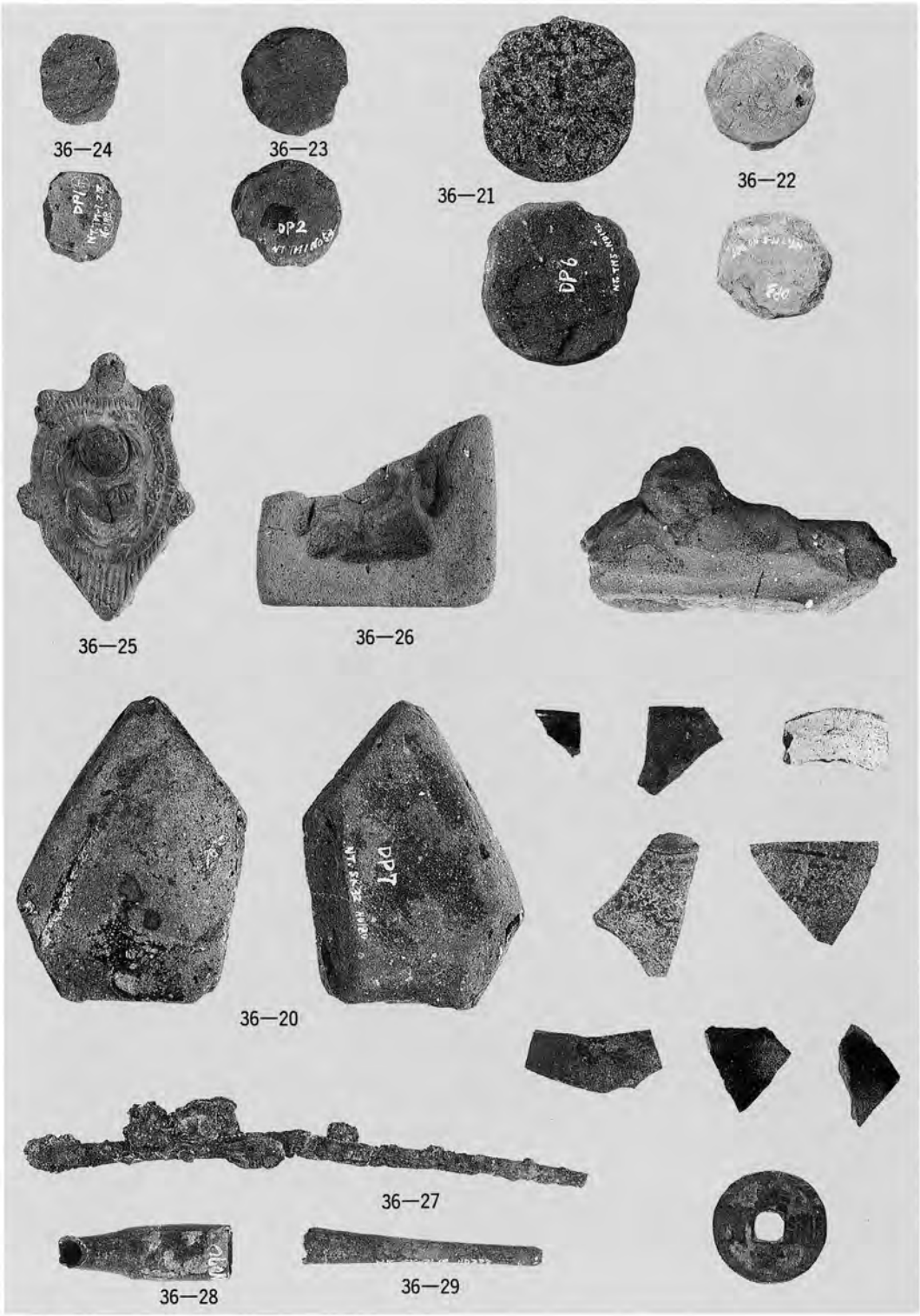

西側谷地形部出土土器(2)




西側谷地形部出土土器(3)

36—1
36—18
36—19
36—17
36—2
36—3
36—5
36—4
36—7
36—6
36—12
36—9
36—10
36—14
36—16
36—15
36—13
36—11
36—8

石器・石製品


36—24
36—23
36—21
36—22
DP1
DP2
DP6
DP3
36—25
36—26
DP7
36—20
36—27
36—28
36—29

土製品他

茨城県教育財団文化財調査報告第57集

一般国道125号道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

田宮古墳群

平成2年3月29日印刷
平成2年3月31日発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
〒310 水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　株式会社　三栄印刷
〒311-41 水戸市谷津町1－50

☎　0292(52)6501